

# 东亚先锋

1943. 9.

11.

1-2期

日文版

\*  
17  
166

東亞先鋒

EASTERN-PIONEER

創刊

1943. 9. 1



日文版

和平村東亞先鋒社





# 目次

創刊號

表紙

主席 林閣下 逝 告 典禮 弔 辭

汪 川 洋  
 和平村新生活  
 協會 一 同 (三)

卷頭 言

康 川 (四)

創刊 之 辭

莫 敏 漢 (五)

祝 詞

汪 見 治 (六)

中國文化史上に於ける三轉換点

朱 本 (七)

論 對 日 反 攻 へ の 展 望

岸 本 藤 (八)

論 妖 崩 壞 の 前 夜 に 喘 ぐ 軸 心 陣 線

斯 波 健 治 (九)

時 評 東 條 政 權 の 分 裂

池 上 敏 夫 (一〇)

在 華 日 人 反 侵 畧 戰 線 統 一 強 化 の 爲 に

基礎 委員會 の 提 唱 !!

長 谷 川 健 (一一)



時局展望

第三次長沙作戦従軍記 II

長沙の血痕

八木一男 (三三)

母

曾根 竜 (三二)

自由

爆弾

水 (三三)

時局長江春寒

(新編劇四脚本) 北 一 郎 (三三)

時局漫画 (三三)

ひろ 七 (三三)

随筆 和平村二十四時間

江川 洋 (三三)

(和平村新生活協會歌)

新編文藝部 (三八)

特輯!! 戦時日本の実情

本社調査部 (三九)

和平村便り

本社特派員 (五五)

祝・東亞先鋒・創刊

編輯 復天 (五八)

本社又夕ツフ

編輯 龍 (五九)

編輯後記

編輯 胡 (六〇)

江見 龍 (三二)

# 主席 林閣下の逝去典禮弔辭

本日全和平村を譽れて中國國民政府主席 林閣下の逝去典禮を營むに當り、我が新生活協會  
全員は祖國の喪を申し、フアシズムの害刃下より脱れ出し、自由と平和を渴望する在華日本人  
民の集會として此の典禮に、戮力參加し、以て誠心からの哀悼の意を捧げるものです。  
何となれば當面せる 閣下の地位は、東亞恒久平和の安定勢力たる中國抗戰事業の秀れた  
一大領袖たるに非ざり、かの米國野柳の談話の中にもまたの共同作戦中に偉大な領袖を  
喪へるものとして哀心よりの連擧が送られ、おられますが、現在の我々にとつては更に痛惜の  
念を禁じ得ないものがあります。而して又今日の東亞の情勢は中國抗戰の權力支持による全  
東亞住民の大同的協同事業によつてのみ、破敵日本フアシズムを滅滅し、最後の平和を取  
早期可能なるを明に證されつゝあるからであります。我々は東亞の先導者にして東亞の一大  
領袖たる 林閣下の逝去に對する全中國軍民の沈痛なる哀悼の波の中に心から融會し共に  
和せんとするものです。そして又かゝる哀々裡の中にも 閣下の遺囑によつてより強烈なる  
中華民族解放抗戰の意志なる熱意を我々は餘の隊伍と中國の全民族の層々に看取するのです。  
我々はこの更に明らかた國臣大同の抗戰目的を更定し、堅固なる門を今後も續行せんとす  
る彼の隊伍に誠然なる友誼的協力をすることを期に誓ひ、以つて 閣下の大志の百分の一た  
らへ且つ 閣下の遺囑を賜めんとすまふものです。

民國三十二年八月十六日

和平村 新生活協會 一同



# 卷 頭 言

混沌たる世紀の大運を時代の車輪が猛烈なる勢で加速的スピード  
 で暴走してゐる。生かすも生けるものはそれに乗まつて進みかかれつ長日  
 月に亘る不眠の闘争と停戦によりて全世界を暗黒のドン底に陥れ  
 た戦争フアンズムの及ぶは漸く傷ひ清められんとし暗黒なる陰光は  
 再び人類を自由と解放とせしむ希望と光明の光を放ちつゝある。

セオレーシヨンは今この世界を暗黒に陥れせしめて人類に救つものは  
 より以上の努力と奮闘であり。誰一人として手前たるまき退れぬ  
 「便乗しや」傍觀しは制度との存在を認めぬもののである。

眞理を擁護し正義の旗を掲げしや我々は「東洋先鋒」として進んで熱  
 情と公に闘争し正義を天下に叫びかけ、そして世界文明再建の旗幟  
 を掲げし此の大時代は我々の人類の二番としての責務を全うせんと  
 するものである。

# 創刊之辭

莫 敬 儀  
汪見治 記

蔣總統は其の著「中國の命運」中に述べて、

戦争の原因は何か？凡そ民族の間、國家の間、侵略性を帯びたる政治経済軍事の差違と行為及此種の  
意圖と行為より釐成せしむるところの關係と制度は總て戦争の原因である。

平直に之を容へば戦争の原因は即ち帝國主義である。故に第三次大戦の結束の爲には同時に帝國主義の  
結束を必す必要とし、かえりてこそ是れ永久の和平は初めて眞実に保証せしむるのである。

と述べられてゐる。

日本は東亞の帝國主義者である。今國の同盟國の勝利は僅に其の侵略行為の一つを結束せしむることは出来  
たが其の他の他軍はますます多くなつて決して漸減せられたるのではない。必ず日本民族の自覚、並に侵  
略戦争に因つて圧迫されたことを痛感し、自ら解放を求むることによつてこそ初めて和平幸福を克ち得る  
ことが出来るのである。

在華日本人の先覚者は善く此の真を認識し、ただに侵略性の政治、経済、軍事的行為を撲滅するのみならず  
亦其の意圖を剷除し、以て戦争の根柢を徹底的に取除くことに依つてのみ永久の和平を保証し、中國民  
族をして誠心誠意その意見を相互に披瀝せしめてこそ亞細亞の安定を確保せしむるべきであることと把握せしむ  
のである。

此等の誠見は切實なる体験と其の國家社會の内憂外患から生じたものである。前記の如くして各新聞紙  
上の意見を此處に披瀝し、友人の心を結ぶるべきである。

上ノ... 之ノ... 之ノ... 之ノ... 之ノ...

本國を創制するに於て、其の情状を十二分に発表せしめ、遂にはその國家民族を救ふ東亞を安定せしめしむるの志趣を露骨せしめんとするのである。

更に一歩進めて言へば、維新の所謂「亞洲民族の自由」と國家の平等は即ち世界の永久和平を保證する所以の

要諦である。此の如きことをいふは、かゝる故に宇定東亞の先聲となしたもので、その意は、を得た

ものである。

その祖國政府の社会が愛憎の意志に煩悩せらるに墜み、上下にとまれぬ批判のメス又は遂に愛して持取とな

りて其の奥底正慮を感となり肉體をかりて時局を批判し、或は小説の描寫となりて社会の真相を刺戟し或は

短歌となりて世界の正義を明にせよ、これは灼しく深刻なる意味を含むものであり、民主主義の自由を爭取せ

んとする動機であり、斯くの如き清き上を身と為し之を尊ぶ、情溢せしめ、受け止めたり、に恩顧を感得せしめ

るの如きや、徒に文字を以て華光を耀かし、僅に人格の陶冶に止まるのみである。

茲に本報の意入があるものであり、讀者諸君幸にこの美を味養せられんことを望むるのである。

一 完 一

# 和平報、東亞先鋒、創刊號

## 主持正義、大誓疾呼、振動愚迷、為東亞

### 民族福利、莫定學界、永久和平、的基础

軍持書つた也、是居事、其所區分、抑物也。



# 中國文化史上に於ける三要素

江見浩訳

今日「東洋光輝」が誕生した日です。私は此の力強い聲を聞いて喜、無限の歡喜を覺  
えました。私は此の誕生に際して何の誇りも無いと信じてゐました。今日果して喜ぶべき機會を得て、本當  
に喜ばしく、東洋光輝に思ふのです。

この人達... 日頃の美運... 世帯中から中國文化の瞭解を獲つてゐる人々です。私は「中國文化内  
題」に關して話をしてやうと考へる時、どうして一つは大きな難問にぶつかりました。中國は五千年の文  
化歴史をもつてゐます。此の五千年の文化の歴史を、簡明に説明することは、丁度大天評が「上部二十四史」を  
して何が説明し始はしぬんとするやうと言つたのと同じ難問を感じてゐるのです。

中華民族が現在此の様な偉大な民族に發展したことは、決して偶然では無く、又決して武力に依つて成つたもので  
は無く、全く自然の發展によつて偉大に成つたのであります。この自然の發展過程の中には、一種特有の文化を  
持つてゐると云ふことです。

現在の中華民族とその原國は色々あるが最大のもは、華南の一種特有の文化を持つてゐると云ふことです。  
中國文化發展史上に於いて、これと云ふものは、三つの要素が、夫々あることです。孔子は中國儒家の鼻祖で  
あり、中國の上古文化を大成し、秦漢の時代に秦の始皇帝が中國を統一して、中國内部の文化を全部  
統一し、長江の南、黄河の北、新文化運動は第三波の大變革を成したといふのであります。

中國文化は此の三つの要素を通じて、何時も前進を遂げて、決して後退はしてゐない。形の上は他民族の接觸か  
の壓力を受けたことはいふまでも、實質上には決して少くも影響を受けずはゐない。理由は既に話した様に中  
國五千年文化の發展が全く自然力によるもので、武力や権力による阻止するものが出来ぬものであります。

私の今日の目的は文章を書くこと、或は書く「東洋光輝」の誕生を祝ふ言葉を書いたかつたのです。文章  
を書くとしても、それはまだ此の文章が、その希望を満足させること、目出度ないだらうし、又各自  
幾七を想は願はぬこと、此の如き。

(克)



# 對日反攻への展望

岸本 勝

英米丹連のラシリア格奪・イタリー本土への攻撃  
 是年、二十一年河正政を挫けりフアシズム首領ムツ  
 リリーニを処す下台せした。ズエーデンはナチスの  
 一環からの鹿角を宣布した。同時に来た他方・リ細  
 成勢はただりる赤軍の経済の如き長期相対戦作戦  
 はずナチス主力軍をして露骨的消滅に迫らつゝある。

自ラプランドに於けるルーズベルト・チヤチル会談  
 下基づく英米ソの作戦——急つ全力を上げモドイツイ  
 集列し、ゆる慢速東で作戦し日本を解決する——が  
 切迫く生誕さ水少した。

欧州の匪徒ナチスの宣傳相ゲリペルスが如何に狂  
 言を飛ばせうとも、その前途は「早ければ今頃、星  
 くとも明後星は」が基本とし論断するが散見するに平  
 つた。

欧州情勢が、る急変を待たず、目前進定を見  
 せざる遠東戦局は最近の将来に於て、欧州に於て

進行せぬつゝある。對ナチスを包圍殲滅せんとのま、  
 日本軍の巨軍フアシズムに對し、も再渡されるべし

ものとし之重大視する。ト到つた。一第大次ルーズベ  
 ルト・チヤチル会談は、このことに關しての重要談話  
 包含されたるを傳へられし。これは尤に由因を明  
 めとする反フアシズム全東亞東人民の重大なる関心事  
 である。

●日・盟国の協定ある力量を以てすれば、對日自  
 攻の勝利は確し、盟軍は八ルホッ所である。しかし、意外  
 人評議家の論議を以て、ナチスが消滅したる後、  
 日本を解決するには尚ほ二年を要するであらう  
 にと本が危懼ある作戦ではなく、我等は如何に反  
 攻の有利なる客観條件を把握するかにまつて一日も早  
 く勝利を爭取することが必要と思ふ。

●對日反攻早期解決の可能條件は何か？  
 第一、日本の新領土を確保せしむる全在華地区の  
 防衛軍事設備が見了したの中に以て用務すること、  
 ある。

●その理目以下の通り。  
 日本軍の巨軍フアシズムは長年蓄積したる軍事力

日清問題解決は協約の成り立ちによる世界の発展に  
にのせしめを有するものを知り、協約の締結の日

の首領として南方政策及び南洋政策と云々と提議  
した。日清協約の作戦は協約に失敗した。日本

は並東に於ての独立作戦の危機を看過し、盟軍の反  
皮に備えるべき軍事設備に怠慢した。彼れりは有利

なる軍事設備と云々云々の情勢は軍事首領によつ  
て責任を背負した。しかし、軍事首領一應日本の軍事

と盟軍の協約が成ることも考慮したつたかである  
、かくて長期的により軍知を懸望し加つてゐる日本

大東は更に協約の協約生活と、超人的奉仕活動が  
協約と云、東南全領土に對しては半加工物資の運

集が重要である、以つて船舶及び重工業完成までの食  
ひの物資が要に必要と云つてゐるのである。本年第

八十二協約会では協約、ピルマ、フィリッピン、  
島、暹羅等、他各国民族に本年協約会政治的協定

・協約及び一層の協約を云々といふ協約を宣明し  
不見せる人々、協約を協約し以つて協約の協約に

前へんといふ協約しと云々ののである。(此の協約は協約)

協約は協約しと云々ののである。

並東の東東協約協約に成り立つること、協約  
判別である。

第二、協約として全面的反反と之の準備的協約と  
しての協約協約上の軍事協約協約が上げられる。

對日協約の早期協約のために全面的協約協約の  
不可協約すること、協約しては過去の協約に對して

うか、協約である。協約一協約他の一協約と言  
か、協約が如何に不利なるかは、協約で、協約は

ズベルトの協約した、協約である。といふものは、協約  
る協約は日本の軍事、アジア、アジアとして、協約

協約の協約に協約を、協約である。といふものは、協約  
に、協約の一協約して、協約である。といふものは、協約

を、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約  
協約に充分にあるか、協約である。

某、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約  
日本、土、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約

と、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約  
ことに、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約

協約の協約と、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約  
協約、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約

協約に、協約である。といふものは、協約である。といふものは、協約

あるのだ。且つ軍事基地が北方とて設備が小くない  
訳でもなく、又使りは決して死を怖う者もな  
い。一地主に於ける反政である限り日本は容易に堅  
固着しくは海軍を派遣してこれに處するであらう。  
殊にパイリツピン・真珠湾などに於て躊躇せる持  
殊遺憾は相違なきものを見ればなりぬ。

個々の場合はどうか？ それも確に日本にとつて  
大威脅でありう。しかしそれが一地主のみの反政で  
あつたならば、やはり決定的大打撃を与えて早期に勝  
利を享受するといふことはたやすくはなほない。  
・ 特別對馬反政の有利な解決は全面的に——西方地  
方からの反政による直轄本土への威脅と假令日本の  
軍需倉庫とありつゝある南方の奪取と日本軍主力の  
總退却の中國戦場上等々——一青は——你試期殆が必  
とあつて来る。

尤に日本軍主力の大半を懸着せしめておる中國戦  
場よりの反政は重要であらう。何故あり。今日、日  
本軍は又も中國征伐をくして存任し得ないもので  
ありその大陸上よりの配達は假の第一の死を意味し  
・ 且つ、これこそ日本軍事のアシストらうの威力を決  
定的に弱きせしめ得る有利な軍事基地を隨時に造成

かく日本軍事のアシストらうの最終的思案を制し得  
るものが中國戦防だとすれば、甚而差し迫つて懸  
されるものは、中國戦場上の軍需の増強でありう。  
そのためには不充たを空遣りておく陸上よりの大量  
的中國輸送が必須であるから海陸軍は陸上諸の奪  
取が先決問題とホつて来るであらう。(留つて大論議  
社説も此の必要を説いた)。

目前の世界政局がら見てこの案の主張は決して遅  
すぎるとも早すぎはなからう。然してそれ可能性の  
充分にあることである。曾つてケソアツト將軍府十  
台の飛行機を中國に派遣すれば、對日制圧の可能は  
ることとを論じたが、更に確實な早急實現のためには  
・ 其の他の近代制裝備を必要とする、これらのこと  
は、今日 一日の飛行機十台を産する大米國にと  
つて易々たることだからである。

第三に必要とするものは政府の措置である。

本月四日、英因りて中國の名將次部長東英急料、  
中國の對外關係を聲明せられた。……中國は失  
地の收復を未だめるが、決して領土の野心はなし。中  
國の越南及び雲州東南部、其の他の國家に對する保  
保は、聯合國の一份子としての地位より出發しての  
る。……中國は失地の收復を未だめ、並びに朝

の、独立と望み、日本の政府は民主政府と求  
ることを希望してある。蓋し日本が他ほその他  
の方式の政府の統治を受ければ、必ず中國及び世界  
の感傷とあるがうである。

更に此の言は偉大なる遠眼と云ふべきであらう  
。何故乎此の言は、益々中國の正義抗戦を全  
世界に開明せるものであり、且つ戦後、遠東各  
國に對する賠償亦る處置の懸念亦る遠東の反  
ファシズム的各民族各人民として、蓋して中國  
の聖なる抗戦を支持せしめ、以つて戦争の結束を早  
からしめるに効果あるものである。

我々は日本の軍事ファシズムを反対し、これと  
無用なことによつて自由と平和を爭取する日本人  
民として率直に言はう。

今日、日本人民は誰が戦争の挑發者  
であり誰が日本人民の自由と平和を期  
奪し、戡禍と軍事監獄然たる生活の中  
に陥れだが、誰が眞の敵かを一兵卒が

り一勞働者に至るまで皆捕らへ中がら確  
認してある。だが戦争に敗ければ亡国する、奴  
隷し亦ければ侵略されるは等々の危機が、彼らと野  
賭させ軍事暴力下に脅迫せしめてあるのである。

若し、一貫ひかざる危機を徹うの念頭  
から消滅することが出来たならば、日本  
人民は当然として中國抗戦と提携し、  
日本軍事ファシズムの侵略組織と内  
部より致命的破壊に導くであらう。

東外長の西原照四郎対日反攻に最も正確なる批評  
をよめるものであり、遠東恒久平和獲得のために備  
大木俊則を果すものである。

現に在日露人民は、これらうのため  
に〇〇〇名といふ少くもが動きつゝある

八月二十五日

# 論 文 陣 壕 の 前 夜 に 喘 ぐ 軸 心 陣 線

新 波 健 治

序

表裏極まりなき動乱を及ぶ、成程は今やその最高潮と  
突破せんとしてゐる。

即ち日独伊の三強敵者をしてその根幹をなすを世界法  
西期主義の崩壊と同盟國の民主主義勝利は今や決定  
的段階へと近づいてゐる。

斯く複雑多岐なる戦時と重大政局の動搖の岐路に立  
つて我等が茲に雑誌『東亜光輝』を発刊し同時に此  
の紙上に若干所感を論述することの出来た事は誠に  
欣快として止まない處である。

## 夏季攻勢とヒットラー

蘇聯の対独夏季攻勢は、トルコシスに於ける独軍陣  
地の爆轟に依つて開始された。

言ふまでもなく之は蘇聯が、地中海の独軍に猛攻  
を企圖せんとするものであり、**第一、蘇軍タンク隊は**  
クルクヌ南方の独軍の侵入を阻止し全面的反攻を  
開始したのである。

12  
是時ヒットラーも既に夏季新政勢を行かば、蘇連に  
於ける現有兵力二百十師及びイタリー附屬各國の遠

征軍百余師と更に五十万の兵力を四十に近いたんぐ  
数千の飛行機を擁護なし徹底した夏季新政勢を敢行し  
たのであるが、而してナチスの此の新政勢は即ち蘇軍  
の強固なる反攻に依つて粉砕されその結果は單にナ  
チスがヒルフライド附近のニケ村落を占領したに過  
きぬ、ナチスがこの戦争に依つて損失したものはタン  
クだけで二十輛に達してゐる。

吾人は斯く思ふが、ナチスが今次夏季新政勢失敗の  
原因は第一制空權を採取することが出来なかつた事  
柄蘇軍の主要防線の突破が不可能であつたこと、更に  
蘇軍の空國なる実力と戦術に依るものであると。

之等は言ふまでもなく偉大なる領導者ヒターリンと  
其の充實せる軍隊に依つて規定されるものである。  
思考するにヒットラーが此の夏季新政勢を敢て、敢  
行した所以は同盟國と蘇聯の配合行動即ち東西夾攻  
發動である。ヒットラーは此の危機を予測しこれを

免れんとして今次の夏季新政勢を急が同盟軍の反攻  
前に蘇軍の主力を愚弄せんとしたものと見られる。

而しヒットラーの此の企圖は知つて同盟軍の改政を  
積極ならしむ且蘇軍の改政條件を徹底せしむに  
ヒットラーは今大戦争が長期段階に入るに依つて同

盟軍の何れかが失敗する事を望み同時に同盟軍の分  
裂を企圖してゐる。而し同盟軍の重圍なる陣線は  
益々積極化しシシリイ壁と云ふ具體的戦時が敢行  
されるに到つた

### — ムツソリニーの瓦解 —

ヒットラー・ムツソリニーは同盟軍が地中海より進行  
すると言ふ事は既に預測し其の準備を為してゐたと  
虽も其の對應準備及び配備は同盟軍の海陸空の総攻  
撃に依つて粉碎され独伊軍の惨敗はレテストニーヌ  
を見聞するも明白である。

思考するにヒットラーがイタリアに北部でムツソリニ  
ーと會談した

その談話の内容は先づ「同盟軍のシシリイ上陸に対  
する緊急對策案」であり「附屬各島よりの物資徴集  
」と言ふ問題である。

なんと言はばムツソリニーが突然下台したと言ふ原  
因が特に軸心のチエヌエヌ及びシシリイの軍事的大敗  
でありムツソリニーがヒットラーよりの充分な援助  
を獲得出来なかつた事が其の主たる原因と見られる。  
而して此の影響に依つて、更にイタリア国内に在る

では「ムツソリニー黒シヤツ党」に不安を抱き「黒  
シヤツ党」(法西斯党)打倒運動が濃厚となり、ムツソ  
リニーの周圍は全く危機に直面したのである。

而してムツソリニーは独逸に逃避せんとしたか正規  
軍將校の爲に捕へられた。

斯うした事実から推察するも如何にムツソリニーが  
其の危機に迫られてゐたかは思考するに難くない。

尚現在では独軍は續々イタリア及びシシリイに援軍  
を増加中であると虽も「ヒットラーが誇りとする欧  
州保皇」の維持は到底可能事に等しい。

既に同盟軍のシシリイ攻撃に依つて第一次の大敗を  
爲し亦之と呼應する如きユーゴスラビヤの愛國志士

はタルマデア那島に於ける伊軍大營を襲ひ、更にル  
ーマニア・ハンガリー・チエツコスロバキア等には  
約しと大規模の叛乱が起り、ヒットラーの最後の頼  
みとする欧州保皇に対する脅威は益々強固され今や  
全之絶望に近い運命となつたのである。

### — 東條の奔走 —

最近太平洋の戦局が泥濘してゐる程があるがその原  
因は日本が目下準備時期にあると見られる。

なんと言はば日本は自から「今數ヶ月は日本の國運  
の最嚴重の時であり、生死存亡は此の一戦にあり」  
と言つてゐる。

一編を述べたのである。

この「企業整備」に就いて若干述べて見よう。

即ち「企業整備」は従来の生産設備の合理化等

とは異なり、戦時の最重要なる所、即ち

企業整備は如何なるに依りて、

其の意又規模は如何なるに依りて、

應じしのであるか可能かと云ふ。

整備の対象は早稲産業、中々商工業は云々

と述べて重工業と大企業部門と不相容の影響がある。

この極めて大規模の整備は今後日本の各種産業を完

全に戦時色を以てせしめらるべきことと云つても決して過

言ではない。

斯る規模の整備が如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

則ち沿岸維持の強化及び同盟軍の攻緬に対する

の防禦策に依るものである。

更に日軍の汪精衛の偽軍政府を以て

に對して如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、

如何なるに依りて、



保たない。

更に調査を以てその増強を計りし下をその司令に  
なすしむるを要すと注目するに値するものである。

結 論

以上述べたるものは勿論軍事的動向の部分的問題で  
はあるが結局此の軍事動向の優勢如何は国内の經濟  
的力量的如何にかゝるものである。

独逸が既に対蘇攻略の失敗及びヒットラーの頼みと  
する歐洲條約の挫折等は其の战略と政策に依るもので  
あると云ふは猶ほヒットラーの独裁政治の腐敗と上  
述の如く国内の經濟力量の虛無に因るものである。

尤も独逸の軍事資源に就いては若干論議を述べるを以  
て、独逸の軍事資源の必死の境に陥るに至るの  
は僅か大體に過ぎない。其の最も重要な石油の缺乏

は百分の七十に達する。鉄鋼は百分の七十に達する。鉄鋼は  
百分の八十を越え、石油の缺乏は百分の九十

三、四に達する。石油の缺乏は百分の九十

更に食糧の缺乏は百分の五十に達する。而して其は  
前記の如く統制である。統制に於ては更に統制以上に  
その需要は増加する。

特に戦時對於ける資源の消耗は平時に較べて百  
分の二、三に達する。

る。新として之が不足の補給は該占領地より強利

機能に依つて事じて助けられてゐるのである。於  
而して止述せる如くオオ又占領地各小國家及び自領地

には約半を産出せし、更に反響せず運動を濫奪とな  
り、独逸向け各種の軍物資の輸送は極端に減じられ  
ヒットラーの所謂歐洲保護は其の危機を脱すること  
は出来ぬ。

斯る見地から考察するに經濟的力の強弱如何は戰  
治的軍事動向の優勢を規定するかと明白である。

亦日本が實施しつつある「企業家主義」も其の代表  
し各各領土に於ける資源、兵力の動員に集中してゐ  
る。軍事はいづれオオ又の強弱は「經濟的動向」に相  
等表つた性質を有するものである。

斯として、獨逸が此の危險な「敵者拡大」し、經濟衰微  
の上に立つて、同盟國と並んで、其の目的を遂行す  
ることか果して可能であるか否かは改めて論述す  
る處もない。

今や同盟國の獨主政治をその絶大なる力量が病に  
軸心として、唯だ新秩序の最後の乞食の種はかま  
ぶ方向に、その手もあつてゐないものである。

従つて上述の如く、其の特別解放會が於ける「大  
救の場合」の対応策は、當然成立し得ない問題であ  
る。

# 東條政權の介列

池上敏夫

## 東條自身の政治的経路

ともく、東條自身の政治的色彩は彼れの歩んで来た道が見て承しある。彼は先に軍部に在つて九、一八以前から革新思想の淵藪にリし軍部「聯合」の頭保者であつた。而して彼はその革新派の中でも、林本や幸徳秋水、岡村、菅原、横尾、柳川、小磯の如き表面に處た政治的同志でなかつた。彼は常に是等の謀士や閣士の隠微な歩んで来た。是が結局彼に今日の地位に就かせるものと云へる。無論その化の有能なる高級軍人が、三月事件、十月事件、神戶暴動、五二五、二二六と打越く直接行動の機会を貰つてそれ／＼傷を負つた時でも彼は政治的同志と交けず、二二六大事件の後、如の革新思想「アン」軍人が引退し余儀なくされた時でも彼はむしろ彼等を高く地位に置つたのだ。彼が、將にその「明哲保身」の産物であり、以てフアリシヨ將領として政治的同志と交けず、今日の頭雁にありついたので。

故に彼は軍部に近づいた時は連戦連勝派にも似て

月間派にも好解だつたのである。

## 閣内派の疎遠と自衛派の抬頭

近衛が対米工作に専心して、月間派の専断の中がう下合して、親衛派・岡田米派の絶對的専断の中に東條は首相にかつがれた、そして木下派作威は開始された。当時在野の買収派は起動員で東條を支援し、應援し、東條はその良き看板であつた。

南洋傳説が一段落つてホツとしたとたん盟邦陸軍軍は北アフリカで数々はやられ、對ソ作威は失散し、ソ連の絶對的専断は、ヒットラー被追害を危地に陥れ、シ、リー作威から打越つて、ソ連の下の下台。東條は日米軍事フアシストを絶對に強硬にしめてゐる。此の腹がう頻りに東條は重要や高加を比較的新英米政略家と接近し相めた。そして一方同盟關係固政に備えて遠見無量の完成にあたり出したのである。此のために主権を放棄を中心として、東條は本家の大聯合演説のために購買され、それらの企劃と維持のために、かつては小肚軍人から、馬鹿者

内しとまで進出された。寺内壽一が南洋派遣委員

司令官となつてシンガポールに滞在し、麻原では保

守的な住友の代辨者、小倉正恒や金澤資本の大取寄

船越豐太郎又は官債上りの賀屋大東理者大臣青木

一男(同じく大蔵省出身)が寺内と合作して進出

島の経済進出に象徴してゐる。そしてジヤバ、スマト

ラ方面は東洋の巾でもなかつた。新官債局が東洋を

進出してゐる、進出して取戻に於てはガツては進出

米と云ふ言はれた米内光政や、温知本阿部や廣田

進出が船越に参じて最高を企図を願ふ、時には

和親、新田、湯浅等の重臣が東條の相候補になつて

ゐる。そして同米の最盛期分子や農會分子は東條

の側近が多数進された。

かつて大政翼賛会の産みの親とも云ふべき進出派

・東次、有馬、齋本、進川、安井、松林、山野、久

原、東洋の面々は完全に東條の側近から離れ、親親

外交で有名な白鳥、石村、松岡、青藤は退き、近

末東條を腹巻く重人、磯田、官債、重臣全て進出派

の分子に變つたのである。

注目すべきは進出された進出の員階介子は全ての

手廻によつて自衛派の「大東亞」試練を脱しを進行し

て、東條を新主義者として神聖運動を展開してゐる

### 機に乗せんとする和平論者

東條を叩にして自衛派と月陰派は近衛派の抗争

を推してゐる。黙々として官廷の奥に両者の争を冷

淡な目で見てゐる宮廷官僚松平恒雄や水戸素一、そ

れに鈴木實太郎等は湯浅倉平や、牧野、一木、若槻

などの力を藉び此の月陰派と自衛派の間に東條政敵

に接近せんとしてゐる。東條も又足等の親米米の勢

力に補慮を示すが却き彼等の腹巻を穿つてゐる。東

條は何を語つてゐるか、それは明白である。東條政

敵の根本的敵点と親米米和平工作に使つてははんと

してゐるものであり、更にソ聯と英米の離隔工作の

ために外交政策に出んがためだうう、そのため

と相候補の準備を持たんとして親米米派の和平論

者や自衛派を、最右の切札として待機せしめてゐる

のである。

東條の離隔工作は軍事的重重重要建設の裏面に着々

として準備されてゐると思つて差し支へなからう。

是等和平派の地盤はブルジョア民主主義者、知識階

級の群、それに皇室の一部の勢力もあるとさへ言は

れてゐる。是によつて如何に日本上層階級が同級軍

の親良取を恐れてゐるか判る。

# 自派か？ 敵派か？

自派派と自派派が直轄と中心にして混合派を最期  
シ・野田は東洋運送會社と名目にして南洋資家の獲  
得に夢中にあつてゐる時・同盟側は最近クベツツ合  
取に就いて幾度かの成議を断じし一歩々々東派を  
中心とする包圍網を幾少しつゝある。

自派派は既に勝算を上げ積めた。

「死傷な足踏は各朝したんだがら、戦争は野田の  
中に突つたと見るべきだ。夏が来れば此水が経営のた  
め全力を盡す。そのために英米と同盟とありは相續  
に集むるもの。し——と首を掻く意味のこと  
を盛んに宣傳し・英米側に協東ミユンヘツ会社の用  
意あることさほのめがしてゐる。

是は價廉者の由の更し希望であつて、日本軍風が  
既にナチスに絶望を感じてゐる證明であらう。

所が、周陳派は東條を攻撃し出した。道でか余り  
頭の良くない。面白い皮助かすの江藤源九郎へ忠告  
陸軍少将）や因幡守（長村）等も自派で退後陸軍  
大將）の明使会・建國會の赤尾等、それに向つても良  
いがるは東條をやつ、はうと直心果力因の真意であ  
る。自派派は東條の命懸けでそれと闘つてゐる。

原にぶつ、あうせてゐる中野正剛、と丸うの不安表  
々の分子は

「ドイツも助けるためにあつて、やまを征つろ、南洋  
位もつて戦争がなつたと宣傳する自派派や、相手派  
は島米の連し者だ、こいつらとやつ、けろし  
と呼び出した。は底を汚す手とする運送業者は以  
が東條に東洋運送會社を提議したり、シヤリヤを征つる  
決心であるが、出来ればシヤリヤを敵にしたくない。東  
條の懐みはどこにある。

かつて旅が島を汚す船隻、行原・土肥原、同派は  
置かる用兵指揮官といふ以外に政治的には無情しむ  
しの態である。

東條は此の自派派と自派派と知平派の攻撃の申で  
とにかく陸軍保衛を伏つて同盟軍と闘撃せんとしてゐる。

日本民衆の助けや、戦争の長期流行に東條を攻撃せしめるた  
けの運送業者は失つてゐる。同盟側の日本を主東條を此の運送業者は  
あまのこは自派派である。

北は十島から海はシヤリヤの運送業者の兵士は制海権を奪はれ  
ば直ちに絶望した。自派派の運命である。

東條の運送業者は内から分裂の危機、外から軍事上の危機  
に陥つてゐる。運送業者の命懸けは今や運送業者への路を  
運送業者に閉下してゐる。

在華日本及長路成線統一強化の爲に

# 基礎委員會の提唱

長谷川 敬

在華日本成線統一の必要は是れ論の餘地はない。  
激争が終末期に近づくと従つて何れかの法面新舊派の軍閥が必ず前線兵士の成線活動は活発化して来るのである。

激争活動の日本兵共の中國軍人の環境の増殖は是を察し又既にドイツ軍停戦は蘇聯に於て將校兵士團結して文筆者ゾラトルキエ等が中絶に自由ドイツ軍成線委員會の成立も打倒ヒットラー日を以て活発なる反ナチス軍運動を展開し首魁ルリンには既に成線ビラが発表せられてゐると言ふ。  
伊本利に於ても伊本利兵士が激進派將校を殺して逃兵本利に殺陣し始めた。

將に法西軍前線兵士は動搖し始めた。

此の野放火は日本人反俄路障は中國に在つて更に強固なる統一の行動と合法的地盤の基礎を確立し其の國際的權威を自らの努力に依つて真正に成線せらるる。

先づ此の爲に我々は明確に成線統一を宣言してゐる條件は何かを知ら其の條件を告げざる爲に良心的勢力を爲さねばならぬ。

其の爲に我々は全ての法西新舊派に忠告せらんとす良心的なる日本人の代表に依つて表裏的な徹底せる討伐が爲さるることを希望する。

何度と言ふ成線統一とは『成の整理中國兵の利害の妥協』ではないのである。  
未探々なる良心的批判が統一成線の爲に集中せられねばならぬ。

何故に私利か、ることと強て主張するもの  
その解決の事ト俄に... 敵法匪類に對しては其の陣營が激進的黨派主義をて克服し得ると確信する  
ものである。

心しての委員会の美刺を討論が成功... 我々は危境の何れの際に在つても一つの及口トボンの下に自己  
の分担する義務に事んずることが必要とし失敗しては此の失敗の責任が何處に在るか依つて我々の陣營  
中のいづれに責任があつたかを表面化され又反對に欠陥だと思つては杯なことに其の武器をつたさぬ  
杯を居れば利益もあるかと知れなからぬ。

彼等は既に到来せんとしてゐる。老練的民主陣營の政務は開始を以て熱心側の前線は崩れかけた。  
我々が以て侵略の聖なる國事の爲に國內と師戦とに於ける大衆と兵士の要望に應じて革命的條件を正確に提  
つて是を見直してゐる。

願故ならは日本民主革命と中国抗戰勝利へ即ち同盟勝利は不為一體と確信するからぬ。故に我々は次の

一、現実客觀狀勢の認識の統一

二、現実的當面の政略と戦術の統一

三、此の爲に動員され挺身する革命家としての其の職務と相互協同

四、内閣を以て組織の問題、... の内閣を以て統一する必要がある

下から強り上から強め公明約統一こそ其の統一である  
上からの統一のみに頼るべきでないことを忘れておるからぬ

激進に結ばる革命日本人民度侵略統一戦線に忠誠を奉ずるのこそ其の本なる義務の同志たることを確信するもの

である

願はとば在革命日本大軍命先軍士と我々のか、革命大衆的軍軍に奮起せられんことを。

# 時局展望

江見編

扱打ちの電報作成も、望忍不拔・磐石の底力の  
前には、遂に尻尾を捲かざるを得ない。オオサキ、  
ピレコロドに捲かれたナチスは益々、加強を以てソ連  
の圧力に耐え以て處をんとするや!

既にナチスは前回の一歩手前に、幸うじて身を支

てゐるに過ぎない。「自由ドイツ民族委員会」の  
「ドイツ軍機」ドイツ国民に告ぐに「書、これぞ  
大逆無道たるドイツ民族の真実の声だ

ヒットラーは得意のナチスを踏踏させよう。蘇聯  
になつたお前成、己に民族を束縛しつゝある今日、  
五洲の捲入する一合の際もない。

盟軍シムラーも上陸、破竹の勢を以て念を盡き蘇聯  
す、細田の一角は遂に離れかけたのだ。伊本土  
砲撃、ローム爆撃、ムツツリニ下野……自由を

るしい歐洲の支局は、そのまゝ日本への影響を  
為すのだ。

ローム爆撃の七日十九日と日を同じくして、米  
空軍は日本各島列島の視察を長と爆撃した。

神風を吹く、神風が吹くと人民を騙して来  
た日本も、既に二回空爆に見舞はれた。ニナ石記  
の神風は、島国日本に集積つてゐる毒生虫種  
虫を吹き飛ばし、吹ッ飛ばす。正文の旋風によつて  
置き去へられるのだ。

エリギヒヤ、ニエリゴヨルジヤの日軍も刻一刻  
狂逆されつゝある。東亞の盟主たるの夢は、今こ  
そ微塵に打碎かれたつゝある。東條首相は七  
月五日、シムラーがポールに宛てて書きたり、果  
して何を言ふ、何を言ふはせられたか? 悪鬼の  
野郎は悪鬼の毒ながら、覚醒せる諸民族と  
隣接すること、既に過去の夢をあることに  
気がつかないのか!

日本の八十二政会を解散された。「遠東修正盟  
も練て点、点けつゝは過ぎぬ。六十年に亘る  
中国の英雄抗戦は、東亞共栄圏の悪夢を

根底から動搖させてゐる中國の抗戦こそ、優劣戦争を而して又フアジヤムを、人類史上から抹殺さすべき「史の意」を持つものだ。

下八柱一守りの史意が如何にインテキであるか、不史の書庫によつて、又長の前にもその正体を曝されるべき、最後の審判の日が迫つてきつゝある。

惟々として、重臣会談を開き、地方長官会談を開いて、前にかつた機關を支へんとしてゐる日本は、記者夫の煙囪と意図……

戦勝の勝つて望みと、敗戦の勝つて止まされて叔難の事だの苦境に呻吟してゐる日本人が、嘘を切り水を大洪水となつて、日本国内の旧き勢力を押し流すべき日だ、刻一刻迫する、あるのだ。

ルンペンと、サヤ、チルの老い次会談  
太平洋作戦会談と戦後問題の会談に於て何が物語られぬか……

22  
東洋より守勢の立場に陥つた日本軍部が、盟軍の進攻の前に、全面的退却を餘儀なくせしめられ

後の話題であらう

スクリューン、基業の大使と会談

今次大戦に最大の役割を果しつゝ、あるソ聯の動きこそ、来るべき新世界への大きな指標であり、スクリューンの動きは、全五年の注目点であらう

中国外交部長、英因に於て声明

「中国の主張するところは、史の同位であり、日本に長主四象の出来ぬ限り、戦争は終結しなつてあけうとの意見は、蓋し中国抗戦と日本革命とが一体のものであることを、内外に認識せしめたるものであり、中国外交部長の高識は、各有識の士の敬服の的である。」  
(四三、八、二五)





# 長沙の血痕

## 第三次長沙作戦従軍記

☆☆八木一男☆☆

第三師團總司令第五聯隊長岡部隊が作戦命令を受け  
て東國地蔵山を出発したのが十月十六年十二月  
の二十四日東風吹きまくる午前一時、部隊はひたす  
ら敵軍部隊に向って行軍した。東風は水取より汽  
車輸送、夜口を経て一路長州へ——

途中漢口福子兵隊會合にて一泊し甘米油及び酒を配  
給された。我々はその處から酒に興じて夜遅くまで  
軍歌を唄ひつわいだのだ。

途中敵軍所進より春雨の霖は雨が降つて来た。日軍  
の作戦は雨は付きものだ。長州到着後まもなくあた  
りは一面の銀世界。午前四時頃に中原は出発命令を  
受けて雲の中の重鎮だ。寒さにかふる。だがら一路新  
橙河へ——渡河作業は思ひの外困難だった。工夫の  
決死作業に依つて漸く渡河を完了。そして渡と雪の  
中と死の行軍兵隊は唯一列も早く着き地に到着を

待った。初巻に敵軍者が向り本橋も終り待ちた待つ  
た指名と喜ぶのもつかの間、シエーンと敵軍だ又一  
陣やつて来た。中田少尉は白い手巻のまま、初巻よ  
り出るは！！と悲鳴った。もう夜明けだ。

我々にも知らぬ間に中國軍とぶつかつてゐるのだ  
晴の中から連軍の隊がビエーンガーンと前のクリー  
クに落下する。やがて我々の重砲が燃り出した。同  
時に近くは我々の小銃隊が飛んだ。中國軍の部隊す  
る上に閃光弾はらばらば等々の遠くに炸裂した。前が  
止み杜絶は晴の死闘が始つたのだ。

何時の間に至り山澤れた。天明の赤んぼ空と嵐は  
せものだった。我々の死傷は敵の散兵隊に、た炸裂  
した。その時敵の連軍砲隊が長味悉くかりを空じて  
右側の部隊に物凄く音を立て、炸裂した。初巻裏に  
集結した敵馬は、の音を驚いて一音に谷底に落ち

の集中射だ。高柳少尉は欠座まはり上げて中隊全員に對して二分の一の減門準備を命じた。そして御落に集積も完了した。残った初兵兵は全馬に鞍置きも開始し中田少尉の指揮に基き御落を移動し始めた。高柳少尉は「畜生、馬をいじめるな」といながら黙隊本部の命令を持った。御落は海の方をわきよに馬に沈みろはと君く訴へてゐた。兵連は沈みみれの頭を覗合せながら少尉かしら沈黙とした。着意した満ちてきた。烈々たる風志が隊内に盛り上つて来るのを見えた。西方のクリーナの方から高田兵連が走つてきた。「高柳少尉殿、御落本部は準備を完了!!」直ちに攻撃も開始!!」御落は石列を、對井曹長は軍刀を片手に「前進!!」を命じた。總員四十三名の指揮もとり第一小隊は左側、前部を歩小隊馬も中田少尉、石川中隊長は陣内の中に双履履を片手に軍刀を背に負ひサツと前のクリーナに走り込んだ。伏せながら前方にある山口軍曹に言葉も掛けようとした時だった。運び来た。た迫基砲の一撃は隊長の伏せた地点より二周程前のクリーナに水柱を上げて、水中深くわり込んだ。山口軍曹は待て!!と隊長は山口軍曹に伏せよ命じた。軍中教養前進して次の陣着を待つ様は姿勢をとつた。再び高田兵連は陣

「報告!!」中隊長殿、馬がやられました。指揮班五頭、小隊十二頭。報告の終らぬうちに中隊長「何!!」指揮班五頭、何人とおふ馬か判らんか?」皮理はますます加つた。「ハイ、乗馬金及馬馬二頭は被災です。」「そろそろ」高田、御落が言った。中田少尉は馬の力は強むと云つて兵列!!」高田兵連に命じ終ると力のこもつた大見で「山口軍曹、前進!!」「オーイ、第一小隊前進!!」大軍の聲が隊本部の丘度から打ち出した。暫く敵も展成してゐたが間もなく村長は止んだ。やがて隊本部より道路小路が急夜に来た時は攻撃も実行して前面の台も占領した。時浴も十一時五十五分、敵は光がほつとしたのだった。此の間には意金にかつた。敵は時々思ひ出した様に水成射をやるだけて積極的の攻撃はなかつた。念々我々の糧秣のつまるのを待つてゐるらしい。本初より直ちに引上げ命令が来た。全員出立、御落は橋本橋に向つた。何だか所直より敵が追つて来る様は気がしてなるなかつた。後方で激しい重砲の音がする。動揺する人馬の聲が山間に響き渡つて来る。先に移動した騎隊本部が意金を受けてゐるのである。西方の山にはすまじい敵の攻撃が実行されてゐる様だし、思はれなかつた。

中隊の馬は……？」増してくるのは不安で一杯だった。「畜生、一體健造はどうなるのだ！」

氣短の上田が不安氣に叫んだ。「そう焦っていても仕方がない、今少し待つとしよう。やがて陽が暮れることだし暗くなったら敵方に運ると隊長が言っているたせ……」

「そう云って上田をなだめるのは伊東隊長だった。敵は健造の居る地点も知ってゐる、勢揃兵力も判つてゐるだろう……」

何處から攻撃してくるか判らない、到底決斗にはなれぬ哉々ではそれがどうして判られるだろうか？ 馬は次第に落ち、四圍は真暗になった。

先程より移動した駄馬の蹄がだん／＼と遠くはなつて行く、部落に落ちついた我々は寒さを凌ぐ馬に悪いとは知りつゝ、も細々と焚火をして後方より連絡を待った。

時々思ひ出した様に銃音がする、やがて山下伍長が連絡より帰つてきた。「伊東伍長ツ」引上げて来た

上田の氣短は「なんだッ、山下伍長殿、自分等を置放しにして」不平一杯だった。山下伍長の語連で

我々十三名の者は外登に願をせみながら中隊のゐる部落に悪いだ、遠くの彼方で火の遠火が夜の静けさを破る、やがて一行は黒い大きな影に覆ふあつた。

山下伍長は中隊長の部屋にと案内し伊東伍長は情況

を報告した。中隊長は「……御苦勞であつた、早く休んでくれ」外へ出て部屋に帰つて見ると増田一等兵が涙をこぼし延びから泣いてゐる。増田ツ一本ど

うしたのだしと伍長は訊ねた。情にわたつた及の鈴木が「増田は馬が倒れた馬に……」増田、泣く奴があら

るか……高尾だなあは、伍長は又不意を我知しなから「さあ、みんな休もう」焚火の四圍を取巻へて臭い毛布の中にもぐり込んだ。増田の泣くのはまだ止

み相もない。上田が止せと云つた時だった。山口軍曹は「吾など休んだまゝ、聞いておれ……命令！ 中隊

主力は御園に退及し、彈藥輸送に任ずせし……」あつちと休めろと思つたら又燃焼……御も命令は違

せられた。指揮班、五頭、衝動兵、十名は第二小隊の中隊少尉の指揮に入り直ちに現在地に於て出

発準備を完了すべし……」中隊少尉以下直ちに第三中隊に退及した。何でも騎隊本部の情報に依れば此

の附近には約三ヶ師の敵軍が集結してゐるとの話し、連絡は本道を斜に沿つて前進した。そしてクリーク

沿りに行進した。……馬を四圍の中に落して必死になつて引上作業をやつてゐる。馬鹿者奴、氣を付

けて歩け、取つて歩く奴があるものか、故陣馬は各所に起る、一足一足と引きずり込まれる様は悪

路、それが何處まで……」

休んでくれ、外へ出て部屋に帰つて見ると増田一等兵が涙をこぼし延びから泣いてゐる。増田ツ一本ど

うしたのだしと伍長は訊ねた。情にわたつた及の鈴木が「増田は馬が倒れた馬に……」増田、泣く奴があら

るか……高尾だなあは、伍長は又不意を我知しなから「さあ、みんな休もう」焚火の四圍を取巻へて臭い毛布の中にもぐり込んだ。増田の泣くのはまだ止

み相もない。上田が止せと云つた時だった。山口軍曹は「吾など休んだまゝ、聞いておれ……命令！ 中隊

主力は御園に退及し、彈藥輸送に任ずせし……」あつちと休めろと思つたら又燃焼……御も命令は違

せられた。指揮班、五頭、衝動兵、十名は第二小隊の中隊少尉の指揮に入り直ちに現在地に於て出

発準備を完了すべし……」中隊少尉以下直ちに第三中隊に退及した。何でも騎隊本部の情報に依れば此

の附近には約三ヶ師の敵軍が集結してゐるとの話し、連絡は本道を斜に沿つて前進した。そしてクリーク

沿りに行進した。……馬を四圍の中に落して必死になつて引上作業をやつてゐる。馬鹿者奴、氣を付

けて歩け、取つて歩く奴があるものか、故陣馬は各所に起る、一足一足と引きずり込まれる様は悪

路、それが何處まで……」

出た。千代は、一歩も歩かぬ。道は、道に風は、

走りで其の先度、小休をした。中田少尉は、疾風の

に注意し、大連は、一着に車の上に乗らなかつた。

分隊は、本人に、車を、走らせて、追いつく。注意した

で、出た。道は、道に風は、身にかかた。

先頭を、走らせた。河合伍長は、六歩して、から立止つ

た。中田少尉は、夜中は、不思議な位、遠方から

見送せらる。大連は、やがて、土度から、道路に出た。ねむい

服を、すりながら、黙々として、行進するのだった。

やがて、白々と、霧が、明けて、うた。昨日に、比して、今日

初と、なく、雲り、模様だ。やがて、前方に、大連は、何處か、見

へた。中田少尉は、先頭に行進して、る。河合伍長に、

「オーイ、河合伍長、あの、前方の、何處で、休ませ、す

ら。ハイ、もう、六時です。承知しまし

た。全員に、元氣を、付けて、前進に、向った。大連は、

!! 現在地に、於て、羽金、準備!! 我々、指路は、皆

東伍長の、指示を、受けて、前進に入つた。一時間、の、後、

で、三食の、準備に、かゝつた。やがて、朝食を、終つて、夫

一服して、出発して、からの、話をして、出立、命令を、待

た。村井、曹長の、話では、これから、行進、は、中田、大尉が

進め、向へ、向へ、前進した。……

種々の、進行、車、故、車馬は、それ、から、それ、へと、出る。然

し、全員の、志氣は、ますます、旺て、あつた。か、一時間、も、行

進した、て、ある、う、か、……、彼、前方、に、大連、山、が見、へ、ら

中田、少尉は、小休、止、を、命じ、馬上、よ、下、り、た。そして、分隊

長、以上、に、命令を、命じた。中田、少尉は、地、固、を、取り、出し

て、今、隊長、に、何か、話、して、ゐ、る。小隊長は、再び、出来、を

命じた。河合、伍長に、歩、度、を、運、め、る、様、に、命じた。一、体

解散、に、歩、度、を、運、め、る、か、不思議、な、は、ら、な、い。歩、き、な

が、ら、押、東、伍長、に、訊、ね、た。伍長は、……、何、でも、こ、れ、を、ら

行く、道、は、約、一、里、の、地、点、に、あ、い、ま、が、あ、る。その、山、を、見

ル、マ、山、と、稱、し、約、二、ヶ、節、の、敵、が、居、る、と、い、ふ、が、外、に

道、が、な、い、の、だ。それで、どう、して、も、ダ、ル、マ、山、の、精、進、を

通過、し、な、け、れ、ば、な、ら、な、い、の、だ。何、處、か、ら、何、時、敵、の、攻

撃、を、受、け、る、か、も、知、れ、な、い、を、れ、て、ま、こ、を、通、り、取、り、な、ら

ば、歩、度、を、運、め、て、ゐ、る、の、だ。……、伍長は、云、つ、た。それ

を、聞、い、て、何、だ、か、意、に、悉、し、く、な、つ、て、き、た。伍長は、早、気

に、願、を、し、て、前、方、を、見、な、が、ら、進、ん、だ。……、オ、ー、イ、

押、東、伍長。あの、前、方、の、山、だ、と、い、ふ。中田、少尉は、馬、上、か

ら、指、さ、し、て、見、な、す。ダ、ル、マ、山、は、ハ、タ、ク、と、前、に、見、え、な、さ、し、

ら、見、へ、る。その、山、の、中、腹、に、白、壁、造、り、の、家、が、五、六、軒、見

平行して行進した。我々も後歩小隊に加はつた。約二ヶ分隊の兵力機關銃二の懸着でアルマ山にどドンク、直ぐいで行く……

近づくに連れて矢の足持ちは唯初撃が今にもとふふ一念で緊張一也。馬の平脚をしっかりと握って前進す……隊長は周囲に對して深々注意しつゝ、進んで行く。その時「上まれいっ!! 停止!!」突然隊長は叫んだ。一體何事であらう……? ? ?

ふと山の彼方を見れば黒い霧が動いてゐる。隊長は全隊を壁に連發して比較的確撃を……

「伊東隊長は壁を一を以つて此の道を進んでくれ。彼は向ふの村落に向つて行進するから……」と命じ二隊は別れて進んだ。初撃を出て百米も進だと思はれた時、シユンと一発小銃彈が飛來してきた。

隊長は全隊に散開を命じた。上田は本隊に報告に出た。薄暗くなるにつれて前方の土から迫る砲彈が暴

果してくる。それが馬の附近にさかんに落下する。やがて中田少尉が痛つてきた。初年兵は小隊長を見るが早くも此の情況を報告した。だが砲彈はますます激しくなつてくる。連に馬にも犠牲が出た。然るに

田少尉は悲痛に「オオ、村エッお前以下五名は此の情況を遠方中の第三中隊に報告して呉れい!!」

今来た此の道を辿つて返つてくれ。隊は新市に上つてゐるのだ。大反隊長が引いて行く。馬は小銃彈の馬に足部を貫通された馬馬軍曹が来つてゐるのであつた。此の痛々しい姿を見た中田少尉の目にはいつても涙が光つてゐた。

敵の側着をついた者は死んでゐる。或は死した。そしてその死体も波客出来ず不々、の体で進行して来たのだ。所方不明の者が五名と報告した。聞くれば正月元日だと云ふのに何人と云ふ者がある姿だ。誰一人として悪知を云おなひものはない。

あの敵が出なかつた。怒らなむ……隊は出撃しなげればこの森は……中田少尉は大隊長がこんな事を云ふのを耳にして喘息をつくばかり。今になつてはまったく狂言な。十八頭の高も殺し又八名の犠牲者を出したのだ。

武々は荒道の中を新市に向つて中隊軍の覆取と一時避けることになつた。初撃は負傷者と馬を背に余し

ながら漸く新市に辿りつた。中田少尉の指揮する隊は連隊は又してもその途中中隊軍の攻撃を受け

て全滅に達し、どの打撃を受けた。中田少尉も遂に負傷し下士官は胸をやられ後歩小隊の四名は狂言不

用となり友人の村上隊長はその時に被死したのだ。

然だ、中隊は直ちに捕虜に逢ふすべし、その命だつた。我々歌馬部隊は救れさつた病人の行列みだつた。我々もくし前進した。間もなく太平橋で着着になつた。我々兵は馬の手入が終ると先を争つて食物の徴発に出た。而しそこは先に歩兵部隊が先した後方ので食物はなにもなかつた。たゞ長家に残つてゐた羊を喰つて食つた。

朝の登馬が終らないうちにもう出た。捕虜に逢ふとの命令で急行軍だ。陣が片けた大か放つた大はもう一面に霧を火の中に包んでしまつた。

連日の行軍、汗と垢でよごれた軍服、そして及び飲しのびげ雨、雨の中を急行軍又急行軍、道は思ひの外悪くあらうでも、こちらでも激陣馬が出る。こ

うした行軍が二日も續いた。着はすつかり嫌になつた。二日目でやつとのことである初落に着着になつた。全員すつかり大音びだ。久し振りで成れると思つたからだ。初落の設置が夕方になつてやつと出来た。

夕食の仕度で全員夢中になつてゐる時だ。前方でバリー、くし重視の音がした。敵襲だ。敵襲だ。敵襲だ。初落は兵隊と馬の騒ぎが一着に着た。初落の東方

初落本初の前でワーツと意に味方が起つた。敵が近づいてきたのだ。この初落も一すの音だ。

な。中隊が初落に襲撃す初落と小銃隊を以つて防禦に向つた。前面は中國軍がどんく増加する。我々初落の兵力は全く食料であつた。山口軍

中は歌馬隊を指揮して裏の松林に集結して虎陣を遣けた。そこへ大砲兵長が飛び込んできた。……

「隊長、敵があの山に集結して見ると今更何も見へなかつた。側面の山に中國軍があるではないか。」

「王王、思ひにして松林は人馬のうわさ者、我場と化した。敵陣にあたつて倒れた馬は二十数頭、馬首

香矢が鮮血に染つて啼いてゐる。陣に當らな、兵隊は壁にびたりとくつつくとぶらぶら、度へてゐる。……

間もなく波見者は五十名に達した。思も伏せてもう観念してゐる中に先鹿聲は次第に遠くなつた。……

「あ、……一着前……」

「鹿は王王残つたのだ。……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

「あ、……」

おちらこちらで、死ななと刃傷者の夜が着つた。私は  
 此處を求めて殿前所を訪ねた。破れた民家の中に  
 重傷者がつらりと並んでゐる。私の近くに連雲虎彈  
 にやられた兵隊が全身血染に染めて死んでゐた……  
 「水、水、水を…… 水を呉れ……」 私は水筒を出し  
 た。刃傷兵は「う、ま……」と云つて咽喉をこ  
 ぐりと言はした。私はもう唇らなくなつて新屋に飛  
 びだした。そして次の新屋を見た。あ……又此の  
 新屋にもおちこち、重傷者が一杯はつた……

夜が明けて中国兵も退つたらしい。新屋は國家隊に  
 集結した。そこには初原本朝があつた。其處並一列  
 に並んで死体があちらにもこちらにも其の悲慘な姿  
 尊く笑く死体…… 蘇も感もせむけて歩いた。間もな  
 く刃傷者の輸送に奉もあつた。一人毎に歩かせて  
 重傷者は黙島に來てた。その時の数…… 實に重傷者  
 五三〇名。歩行患者 三〇〇名だ…… これも歩兵  
 一ヶ中隊の重傷の下に後方に退るのだ。足岡新屋は  
 直ちに師團と矢に反將の命を受けた…… あ、國家  
 隊に残した獲物と云ふ死体はどうなるのであろう……  
 更体の牧畜はもう間に合はないのだ…… 初原もう政  
 場薩院もあつたのだ…… 此處の死体の数もつげ  
 ないで、おちこちから死体…… 退つておちこち……

あるうかり。  
 私は唯刃傷者を馬上に苦痛の呻きをきながら唯も  
 りくと馬を引いて歩いた。  
 ……  
 虎



一 勝利の皮 一

勝利の皮



勝利の

果實と







自己の尊厳を東洋人とせし可からず、

いふ社会はせしめざるべし。

彼等とていふと、我々の文化せしむと

家の内を破壊せしむと。

と我が会社に言ふも、

我々の神を敬ぶるも、

の母と人よ。

我々の二重三重に縛られ、

我々が亦未だ未だ縛られてゐた。

佛敎の世の美徳こそ由者だ！

君の体こそ君の心、

我々が我々の尊厳と行つてゐることも知り、

誰にも仕へた事はない。

善悪とあれ、我々が善悪と。

我々が我々と我々が我々と。

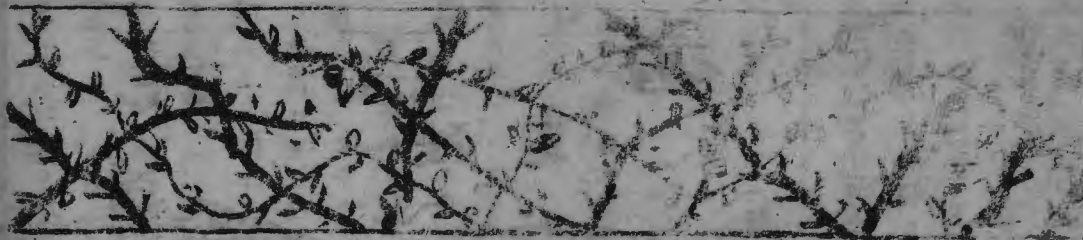
今は我々と我々が我々と。

我々の中にある我々と我々と。

君は縛られ水の中へ入り、

神は我々の血を吸ふ。





第一、異國での戦争の風は買身だ地みた！

冷たい寒風の中は戦功に

思ふ身は涙と汗の結晶を滴らせた。

野原のーもづく

僕は何を叱る

世のしつけがとんちんかちをやる

だから君に自由を身えぬ。

戦争に奴隷に！

愛

情に動かされて運命づけられたのだ！

いつも身手に甘えられぬ君

ラッパも刀も買つてくれた

だが世界の風はあまりに

空気の井をへしぬびた！

君は文女性さ。夫をかえせよ。

時雨の母は僕に抱えてくれた。

元気の刀をふり捨てて。

君の愛する早知の鳥に

羽をとりまく絆を共に

強く踏み切る奴隷前！

一 克



# 長江春景

一 独 幕

新橋劇團脚本部  
北 一 三

人

中国人 農夫

同

日本人 現場監督

日本人

日軍下士官

漁夫

その他中国人 農夫 大勢

現成

長江上流沿岸の滄陽區

舞臺

日本軍一營編地城。揚子江を見下す。河のほとりには舟の上。江上には日運船、發動機船、民船が上下してゐる。暖かな小春日の午後。小島が輝いてゐる。

幕開く

劇中農夫A、B、二人舞臺中央に座し、向ひ合つて食事をしてゐる。

進いぢや。

農夫B. (同じく飯を食ひながら) 又腹を張しやうと、村を歩いぬき、七言を食つてゐるぢやう。

う。

農夫A. (得意を込めて) 食つたれた尻餅落ちや。

農夫B. その様はコトを云ふと又半殺しにされるぞ。

農夫A. 真逆側足見天舞伏之器史難満其意 足不足。

農夫B. 全くその通りだ。(兩人笑ひ)

農夫A. 人の土地に違入り来くもつて、目茶々々ヒ荒しくつた上旬、稲花を作れ。是等の必需品ぢやう。

心買ひてやう。米はいくら作つても外の土地に搬出は許さぬ。こゝろが、區が掃の値段は元にもよらぬ。

心買ひてやう。米はいくら作つても外の土地に搬出は許さぬ。こゝろが、區が掃の値段は元にもよらぬ。其に事象を喫せ、只の様な値段でかんたくつて行くだけのことぢや。僕は悲しゆうて死んで了ひ度うな。

つたわい。

農夫B. やれ、氣が早い。元氣を出しなされ。何時かは好い日も来るものぢやで。

農夫A. 此の敷で飯糰に引き出され、鬼子等の爲に石炭運びにつかはれるとは因果な話ぢや。腹も苦けれ

ば游撃隊に違入つて飯等と戦ふのぢやがのう。

農夫B. ぢやが吾姓には行より土地が大切ぢや。命より大切ぢやで。

水高がわつさり増しや来たのう。(指示しながら) あの柳の根にいたう水門を開けんやうん。

農夫A. 開けても、開けなるとも結局同じことぢやわい。

農夫B. (いぶかしさうに) 何故ぢや。

農夫A. 飯等が此の土地でのさばつてゐる限り、飯等百姓には自分の物さへ自由にならぬぢや。

農夫B. (手打し嘆息する)

34 農夫A. 飯等の命さへ今日あつて明日はどうなるか誰も知らぬのぢや。(苦氣を強めて) ……三原清の本二はとうぢや。鐘はらつた東洋兵が、家へ這つて来て、一月前に迎へたばかりの新娘を追廻し膝小屋の中

「何れか」といふと、さういふ見付け止めたはかりに、東洋兵の刀を振りかざして、

農夫B. そやあふけんと、僕等百姓は土地を離れたら何も出来はせんのだや。

農夫A. 何をさすりと様々なニとを見るわい。(嘆息)

農夫C. (舞はり) 愛呀 愛呀 (登場 飯を盛り上げた碗を箸を持ってゐる)

農夫B. 何を為てるものぢや。

農夫C. 堪甚度。

農夫B. 甚度是實可呪

農夫C. 運が悪い、又吾方の微勞ぢや。

農夫B. おまはそれ聞いてのせのぢや。

農夫C. そうぢや、太平橋のみに道をつけるのぢや。

農夫B. 僕はぢや、近いうちといふさがあるのぢやらう。一日大崩れぢや。

農夫A. 馬鹿は、一日大崩れで敵人のたの道を作りに行く奴は誰ぢや。

農夫C. そんな阿呆は誰も居らぬわい。

農夫B. それからかうしたのぢや。

農夫C. 奴はよく悪つたが、場所が悪いと思ふたのぢやらう。とこがへ行つてしまふた。

農夫B. そうであらう。鬼子も一人に匹ると人間が怖ろしいのぢや。

農夫C. だが結局は誰のい連れて行かれるのぢや。そや古いと村が壊れるでう。

農夫A. (嘆息) 運が悪い。  
農夫B. 農夫C. (同時に) 運が悪い。  
(現場監督の手は斧柄を構つて登場三人を眺め顔をしめる。農夫三人互に目混じし無言の中に警戒の

態度を取りつ、食事を進める。現場監督は明かに不愉快な表情を浮かべ、三人の食事をすすめる様子を眺め、

はから敬意をこめて、その間隙を一脱し、石手草の上に坐る。……、彼等に疎密のしなで地を踏む。

（後方を去らせやうとする。農夫は背後にそれを感じつつ、然し黙々と金等を焼ける。監督は大きく嘆息し、農夫の顔を上方監督と視線が合ひ、監督はうなづいて立止る。農夫は依然として監督の顔を見つめる。）

現場監督（黙ら立ち）休むな。

農夫B（緩く立ち）私、休ませ。

現場監督、この野郎、休ませな。

農夫A（彼と背中を向けたまま、）改善案東西、我門都是中國的老百姓。

現場監督、静つて。うるさい奴だ、走、走、走。

農夫C（懐中時計）現在我門死にたい……（懐中時計を見せる）……死にたい。請休な（會見、対不起す）。

現場監督、不明白、不懂、不懂、走走走、（彼で地を蹴く）

農夫A（赤い頬）我門哭着訴苦、不見死、（追いつく）

現場監督、何、（杖を振り上げる）

農夫C（吃驚して月の顔を引く）好、好、好、好。

農夫B、現場監督、走せ、走せ、（A、Bは走っている）

（A監督を睨みつつ走り出す。B、Cは走らぬ）

農夫B（歩きつ、小声で）死体場的

現場監督（背後から追いついて来る様に杖で地を蹴る）右、手端迄中き再び戻れな（……）

（何處かで小鳥が啼いてゐる。……）

現場監督（独語）……（……）

（……）



商人、……ある……（重上り）

現為……（重上り）へま……（重上り）

商人、……（重上り）……（重上り）

下士官、……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）

……（重上り）……（重上り）



あつて... 演劇... 演劇の本件... 演劇の行進... 演劇の心は...

商人。演劇隊の下手官さんともあらうものがないこと... 下手官。日本が勝つと思へばこそ...

はい、はい、一羽の... 俺の肩も今頃... 出して来たら...

商人。演劇隊の下手官... 日本が勝つと... 勝つてくれ...

下手官。日本が勝つと思へばこそ... 演劇隊の本隊... 演劇の本隊は...

はい、はい、一羽の... 俺の肩も今頃... 出して来たら...

商人。演劇隊の下手官... 日本が勝つと... 勝つてくれ...

下手官。日本が勝つと思へばこそ... 演劇隊の本隊... 演劇の本隊は...

はい、はい、一羽の... 俺の肩も今頃... 出して来たら...

商人。演劇隊の下手官... 日本が勝つと... 勝つてくれ...

下手官。日本が勝つと思へばこそ... 演劇隊の本隊... 演劇の本隊は...

はい、はい、一羽の... 俺の肩も今頃... 出して来たら...

商人。演劇隊の下手官... 日本が勝つと... 勝つてくれ...

下手官。日本が勝つと思へばこそ... 演劇隊の本隊... 演劇の本隊は...

はい、はい、一羽の... 俺の肩も今頃... 出して来たら...

商人。演劇隊の下手官... 日本が勝つと... 勝つてくれ...

下手官。日本が勝つと思へばこそ... 演劇隊の本隊... 演劇の本隊は...

はい、はい、一羽の... 俺の肩も今頃... 出して来たら...

商人。演劇隊の下手官... 日本が勝つと... 勝つてくれ...

下手官。日本が勝つと思へばこそ... 演劇隊の本隊... 演劇の本隊は...



4  
商人 三喜丸の奴は(跳る)

現島監督 殺して予(跳る)  
湘美 喰い為に作つてくるも此迄禁止して佛烟にさせてしまつた。向ふが予をついて謝つてゐるうら山の  
本を破るもぎに切つてしまつた。下士官を眺めながら(といつて知らぬ外無暗に人の家に入をつけて)

下士官 此奴 喰ひの(跳る)

湘美 天降した。強姦して。...

下士官 太い野郎だ斯うしてやる(殺す跳る)

商人 單に向つて所を去かぬ因賦也(跳る)

湘美 (商人の足の下から苦痛に耐えて) 因賦のや有え 庵は日本の番帳の小伴だ。手前の家の焼かや、  
手前の女房や娘は目の前で焼死されたといふ事がある。畢竟が山崎を自害をいだがり殺し、此等が戦争  
に押し込め置かれたることを言はせ、おやういふに、金子金儲けをやる。何處か王様の以手は、このおけ  
出つたらまかしらぬと作おえたら、勝手にしやい。必し何時か日本同様の番帳の予は焼かつた。

百き返すからしきか本意のなぞ。

下士官 さん... (再び殺す跳る)

現島監督 此奴(跳る)

商人 おのれ(跳る)

(突然舞台外で銃声。下士官の手で腹を押さへてふらふらと中庭へ逃げ行く)

... 群衆の罵り叫ぶ声。湘美は拳銃を片手に先頭を立ち、老百林大勢を片手に提灯を執りて、堂  
下へ...

現島監督 (驚いて) 本意也(商人のまかりつく)

商人 (叫びまを拳銃を片手に)

(一團三人をまきまく)

# 曝れた女神の正体?!

偽独立権……

冥き行きの切符とは知らずに

押しいたゞき



座一キ

T. #

自由

# 爆弾

啄水

高く振り上げて居るのは爆弾だ！  
既に安全ピンは抜かれてゐる。

向ふを見る？

あのドス黒い煙

陽光を遮る高く陰鬱な煙

これは我らに害毒であることを知りつ、  
争訟のあるまじく高くしやがつたす。

長い剛直の氣を奪つ

國王のものといふかんとその氣に爪つて

愈々長屋に燃つて寝た

在尋常洞窟の悪いこめ中で

心算共に釘つけられて

たまにさした薄陽を凝視し風ひ

長い時海まかりはしてまたか

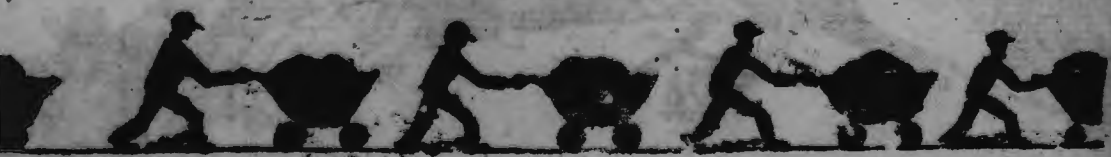
もう手元肉を口にして残物は必死め

我らは何も運た……

際々たる眞實の素外塵

せん木製頭……

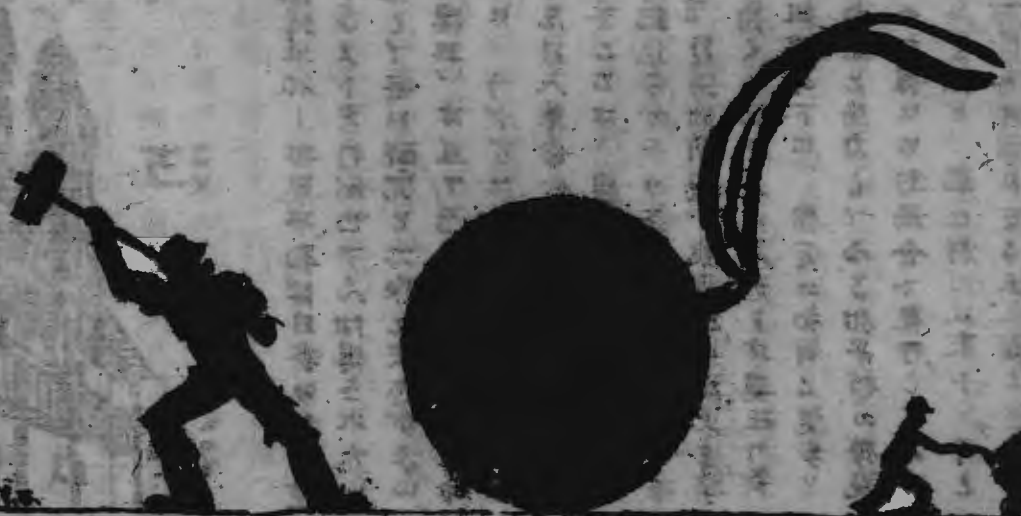
地獄や獄地は……  
つユリ……





せし子守にきた皆んお運つてある  
 昔は一人お刺着は皮ひもワカオカつた  
 だが今では.....  
 工場も一つとして不接はよく  
 風ひきりまびり来る煙草だ！  
 目線は目線に少しの余裕もよい  
 横りに差落かゝるつてや  
 うまいのと云ふお！  
 此れお大人しく張つておくものでお  
 人命を奪ふためのものでお！  
 二人お前式お設備は.....  
 みんおお氣に成るおつうにやるよ  
 太陽が高くなるお！  
 陽光は壁を照したつて.....  
 ぞんおお！お！お！お！お！  
 煙草で睡してやる！  
 修善でこまかしてぬるより  
 合理的生産工場と  
 煤釜と共に運送しやう！

光



# 和平村二十四時間

五川洋

「ガソリン」を燃やして、煙を四方の高  
 達びた煙で、煙房にとつては煙毒の如きより眼  
 差まで注意。時計の針は五時半過ぎ、かくて皆  
 は一斉に跳起きて一日の一日終へんと懸念する。

和平村の日本人は。●衆人、その中に若干の台詞  
 民を語つてゐる。日本法蘭西の大陸侵襲戦争の概  
 略とつて、東洋は日本人民は幸か不幸か、战火を  
 遠く離れた北の一角の東域に容れられた。この中  
 に時既に五年間の休養生息を経過した者も居り、又  
 来て半年一ヶ月は過ぎたが、新村民も居る。古い仲間  
 は一戦に思ひ切つて、日本主派の愛想から脱し  
 切れる。屠殺的人生運を以て中国政府の厄介に甘ん  
 じてゐる。然し新しい仲間が起つて、運命の糸を  
 持たせて、中には既に傳馬肉運送も経験し、今府  
 の大生を如何にして全うするを志してゐる。

表裏り（前院）一ニ奉了目は蓋もその部類に属し  
 表裏り（前院）一ニ奉了目は蓋もその部類に属し

表裏り（前院）一ニ奉了目は蓋もその部類に属し  
 表裏り（前院）一ニ奉了目は蓋もその部類に属し

を把握し、其の東洋平和の奇界平和は日本の初歩  
 暴立の的等事フアシストを打倒せしんは得られ  
 と云ふことを無覚して毎日読究と工作に専念がふい  
 ・元等の仲間（訓練班）は且て日本人民は革命  
 同盟として又戦に、行ケオに実水も革命  
 際内にも認められ且日本人革命分子達である。

この中で注目すべきことは、因縁の労働者  
 的義務を感じながら進歩分子の新進班の有志者が革  
 命的分子と提議、互に法蘭西第一級戦隊の烽火を奉  
 けたことである。斯くの如き者の進歩は現在了新  
 生活論会上の自由組織の下に、相互の和解と進歩と  
 に依つて所長局の方針と協力してゐる和平村の農民  
 的村民である。その組織には右論合で進行してゐる

所内月現論一階像を志す。既に創刊以来十ヶ月を  
 経る勢には協働村民等の列に反る五三層と共進  
 新する熱情とが一層一層に高まりつつある。

新する熱情とが一層一層に高まりつつある。

捕まると、いそぎを飛ぶから、運物場を物物の無か  
 原の如くぶらぶら、即ち我等の朝の散歩だ。春陽半  
 涼時は一岡谷外に遊列して、日直の号令の下に留  
 理員に人員報告をする。尤が清人だらう体操及び朝食  
 だ。

早や盛夏の酷暑も過ぎ去るとする山には、朝  
 の大気がしつとりと雲を包み、その向から柔い陽光  
 が微笑を掲げかけてくれる。皆は昂然と胸を張り、  
 胸中の空気を新陳代謝してかろ食堂へと飛込む。炊  
 事場はやはり村民中から選ばれたユツク達だ。ほの  
 か上る湯気と暖つるし下る粥をす、ッ込む。先ず  
 一日のエネルギーはこの粥食から増える。

「へーイッ！ シーソンのお代り？」 朝食が終  
 りて暫は休息がたら、各人自製のパイプに煙草を  
 かきす。

午前中の日課は訓練、研究両班は研究、工兵、新  
 生班は自由製作及び木工、後者は木工製品製作等々  
 。遊戯に於て木工、金工等の技術を弄つて来た人達  
 は巧みに玩具を作る。木製が主で模型の飛行機、車  
 艦、月舟車、戦車、銃及びその他力学を応用した玩  
 具や三木花鳥入の装飾品が兎事に出来上る。之は所  
 長の計らいで村長の一部負担を補ふ生産事業であり

役立つてゐる。及訪西民産陣線に於ける軍事訓練  
 先ア和平村重工業会社、と云ふエツトトが今の  
 所すばらしい。

所長、管理員（東京留學生の日本通の人もある）  
 も仲は親に理解を待ってくれた。所長が云つた、  
 中国人と日本人の親睦は先アこの牧場所から養成  
 されて將來の国際的友愛の基の理解者と云ふおぼ  
 うぬらの言葉は全く正しい。

ヤがて医務係のかん高い声が診察治療を報ずる。  
 叔期に入つて急病は午前中に亦つた。中四軒十  
 多食から遊遊せられた医官や看護が手を止めてくれる  
 。このころは突に善江日本人はいつて有難い。何と  
 か不ば病氣や疾疾が停慮にいつては一番の大敵だが  
 らである。村民の死亡率が外部に比較して減つた  
 のも全く医療のお蔭だ。

十一時、鐘は再び鳴り、朝食を告げる。朝食は既つ  
 た活カ素は既に又食し始め、皆の腹の虫がぐくぐく  
 鳴つた。食小こどが何より熱心な村民達存存存  
 の飯をつめ込む。遊立は皆然に炊事員と所長管理員  
 が按配する。物価騰貴は大キ不備手だが、然し肉食  
 白はほうとカロリーを補つてく事。午食が終つ  
 と十二時迄休みだ。皆は甚や將旗に打兵じたり、或



はコリンチヤームを穿しんたりする。最近申向望に  
取リ付けたベビー、ビリーヤードは時々全村民の人氣  
を一子に集めてゐる。

午後は天気、晴い時は運動をやる。主として野  
球、審判及び水泳。しかし朝、付ける太陽は皆以  
午體を儲てます。文は夏期肉として止むを得ない現  
象であるが、春や秋には人民市場は神宮外苑や甲子  
園を遊ばせる位張り切る。こゝで體験するのは水浴で  
ある。毎日ではないが、聖所の近くを流れる清江は  
熱帯ふるも雖も、村民は是とつては是つては、鎌倉、  
浜寺の海水浴場であり、或はせよらと清と故郷山内  
の小川でもある。村民達は河に行つたりする。河は、  
必ずかくとも魚一玉は獲へて歸る。河をかれは食事  
を歸はす。に意合であるから。

太陽も大分西に沈みかけ、午後四時、工作と  
遊働と暑氣に疲れた彼らに夕食がやつてくる。食后  
一服すると大浴七、八人を入れる浴場は一日の疲勞と  
と境を著してくれる。これは入浴好きの日本人には  
直望がらみである。

五時の月夜呼も清んで、宵のとはりが静かにあり

て、扇は一夜の精神的、副体的勞働を養つて各自居  
ひたひたの静寂をたのむ。推察に現れたる、夜は時々

内通、文學、音楽等を嗜む者も少くない。或はフ  
くわんと暗黒の夜に何つて何ものかの聴きと得よ  
うとする。記念式もある。兎角、夜は静寂と閑寂を  
寂寂所ではあるが、日中の新海やニユースは或事と  
將來を案ずる村民は多くのチーマと朋答を尋へて  
くぬるの意。

夜はわん／＼更けて行き、何処かでパイオリン  
の音が放出の音を述べて静寂に消えて行く。黒い高  
塔の響ひた人下ゆくこのメロヂーは、静や静寂を地  
る村民号にどん／＼も懸念を与へてゐるだろうか。

早調子和平村の一日は斯くして終つた。

次に村民達はいつては終る一日として、月一二

回、年教団に於ける開業大会及び記念式典がある。

此の日は勿論、村民中の素人音楽家、役者等が還  
境をもたれて賑ひ、踊り、衆しむるのである。過去に  
執着する者、米米は希望を弄つ者、一々、舞台で演  
する村民達の姿、中時代の姿であらう。

記念式典当日は、村民一用、服装を正し、孫文の

遺傳の節に参列して、三民主義を合唱する。固陋人

と大部分の村民は心得へてゐるから、決して不尊亦

ことばはない。東洋の革命的文としての孫文は、我

ら村民の尊敬を賜ふたのである。

大都會の村民の大を不内通であり、又唯一の命望でもあつた。即ち、和平村ニヤ田時向が具存の春現もしては余りにも豊饒すぎる様子を現実のドクマであつたとが判る。

一概に過去の日本で受けな社会的先和—奴隷的教育の束縛が時代の動機期に望む村民に如何に福まし自己円事をせせてゐるかと知俟は承してゐるのだ。然し後述の事柄の事柄でかく、その被害者として自覚せる村民等が、過去の階級が日勤の日常生活が現在の明顯な無活へ移り得たと云ふことも首肯出来る。

今や、地球の存続的物事は和平村の民にも警告を感ずした。革命闘争分子は言はずものか、多数の進歩的村民が来たるまで明日は備へて、戦争ニエ—又口耳目を鋭くし、討論は火花を散らす等、これこそ新秩序を以て他易く封建的過去の遺料から脱離せしめ、そして和平村は民道之ヲ、来たるまで新秩序の刷新を期すんことを承す以外は何ものであらうか。牧草所の一日はまことの豊饒だ。しかし丁度の一頁は竹と村民等と、竹は期待するべきものであらう。

和平村新生活協會歌(第一歌)

C調 ♪ 社章に

5   5-5 3 33   6-55   6 7 176   5-33   6-5 4 3   5-35   2 3 3 3   2-
5   1 1 5 6   6 1 5 2   2 2 4 6   5-2   2 2 5 1 2   3 1 5   7 6 2 7   1-

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

花の道に花をさすも

# 特 戰時日本の実情

轉

## 國內人民生活を覗く

本社調査部

### 東京工場従業員の巻

戦時より労働の強要と自軍用ヲシテスト強要下の日本は、正に焦燥と苦悶の中に在り、独裁者等は人民大衆に、生産力増進と書山歩道の勸告に一切を盡せしめんとしてゐる。

勤労大衆の工場生活はどの程度か、或は二、三の例を以テて之を採ることとする。

最近和洋的に到着せりメスマメ工業工場、山中芳達君の談に依れば次の如し。

#### 一 労働条件

(1) 賃金……日給制(資本工) 一分制  
 (女工) 七分

月給 (見習工) 二十五円内外 (通勤)

日給 (臨時工) 二円五十銭

(2) 労働時間 午前二時より午後五時三十分休職十二時三十分昼食——三時三十分休憩六時(五時間労働)

(3) 休日 (午後七時より午前二時正) 二部交替制ヲ現在実施中)

※ 事後前、十一時開門ナシ、夜更ナシ、ロッカ、早退及十二時内労働ニテツツガ長時間労働ノタメ病人、後、理由不明ノ致傷者ナシ、工場開ナシ、十一時開門労働ニ要ス。

(4) 待遇 衣、食、住、娯楽等ナシ。

※ 二回運動会ナリ、日常生活必需品等分賞品トシテ出ル。

臨時工ハナシ。見習工ハ不明。

階級の差別アリ。里取ト紀律ハ妻ヲ不嚴格ナル。自由休養許サレズ。工廠内ニ病院アリ。收容人

員百名。衛生自動車ニ台アリ。

健康保険 一ヶ月一円二十銭(全職工同シ。但シ臨時工ハナシ。入院ノ時ハ本給ノ六割ヲ支給サル。

職工組合 ナシ。(許サレズ)但シ、資本家側ニハ有利ナ国民登録アリ。私職ノ場合、一ヶ月前

他ノ工場ニ勤ムルコトガ不能。

労務人事政策 産業報國聯盟ニ服制加入。警察労働係ノ工場監視厳重。

従業員今次改善ノ対応態度 鞭打ヲ禁ム毎日不安ナ日ヲ送ル。

応召者 応召者ニ限リ軍隊ニ在ル期間中家族ニ対シ本給ヲ支給サル。会社ヨリ飲料多シ。仲間ヨリ

二百四日。

※ 応召者一年上の百名。夏徴兵一年二百名。

工場内既身制 工場長被ノ者ガ他ノ不思想ト競争ヲ監視ス。工場外ニ在リテハ忠夫、警察ガ職工

ト思想ニ拘リテ時ニ嚴重ニ監視セリ。

労働者ノ不満 物質制限ニ対スル不満。遊ビ時間不足ニ対スル不満。(三ヶ月ニ一回十回着ヲ服制的

二頁ハケル。ホリナス。時ハ二十四番)

精神ニ対スル不満。遊ビ時間不足ニ対スル不満。陽射射金ニ対スル不満。(十五円)独身

(五回世帯持)

是ニ依テ判るニトハ、一般工員は強要労働を押しつけられてゐる外に、臨時改善の方で動員されりか判

らんと云ふ不安を持つてゐるニトハわかる。

そこで、工員に対して、寧ろ産業報國精神を鼓吹して、警察時高労働係を工場内に正式に入れて、監視

せしめてゐる。要するに腹心へつても精神で働かせよと云ふわけである。

労働雑誌

日誌例

(女工)

一月八千五百

(女工)

四月十五

(取業手島十五、年三回昇給、男八、女四、一日二付キ)

男三、女六、女三、女六、(七時—十一時迄)

健康保険 月八十、公傷、傷合日給全額支給

労働者、今次事業に付る迄、会社で職工七、原料不足と仕事が出来ず、アツク云々、

(応召者二、日給全額支給、飯明百円、入費者二、五十円)

不満、低賃銀に付、法外ノ束縛、風紀取締リ、雇者ニ對シテ、

此の方面で在るとの会社でも、純正に就業するにも出来ず、徒らに青息吐息の情態である。政府は是れに對して何

の理致も講じないばかり、唯望工場への就業をすめりの外で、それに対する保証は何もしてくれない。道、うちに不意

に失業を強けられ、おまじと云々、話して、職工達は皆不安で仕事も手につかない。会社自身も整理がつかないで、

自滅するのを待たせ、おまじ。

# 鉱山労働者の巻

此種労働者には労働し、更に野山に引張り出された気、毒も元田孝一君は本村にて元の如く報告してゐる。労働者の日本重工業の不可救な資本である。是れは、我々の労働者も左の様に圧迫して、資本家側の利益に供してゐる。

賃銀 十八歳の産天倉庫雑飯

日給 一月二十五次 — 一月四十次

丹波屋倉庫人夫

三月 — 四月

労働時間 午前七時から午後六時迄

組の組織が... 此の制度を維持... 労働者の生活を改善する為...

○飯場親分... ○監視人...

是等の三つの関係者は皆前科者... 労働者を地獄に送り込む... 吾等として吾等が労働者の報酬を貰う...

労働者の親分と番頭は... 飯場と吾等の天引きと高利貸の関係で労働者を搾り... 又管理する...

炭坑の迫りには... 監視網を敷いておくと... 又恐ろしい... 炭坑の下においておくと... 吾等が労働者の生活を改善する為...

### 農村の実況

拡大する競争と増大する消費の負担に呻吟する日本農家の現況を新澤集中蒲原郡野不村出身の吉田次君の報告に依りよう。

『私の家は、田畑二町五段(内自作三段)を小作してゐるが、収入は去年九十五俵から不作の年は八十俵くらい平均八十五俵、畑収入八十四、是を働き手三人で耕作して来ました。(家族五名)和は昭和十五年米に凶作したのがその年の大体の収入日』

収入 五出

米 一三六〇円 (石四十円) 穀類 四〇〇円

菜 八〇円 小作料 五二〇円

労賃

三〇円

其の他

二〇円

計 一五二〇円

税金

六〇円

利子

三七四五円

生活費 二五〇円

其の他 一八〇円

計 一五六七四六六円

差引計赤字 四四四九六六円

此の中大部分の債務に依る収入不足のたのであり、種々の手段を講じて家族は絶望状態です。加へるに

肥料不足、油不足（送賦燈用・機械用）で収入は二割から三割の減少を来してゐるとの妻の手紙でした。

それに合せて聴いたことのあつた物産税が出来たといひ、交通税が三割増したといひで全く困つてゐるといふ話です。

私の村では昭和十一年、五月頃村役所が産業組合に強制加入させられた。その年の四月頃から籾米

検査のあつた籾米の噂が立つたので、皆準備して米を賣出せよといふことになりました。

丁度此の家は五月頃経済警察官と農会役員と農会倉庫員がやつて来て、かくしておいだばかりで

實際必要籾米まで三分の一位拉置されてしまひました。その為八月頃にはもう籾米はあふり、因り

して狡猾や農会に請へてやつと、拂下米と外米を混ぜた悪い米を買ふことが出来ました。やつと籾米を

免れたわけです。

全て機械類は個人買はず能く、組合を通じてやつてゐるわけですが、今は金身の弱い遺族がこへまじし

て生活してゐるが、そればかり心配です。また、砂糖、煙草等の日用品も配給制にまつて自由に得られ

ず、一番困るのは、着物にする反物がなく、純綿の手に入らずスエーデンのヤシク、着物では仕事は出来ず、

冬にあつて雪が降つても農家にどうしてしも必要がゴムの靴も、地下足袋も手に入らぬ状態です。

又、福井県丹生郡西安井村の自作農菅藤作（男、六十八歳）の如く語る。

私の家は自作三町、十作三反（内二反は畑地）働き手四名、家族七名で耕作して来ました。







日本のフアシストは、これに對してどう辯解するのか!

X X X X

八月十六日午前七時より和平村礼堂に於て、故王希林閣下の追悼會は嚴に舉行された。式は忠炮、哀樂の吹奏と共に開始され、主祭人及各代表の焼香、主祭事畧の宣讀、村民代表よりの連悼の辞等、嚴肅裡に行はれた。尚本日は全村民専ら敬吊の意を表し、歌舞音曲、肉食、娯樂を慎しみ、教主帝の偉業を偲びつゝ有意なる一日を送つた

X X X X

北アフリカの戦争結束、ムシラ一島への盟軍進軍、ムツソーニの下台、南北兩太平洋戦の日本側敗北、在露戦場の中因軍部西大勝、宋外長在英声明、加へる

にソ聯の討伐攻撃と在ソ自由ド

を與へ、一般村民の日本の軍權政府に對する信頼は著しく低下、軸心側に秘に心中希望をつないでゐた認識、不足分子も今や全く新しき歴史の事實を認めざるを得なくなつた。又進歩的日人によつて組織されてゐる新生活協

會方面では、かゝる「國際政局に當り、在華日人の反フアシス陣爲統一」「自由日本」「民主日本」の確立等々の要望は日に増して熱烈を加へ七月三十一日新生班有志の大家的要求たる「在華日人反法西斯統一戦線準備討論會

は研究班、訓練班に向つて提案、正此各班の有志の間に熱烈なる討論と批判が開陳され和平村は將に日本民主革命の温床たるの感を深くせしめてゐる

X X X X

和平村に早くから到着した人々、是よつて精誠されてゐる後會に

對する認識不足分子が多かつた成時局の激は和平村をも見迷はせし、漸次一此等分子も、目ざしぬ一掃有志によつて「はたか合は組織された。人用として、實事な忠實な人生探求に覺醒して、人格の修養、研鑽に勵まんとする人々が、或は精神方面に、或は智識方面に、將又因体方面に努力修養してゆく一つの組織を作つたことは、喜ばしい、ニエースである。

X X X X

和平村研究班では月刊の壁報を「潮」と改題し、熱烈な日本革命主張を掲載してその研究結果を發表することになつた。是によつて、訓練班より掲載される壁報「要地」と並んで、和平村に於ける好一對の先聲的、前衛的、革命理論の発表機関となつた感がある。此の外に大家団体たる新生班の壁報があるが、是も最近は新生班の思想的

訓面班の壁紙に負けない程の躍進を示してゐる。

X X X

訓練班主催による在華日本人及女戦争同盟会機關成立三週年記念大会は七月二十日午後五時より盛大に行はれた。この歴史的記念日の行事として友誼団体及び同好運動者を招待せる晩餐会が催され、續いて七時より記念式が舉行された。

一 開会

二 訓練班全員の、同盟歌

合唱

三 黙禱 三分間

四 岸本代表による宣言並綱領

の朗讀

五 沢村代表による挨拶

六 来賓祝辭として 高橋、長

谷川、辻、林、新侯君の演

説

満場湧くが如き盛大裡に入時閉

歴史的記念日の有意義な大会は終了した。

X X X

去る郭西作戦の大勝を祝して、嘗てオオ戦王で新戦王を稱へた特別關係の深い在華日本人及女戦争同盟会和平村訓練班は七月十四日オオ戦王司令長官陳誠閣下大鄭重なる祝辭を述べた。陳閣下よりは同盟各員の奮斗を激励し、役務を一切の悪慮を減し一日も早く母界人類永久平和實現の爲に戦ふと云ふ内容の懇切なる答辭を受けた。

X X X

和平村に於ては外部にコレラ流行の危險に備へ赤十字施療隊にもよつて全村民八月十七日に一回、二十四日にオ二回を實施した。村長にとつては此の赤十字施療隊の活躍は「命の親」と

である。この夏季は赤十字施療隊を組織してゐるので、村長の健康は例年にない好況を呈してゐる。

和平村給日記 8月24日

コレラ防疫注射



# 東亞先鋒

韓國復興會第一回

江見光 編

# 創刊

臺灣班 同

江見光 編

史書の上巻を吾輩はフアスムの強盛國家に對し、  
 能動的に功績に出るべき時機である。故に吾輩同盟  
 國家、於ては日一日の積大な團結力の發展しつゝ、あ  
 る段階にある。山村に在りても皆、諸君各位が所長所員  
 の親愛と指揮の至作。又復舊誌「東亞先鋒」を創刊  
 されることは全村民中特に朝鮮民族は、三十余年未  
 日本フアスムの自由を無視せる統治の下に於て、  
 悲境を生活に苦しみ来たもので、かかる朝鮮民族に  
 對しては正に「百傷者の杖」とも云ふべき存在であ  
 る。故に本誌の創刊は我々會員一同熱心から觀望し  
 賢意を表すものである。誌上の作者各位は文化發  
 展上特に意入を有し漢語和平學は「東亞先鋒」の  
 論文により認識され吾輩等、昔々未だ飢餓に苦し  
 む人類を救はれんことを希冀して止まぬであらう。

東亞先鋒の光輝を居るに望す

東方弱小民族 自由解放を期す

友誼「東亞先鋒」の誕生を期す

輝かしく陽光は四圍の山林の木の間に流れ出で、  
 玲瓏な露も、青苔のさへさへする声は止むことなく早  
 に響き、人の子の心も悲しめ、清水は流れて東に  
 流る

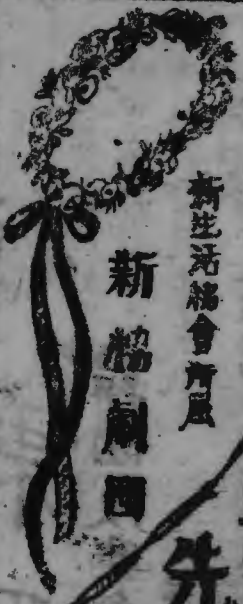
明媚な吾が白濁は水々の静寂な心で、流れ出る  
 情緒を與ふ

今日、東亞先鋒 創刊の記念は即ち吾輩復興同志の  
 東亞先鋒創刊に參加の記念日なり。故に吾輩四人志  
 後の下に時々刻々日本同胞の爲に解林を奮起し、  
 工作に従つては、革命新日本の熾烈な火焔を心中に  
 抱く。創刊に際し瑞腔の熱情を以て慶祝すまで共  
 に、共同革命上作を深々期待し、革命新日本に邁  
 進し、台湾、東北を恢復し、韓國を解放せしめ  
 東方弱小民族を擁護し、革命大業を完成せんことを

期待すること切なるものあり

茲に創刊を謹賀し、前途の曙光を祝す

一九四二・八・二七



新生活協會所屬

新協劇團

先鋒

群像社

月刊 文藝雜誌

新生活協會發行

祝!

東

亞

先

和平村

韓臺聯合班

和平村

めざまし

新聞社

和平村新生活協會

執行委員長

訓練班

研究班

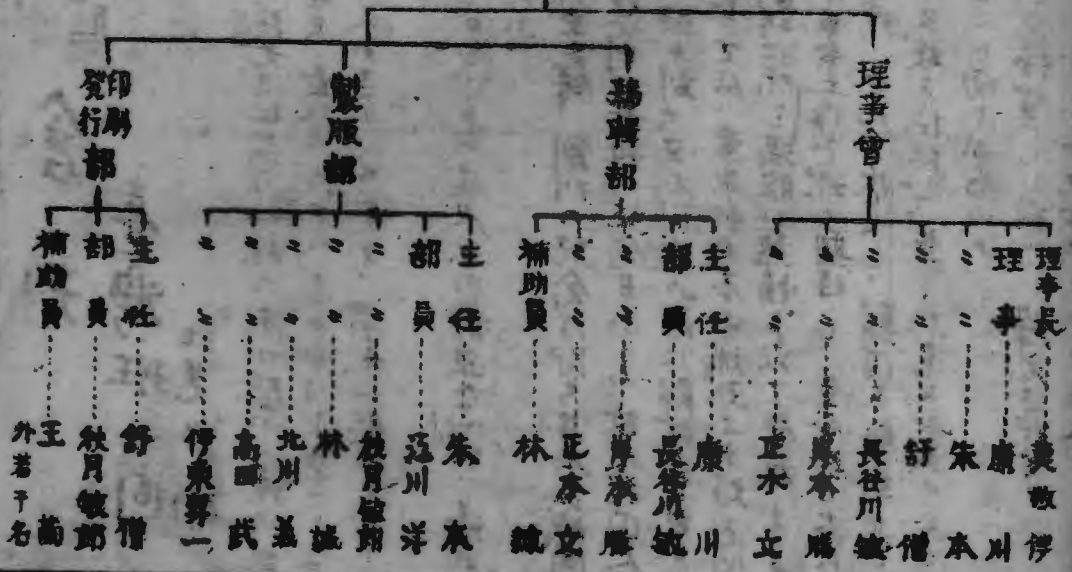
新生班

御挨拶

本社創立に際し各社並に各方面にあがれては  
 布衣、御丁重ある御祝詞を蒙るも一口本紙に  
 掲載御礼に代うべき所紙数の都合上書留仕候  
 尚紙に御挨拶を以て御厚意は深謝仕候  
 昭和二年九月一日  
 本社社長 莫敬修  
 社員 長 莫敬修  
 一 莫敬修  
 同 莫敬修

本社職員表

社長莫敬修



熱烈なる國際的正義心と飽く亦き眞理への欲  
求心は我等を驅つて、東亞先鋒の發行に至らしめ  
た。

勿論、創業の賜、内容は未だ不充分である。  
而シ亦がう東亞先鋒社に依つて結ばれた良心的  
在華日人と中國知識人士の懸える文化擁護高揚  
の精神と優勝戦争絶滅への望める願望は充分に  
讀者に理解していただけるものと思ふ。そのた  
めに本社は先づ遠東の優勝者日本軍事マアシマ  
の野望を正確に分析し、是に對する在華日人の  
正しい態度を紹介し、併せて赤標マホる日人の  
良心的文藝工作の一掃を發表し、一面、中國並  
に反邦盟國有志人士の批判を乞ひ、又他一面日  
本人自身の研究向上と相互奮勵の責に供せんと  
試みた。

戦争の擴大と戦禍の深きは今や日本人をして  
長年の封建的迷夢より覺醒せしめつゝある。

彼らは何を云はんとするか、讀者の熱讀檢討  
を乞ふ。

本社發刊、東亞先鋒、ハ定數ノミノ印刷  
ニ限レルモ持ニ定數外配布ノ希望アルガ  
面ニハ一部ニ拾元ヲ以テ増刷量是マルニ  
付、直ニ必要部發申込マレタシ。

隔月發行

# 東亞先鋒

第一期  
第一卷

民國三十三年九月一日發行

編輯責任者

康川

印刷責任者

舒慈伯

印刷所

東亞先鋒刊行社印刷局

發行所

貴州 鎮遠 和平村

東亞先鋒刊物社

社長 莫敬儀

非賣品



無断上演映

轉載・翻譯

# 目次

表紙

慶祝友邦元首即位大典

新生活協會

卷頭言

康川 4

中國の運命と世界の前途

蔣中正 5

日本知識階級の動向

10

文壇論

日本知識階級の動向

大學の顛落

長谷川 15

戦争の犠牲と我々在華日本同胞へ

高橋幸雄 20

三國會議の及す軸心への脅威

湘田新一 28

日本戦時経済の一面

新波健次 30

新旧村民間答

池上敏夫 34

最近東京市内配給制度風景

藤上 40

自い自転車

沙 45

全て貼れ切った

46

東亞先鋒

"EASTERN-PIONEER"

版 文 目

1943. 11. 1.



社物刊全先亞東大平抗



最近日軍火線を詰る  
日軍將兵座談會

主編  
本社編輯部 52

◎和平村供り

本社特派員 62

特輯：東亞先鋒友の會結成大會

綱領

(夜讀本名)

65

宣言

66

経過報告

67

祝詞

68

祝詞

68

東亞先鋒友の會成立に關する

69

東亞先鋒友の會成立に關して

70

東亞先鋒友の會成立に關して

71

祝詞

72

公濟預告 續

編輯部

編輯部

# 慶祝友邦元首蔣中正就位大典

民國紀元三十三年十月十日第十節の佳日に際り友邦中華民国国民政府主席蔣中正陸海空軍大元帥蔣中正閣下就位典禮奉行せらるるに當り此処に謹しきて我等在華日本人民は之ヲ誦古ノ風氣に誦世誦憲以つて祝詞を捧ぐんとするものであります。

今況蔣閣下の國民政府主席、陸海空軍大元帥就任は全く中華民國の大業を定むる爲の國體を安定され、外は外侮を禦し、内は三民主義に徹る憲政實現に邁進するの精神を光輝するに至り奉りたる見は之に友邦四億五千萬の中國々民の露炮轟轟するはかりでなく我等日本人にとつても喜悅然と傳ざるものがあります。

何故ホシは、日本軍事アレストの惡討とその毒牙の害は、單に中國の人民を危害にせざる爲に止まらず、先にもその被害は、疾く日本人民の同胞並に台韓の南入民族及び、國內と鄰國とも隣らず、先にも日本の人民こそ、中國人民に隣るとも劣らぬ言語に絶する痛手を感じたる爲とあり、而も此の惡鬼の野望の前に孰れ巨木の如く屹立してその飽くなき僥倖の魔手を峻拒せし者、實に中國々民先總統、蔣公中正その人であり、その領導下の中國國民諸君であるからであります。

此の意味に於て、本典禮こそ、亞洲に於ける反僥倖諸民族全体の氣も歴史的な光榮の式典であり、吾等東亞陣綫の共通不意義ある嚴肅な祝典と云ふべきであります。

此の光榮の日に際し我等は益々中國統運大業の完成と日本民主革命の本體の信念を堅決にし、奮烈ある帝國主義者の絶滅への聖なる闘争に槍身邁進することを著しく宣言し、以て本大典の祝詞に代りて次第とあはします。

民國三十三年十月十日

和洋村 承入 新生 吉岡會



# 言 豆 卷

……自撃を潰退・印結と分鏡……

正義自由の收獲・暴力の舞休……

今や戦争は民主國制の勝利の一途をも接近し、あゝ平和の曙光は既に颯々  
人類の幸福は鎖鉄の鎖く約束されてある。

上國の自由と平等、民族の厚みと獨立の尊嚴をせよ、吾等國家の目的は、  
我等愛國陣營の掲げる旗幟ともあり、是斯く信じてこそ、戦争の果ては平和の  
榮耀が世界の各戦場を染血し、又流血しつゝあり、是れにより以上の流血を  
しない國因でもある。

而して被圧地人民と民族の激起は此の一大目的達成の最も條件であり、又斯く  
してこそ各民族は解放され自由、平和は人民の所望を成し得る。

國運を運來する全世界人民の同精神として不屈なる陣營、戦列の前進、  
それには種族の屈辱下を呻吟する者と民主陣營は精進、すくものとも河はない  
のである。此の要求を遂げる我が戦列の限りない發展と進歩、前にもはや、侵略  
者の暴行と策謀は分断と潰退を余儀なくす小人民の眞理と義の旗は高く高く世紀  
の勝利に輝くのである。

# 中國の運命と吾界の前途

蔣中正

原川(譯)

我々は科學の不發達と技術の不進歩とは我が中國貧弱の一つの顯かたして且つ最も恐ろしむべき原因であることを知つてゐる。百年來の方中國の人士は外國の科學並に技術を習得せんが爲に遂に外國第一級の文化をもて兼得するに至り中國固有の民族精神と國策道徳そのものに優着し及び將長のあることを忘れてゐる。而して中國固有の政治哲學は尤より我族固有の精神の精華の精華である。中國の政治哲學は使命と生産の技術として人生に奉仕するものであり、そして使命と生産の技術で人生を便致するものとするものである。孟子の説く「仁、民の愛物」は即ち國家としては頗く人衆の生産の爲に物質を支配するものである。而して切實の爲に人民を養育してはならぬことを示すものである。又文學の説く「窮人死節、有死地有節」は即ち生産の前途は民生の爲に命を賭すべきであり、又して生産技術を以て人生を榮にすることはならぬことを示すのである。

三千年以來史の程の政治哲學と經濟學とが中國の民族の心理を支配し來り、而して國策の存在も大抵の程の政治哲學並に經濟學と密の關りをもつて來たものである。上記(一)「中國の運命」第一章「中國の運命」の序論と第二章「中國の運命」の序論と第三章「中國の運命」の序論と第四章「中國の運命」の序論と第五章「中國の運命」の序論と第六章「中國の運命」の序論と第七章「中國の運命」の序論と第八章「中國の運命」の序論と第九章「中國の運命」の序論と第十章「中國の運命」の序論と第十一章「中國の運命」の序論と第十二章「中國の運命」の序論と第十三章「中國の運命」の序論と第十四章「中國の運命」の序論と第十五章「中國の運命」の序論と第十六章「中國の運命」の序論と第十七章「中國の運命」の序論と第十八章「中國の運命」の序論と第十九章「中國の運命」の序論と第二十章「中國の運命」の序論と第二十一章「中國の運命」の序論と第二十二章「中國の運命」の序論と第二十三章「中國の運命」の序論と第二十四章「中國の運命」の序論と第二十五章「中國の運命」の序論と第二十六章「中國の運命」の序論と第二十七章「中國の運命」の序論と第二十八章「中國の運命」の序論と第二十九章「中國の運命」の序論と第三十章「中國の運命」の序論と第三十一章「中國の運命」の序論と第三十二章「中國の運命」の序論と第三十三章「中國の運命」の序論と第三十四章「中國の運命」の序論と第三十五章「中國の運命」の序論と第三十六章「中國の運命」の序論と第三十七章「中國の運命」の序論と第三十八章「中國の運命」の序論と第三十九章「中國の運命」の序論と第四十章「中國の運命」の序論と第四十一章「中國の運命」の序論と第四十二章「中國の運命」の序論と第四十三章「中國の運命」の序論と第四十四章「中國の運命」の序論と第四十五章「中國の運命」の序論と第四十六章「中國の運命」の序論と第四十七章「中國の運命」の序論と第四十八章「中國の運命」の序論と第四十九章「中國の運命」の序論と第五十章「中國の運命」の序論と第五十一章「中國の運命」の序論と第五十二章「中國の運命」の序論と第五十三章「中國の運命」の序論と第五十四章「中國の運命」の序論と第五十五章「中國の運命」の序論と第五十六章「中國の運命」の序論と第五十七章「中國の運命」の序論と第五十八章「中國の運命」の序論と第五十九章「中國の運命」の序論と第六十章「中國の運命」の序論と第六十一章「中國の運命」の序論と第六十二章「中國の運命」の序論と第六十三章「中國の運命」の序論と第六十四章「中國の運命」の序論と第六十五章「中國の運命」の序論と第六十六章「中國の運命」の序論と第六十七章「中國の運命」の序論と第六十八章「中國の運命」の序論と第六十九章「中國の運命」の序論と第七十章「中國の運命」の序論と第七十一章「中國の運命」の序論と第七十二章「中國の運命」の序論と第七十三章「中國の運命」の序論と第七十四章「中國の運命」の序論と第七十五章「中國の運命」の序論と第七十六章「中國の運命」の序論と第七十七章「中國の運命」の序論と第七十八章「中國の運命」の序論と第七十九章「中國の運命」の序論と第八十章「中國の運命」の序論と第八十一章「中國の運命」の序論と第八十二章「中國の運命」の序論と第八十三章「中國の運命」の序論と第八十四章「中國の運命」の序論と第八十五章「中國の運命」の序論と第八十六章「中國の運命」の序論と第八十七章「中國の運命」の序論と第八十八章「中國の運命」の序論と第八十九章「中國の運命」の序論と第九十章「中國の運命」の序論と第九十一章「中國の運命」の序論と第九十二章「中國の運命」の序論と第九十三章「中國の運命」の序論と第九十四章「中國の運命」の序論と第九十五章「中國の運命」の序論と第九十六章「中國の運命」の序論と第九十七章「中國の運命」の序論と第九十八章「中國の運命」の序論と第九十九章「中國の運命」の序論と第一百章「中國の運命」の序論と

歐羅パの支那として存続することを要求したのである。それ故に中國の繁盛たるは時勢にありても主權を人民  
が握るべきである。或る政治的の史實を以てはなかつた。東洋は中國主權と東洋地帯の權利を主張した。た  
の下の。此の種の政治哲學と政治道徳は歐洲近代社會の基礎とするところである。彼の資本主義者は人

を以て生産技術の下に隷屬せしむるに依りて利潤を追求し、彼の帝國主義者は人王として或る或る國の下  
に隷屬せしむるに依りて植民地の開闢を求めた。それ故に去年の思想の突進してゐる中に於ては國  
内の諸派と國際の民族戦争とが或るや東洋の腐爛を宣告してゐた。そして天賦の地帯に人類が痛く更  
りて進歩し得ないに於けると歐羅パ人は又科學が或るや人類の發展を促進するに適宜である故に或るや腐爛に人

類の發展も西洋を模倣して科學の進歩も人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の  
進歩も人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて

ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて

ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて

ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて

ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて  
ゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つてゐる。それ故に人類の進歩は人類の進歩にその責任を負つて

大戦終結と同時に共同防衛して戦争の原因を除去することや出来ないのである。戦争の原因が除去されれば  
 かつたならば第二次の大戦の機は直ぐ第三次大戦で燃焼し果すものであつてそれは殆ど第二次大戦が第  
 一次大戦を繼承したものであると何らの異うがないと云ふことにはなるのである。

戦争の原因は何であるかの。凡そ大戦の原因は國家の間に懸隔した政治經濟及び軍事の齟齬と行  
 爲及び其の趨の齟齬と行爲に依つて發生されたところの關係と相違は合して戦争の原因である。故に私が見  
 ふに之も事實に云へば戦争の原因は即ち帝國主義である。第三次大戦の原因は同時並行に帝國主義の競争では  
 なければならぬ又盛くしてこそ吾國永久の平和が成つて空費なる存在であり得るのである。

我々が中國の置けた民族主義の競争に對する人として最も憂うものであつた。故に我が中國の民族自  
 由と國家存続に對しての要求は最も急にして且つ最も切である。我々が中國を世界に割つて其の最も急にし  
 て且つ最も切である要求は幾多したものは決して中國を破壊してゐる日本の女はれを嫌はぬ。中國は亞細亞洲  
 のキーストーンとして居る。やうなものは無い。五十年又其の四國聯盟に對する態度の史實は只  
 民族自衛と共同防衛の「民族」こそあつたが決して他國を侵略した種族はなかつたことを銘記しなけ  
 ればならぬ。百年來東洋國際の運動は中國の長久一致せる要求を遂げたものである。然し而して中  
 國の専制獨裁には二つの意義があり、それは最も自身が認識し又吾國各國にも共に認識して其になければ  
 ならぬ一つである。第一に中國が自主と自強を回復した後には決して自身を全亞東に受けとめた吾國を他國  
 の身上に知ることにはなく、更に日本帝國主義を打倒したも後には決して日本帝國主義の利益を保護して一重  
 重亞洲を侵奪するの意圖と行爲あるを覺てはなからぬ。第二に中國の自主と自強は多く貧乏は即ち中國  
 が自身にて立ち上る事を目指すのである。中國が自ら立ち上る、專人も成すれは即ち精神工及び物質工  
 に於て自由を求めた獨主を求めなげればならぬ。亦國防經濟政治及び文化の各方面に於て必ず進歩を求め要  
 求を求めなければならぬ。中國の自主自強は又決して中國の利益に關するものでない。中國の自強は東  
 北獨主を求め進歩を求め、そして專横を求めんとするその所以の運動は吾國各國と一重亞洲を侵奪して  
 ものである。更に吾國各國と共同して吾國の永久平和と人類の自強と幸福とを成すことである。

我々が中國の置けた民族主義の競争に對する人として最も憂うものであつた。故に我が中國の民族自  
 由と國家存続に對しての要求は最も急にして且つ最も切である。我々が中國を世界に割つて其の最も急にし  
 て且つ最も切である要求は幾多したものは決して中國を破壊してゐる日本の女はれを嫌はぬ。中國は亞細亞洲  
 のキーストーンとして居る。やうなものは無い。五十年又其の四國聯盟に對する態度の史實は只  
 民族自衛と共同防衛の「民族」こそあつたが決して他國を侵略した種族はなかつたことを銘記しなけ  
 ればならぬ。百年來東洋國際の運動は中國の長久一致せる要求を遂げたものである。然し而して中  
 國の専制獨裁には二つの意義があり、それは最も自身が認識し又吾國各國にも共に認識して其になければ  
 ならぬ一つである。第一に中國が自主と自強を回復した後には決して自身を全亞東に受けとめた吾國を他國  
 の身上に知ることにはなく、更に日本帝國主義を打倒したも後には決して日本帝國主義の利益を保護して一重  
 重亞洲を侵奪するの意圖と行爲あるを覺てはなからぬ。第二に中國の自主と自強は多く貧乏は即ち中國  
 が自身にて立ち上る事を目指すのである。中國が自ら立ち上る、專人も成すれは即ち精神工及び物質工  
 に於て自由を求めた獨主を求めなげればならぬ。亦國防經濟政治及び文化の各方面に於て必ず進歩を求め要  
 求を求めなければならぬ。中國の自主自強は又決して中國の利益に關するものでない。中國の自強は東  
 北獨主を求め進歩を求め、そして專横を求めんとするその所以の運動は吾國各國と一重亞洲を侵奪して  
 ものである。更に吾國各國と共同して吾國の永久平和と人類の自強と幸福とを成すことである。

我々が中國の置けた民族主義の競争に對する人として最も憂うものであつた。故に我が中國の民族自  
 由と國家存続に對しての要求は最も急にして且つ最も切である。我々が中國を世界に割つて其の最も急にし  
 て且つ最も切である要求は幾多したものは決して中國を破壊してゐる日本の女はれを嫌はぬ。中國は亞細亞洲  
 のキーストーンとして居る。やうなものは無い。五十年又其の四國聯盟に對する態度の史實は只  
 民族自衛と共同防衛の「民族」こそあつたが決して他國を侵略した種族はなかつたことを銘記しなけ  
 ればならぬ。百年來東洋國際の運動は中國の長久一致せる要求を遂げたものである。然し而して中  
 國の専制獨裁には二つの意義があり、それは最も自身が認識し又吾國各國にも共に認識して其になければ  
 ならぬ一つである。第一に中國が自主と自強を回復した後には決して自身を全亞東に受けとめた吾國を他國  
 の身上に知ることにはなく、更に日本帝國主義を打倒したも後には決して日本帝國主義の利益を保護して一重  
 重亞洲を侵奪するの意圖と行爲あるを覺てはなからぬ。第二に中國の自主と自強は多く貧乏は即ち中國  
 が自身にて立ち上る事を目指すのである。中國が自ら立ち上る、專人も成すれは即ち精神工及び物質工  
 に於て自由を求めた獨主を求めなげればならぬ。亦國防經濟政治及び文化の各方面に於て必ず進歩を求め要  
 求を求めなければならぬ。中國の自主自強は又決して中國の利益に關するものでない。中國の自強は東  
 北獨主を求め進歩を求め、そして專横を求めんとするその所以の運動は吾國各國と一重亞洲を侵奪して  
 ものである。更に吾國各國と共同して吾國の永久平和と人類の自強と幸福とを成すことである。

我々が中國の置けた民族主義の競争に對する人として最も憂うものであつた。故に我が中國の民族自  
 由と國家存続に對しての要求は最も急にして且つ最も切である。我々が中國を世界に割つて其の最も急にし  
 て且つ最も切である要求は幾多したものは決して中國を破壊してゐる日本の女はれを嫌はぬ。中國は亞細亞洲  
 のキーストーンとして居る。やうなものは無い。五十年又其の四國聯盟に對する態度の史實は只  
 民族自衛と共同防衛の「民族」こそあつたが決して他國を侵略した種族はなかつたことを銘記しなけ  
 ればならぬ。百年來東洋國際の運動は中國の長久一致せる要求を遂げたものである。然し而して中  
 國の専制獨裁には二つの意義があり、それは最も自身が認識し又吾國各國にも共に認識して其になければ  
 ならぬ一つである。第一に中國が自主と自強を回復した後には決して自身を全亞東に受けとめた吾國を他國  
 の身上に知ることにはなく、更に日本帝國主義を打倒したも後には決して日本帝國主義の利益を保護して一重  
 重亞洲を侵奪するの意圖と行爲あるを覺てはなからぬ。第二に中國の自主と自強は多く貧乏は即ち中國  
 が自身にて立ち上る事を目指すのである。中國が自ら立ち上る、專人も成すれは即ち精神工及び物質工  
 に於て自由を求めた獨主を求めなげればならぬ。亦國防經濟政治及び文化の各方面に於て必ず進歩を求め要  
 求を求めなければならぬ。中國の自主自強は又決して中國の利益に關するものでない。中國の自強は東  
 北獨主を求め進歩を求め、そして專横を求めんとするその所以の運動は吾國各國と一重亞洲を侵奪して  
 ものである。更に吾國各國と共同して吾國の永久平和と人類の自強と幸福とを成すことである。

我々が中國の置けた民族主義の競争に對する人として最も憂うものであつた。故に我が中國の民族自  
 由と國家存続に對しての要求は最も急にして且つ最も切である。我々が中國を世界に割つて其の最も急にし  
 て且つ最も切である要求は幾多したものは決して中國を破壊してゐる日本の女はれを嫌はぬ。中國は亞細亞洲  
 のキーストーンとして居る。やうなものは無い。五十年又其の四國聯盟に對する態度の史實は只  
 民族自衛と共同防衛の「民族」こそあつたが決して他國を侵略した種族はなかつたことを銘記しなけ  
 ればならぬ。百年來東洋國際の運動は中國の長久一致せる要求を遂げたものである。然し而して中  
 國の専制獨裁には二つの意義があり、それは最も自身が認識し又吾國各國にも共に認識して其になければ  
 ならぬ一つである。第一に中國が自主と自強を回復した後には決して自身を全亞東に受けとめた吾國を他國  
 の身上に知ることにはなく、更に日本帝國主義を打倒したも後には決して日本帝國主義の利益を保護して一重  
 重亞洲を侵奪するの意圖と行爲あるを覺てはなからぬ。第二に中國の自主と自強は多く貧乏は即ち中國  
 が自身にて立ち上る事を目指すのである。中國が自ら立ち上る、專人も成すれは即ち精神工及び物質工  
 に於て自由を求めた獨主を求めなげればならぬ。亦國防經濟政治及び文化の各方面に於て必ず進歩を求め要  
 求を求めなければならぬ。中國の自主自強は又決して中國の利益に關するものでない。中國の自強は東  
 北獨主を求め進歩を求め、そして專横を求めんとするその所以の運動は吾國各國と一重亞洲を侵奪して  
 ものである。更に吾國各國と共同して吾國の永久平和と人類の自強と幸福とを成すことである。

心を通つておぼえとしなひのてある。だからして中國が帝國主義に反對して吾界に居座するに於ては、又して自ら帝國主義の軌道に陥じ再び帝國主義の首領を踏むと責むべきなのである。

或は中國は百年來自己の歴史したる苦痛に基き自己の運命を急務と覺悟し、實に吾界の政治環境である事實に鑑みて、亞細亞諸民族の自由と國家の平等に對しては、情以上の熱切である。其の理由、亞細亞の面積は吾界の面積の四分の一に佔れ、其の人口は吾界の人口の五分の一以上の數を占めてゐる。又亞細亞の各民族の多くは、我が中國と同様に、被壓迫の苦境に處する。其の苦境を共にして居り、且つ其の被壓迫の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

自由を欲し、我は吾人は別ち亞細亞の各民族は、同じく同様に、被壓迫の苦境に處する。其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

吾界の平等も、亞細亞の平等も、其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

吾界の平等も、亞細亞の平等も、其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

吾界の平等も、亞細亞の平等も、其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

吾界の平等も、亞細亞の平等も、其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

吾界の平等も、亞細亞の平等も、其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

吾界の平等も、亞細亞の平等も、其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

吾界の平等も、亞細亞の平等も、其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。又其の苦境を共にして居り、且つ其の苦境を共同に負つた。

と獨上は文化の自由と獨上とを以つて重要とするものである。日本帝國主義者の唱へる所の「日本主義」とナチズムの所謂「ゲルマン種族優越論」とは均しく吾界平和を破壊すも思想である。今彼に於て文化優越の思想は、思想は少くも如くに吾界より他へを以て著しくしてこそ、苟くして吾界の平和を完全に保持せしめらるゝのである。

上述の思想は中國が在りて活動した日より更に其の著明の境況が明らかにして歐洲革命と大平洋革命と發して以來我が國の東亞海外外交を吾面の精華と文化並に思想を吾面の海運は更にそれと具體的に實現するも前夕に於て推し進めた。而して理想の最後は依然として我が中國全体の國運が國家革命の路に達して抗戰建國の任務に就きて艱苦なる奮闘を遂行せらるべからざる所に在りてはならぬのである。

(皇後 正中華書局出版 中國之命運 第八章に在る。……)

中國の命運

- 第一章 中華民族の成長と發達
- 第二章 國體の因來と革命の経路
- 第三章 國民革命の意義と學問の發展及其對内外界
- 第四章 不平等條約の訂正と國運の反展
- 第五章 不平等條約の對吾の源則化
- 第六章 不平等條約に對する經濟と法學の影響
- 第七章 不平等條約に對する政治の影響
- 第八章 不平等條約に對する社會の影響
- 第九章 不平等條約に對する教育の影響
- 第十章 不平等條約に對する文化の影響
- 第十一章 不平等條約に對する思想の影響
- 第十二章 不平等條約に對する藝術の影響
- 第十三章 不平等條約に對する宗教の影響
- 第十四章 不平等條約に對する科學の影響
- 第十五章 不平等條約に對する衛生の影響
- 第十六章 不平等條約に對する體育の影響
- 第十七章 不平等條約に對する遊藝の影響
- 第十八章 不平等條約に對する交通の影響
- 第十九章 不平等條約に對する情報の影響
- 第二十章 不平等條約に對する労働の影響
- 第二十一章 不平等條約に對する犯罪の影響
- 第二十二章 不平等條約に對する慈善の影響
- 第二十三章 不平等條約に對する救済の影響
- 第二十四章 不平等條約に對する教育の影響
- 第二十五章 不平等條約に對する文化の影響
- 第二十六章 不平等條約に對する思想の影響
- 第二十七章 不平等條約に對する藝術の影響
- 第二十八章 不平等條約に對する宗教の影響
- 第二十九章 不平等條約に對する科學の影響
- 第三十章 不平等條約に對する衛生の影響
- 第三十一章 不平等條約に對する體育の影響
- 第三十二章 不平等條約に對する遊藝の影響
- 第三十三章 不平等條約に對する交通の影響
- 第三十四章 不平等條約に對する情報の影響
- 第三十五章 不平等條約に對する労働の影響
- 第三十六章 不平等條約に對する犯罪の影響
- 第三十七章 不平等條約に對する慈善の影響
- 第三十八章 不平等條約に對する救済の影響
- 第三十九章 不平等條約に對する教育の影響
- 第四十章 不平等條約に對する文化の影響

- 第五章 國際的地位——抗戰期間及戰後對國際關係と外交の發展
- 第六章 國民革命の源則化
- 第七章 經濟と法學の發展問題
- 第八章 政治の發展問題
- 第九章 社會の發展問題
- 第十章 教育の發展問題
- 第十一章 文化の發展問題
- 第十二章 思想の發展問題
- 第十三章 藝術の發展問題
- 第十四章 宗教の發展問題
- 第十五章 科學の發展問題
- 第十六章 衛生の發展問題
- 第十七章 體育の發展問題
- 第十八章 遊藝の發展問題
- 第十九章 交通の發展問題
- 第二十章 情報の發展問題
- 第二十一章 労働の發展問題
- 第二十二章 犯罪の發展問題
- 第二十三章 慈善の發展問題
- 第二十四章 救済の發展問題
- 第二十五章 教育の發展問題
- 第二十六章 文化の發展問題
- 第二十七章 思想の發展問題
- 第二十八章 藝術の發展問題
- 第二十九章 宗教の發展問題
- 第三十章 科學の發展問題
- 第三十一章 衛生の發展問題
- 第三十二章 體育の發展問題
- 第三十三章 遊藝の發展問題
- 第三十四章 交通の發展問題
- 第三十五章 情報の發展問題
- 第三十六章 労働の發展問題
- 第三十七章 犯罪の發展問題
- 第三十八章 慈善の發展問題
- 第三十九章 救済の發展問題
- 第四十章 教育の發展問題

第八章 中國の命運と吾界の前途





独軍の力は制約され、優勢なる敵軍に正進せしめられ、決して長と拵ることへる事は出来な  
 う。敵軍の前進の時は眼前に迫つた。国内でも急進してゐる所の情勢を見よ。獨逸は従つて戦場は  
 各都市、各工場中心と進歩中心は否、時局の経る毎に重大なる變遷に遭遇した。我々の母親、妻子、  
 夫達は敵軍の家臣と敗走を喫つた。

農民達の権利と自由は皆剥奪された。總動員は手工業者をして敗走せしめた。労働人民の最期の争  
 ても嘆ひ死すべし。ヒットラーは人民の願を無視し、多量の軍隊を率ゐり、敵軍は独國を  
 して政治的孤立に陥れた。敵は責任を負わず金を世界の三大強國に仰つて援助し、敵軍をしてマシス主義  
 に対する強しむる意欲なき事柄に因縁させてしまつた。

敵軍は歐洲をして敗走人民の敵に裏切らしめ、我國人民をして汚し殺しめた。今日のドイツはを挙げ  
 たるの深仇と新恨を圍繞せしめてゐる。此は敵の負ふべきものである。我國の敵をすらしむヒットラーの様に我  
 らはドイツ人をして斯る深仇を蒙る者と抱擁に突き落したことをなすべし。

事實は更に動かすべくもなきに達した。我々は既に敗北はなし。大ていよくもない抵抗と困苦の状況  
 は我國の戦争をまだ若干延ばすであらう。然し繼續して度外しては進むべきのやい戦争であり、それこ  
 そ敵軍の攻進を速し進めざることを意味する。然し決してドイツは敵に降伏することはないのぞい。

我々の祖國が將來滅ぶるか滅ばないか、之が當面でも問題なのだ。

我々は獨逸人民が快順に勃然として人の去ふことを願ひ、自身を毀滅する事としてその身に到達せしめられ、  
 我々は獨逸人民の力量を白日と我々に敵つて海軍海軍するのやい戦争を遂行して、又自身の罪愆をり更に  
 深めることであらう。その時ヒットラーは又ヒットラー、獨逸國の軍隊の力量は被縛されるのである。

のみならばこれこそ我々の國家の生存の途末であり、而して又我々の祖國が分崩離析することこそ意味する  
 その時我々は進歩するべき何人もなく、唯我々自身を進歩するだけである。

是れ獨逸人民が勇義を披ひ、天下の時行動に成つて、我々の國の人民大らんとする勳業を証明し、尤もなる  
 決心を以つてドイツをヒットラーの獨裁を解散することこそ証明す。

法蘭西人は目下和平を希ふべし、且つ平和を渴望してゐる。

大英人としてヒットラーは厭つて平和を協定としてゐるものではない、爾し又電報として既に然つて被刺を進行

しようとするものはない。大英は我々人民の最も忠實なる同盟者、英政府は英政府を成立

するものである。英は新政府がその心算にて人民の代議士を遣はるるも、その結果、且つ新政府が

つゞきの始めて平和を希望するものである。

此の政府は必ず強大な力であり、且つ要求を権利を達行し、大英の公敵、ヒットラー、

保護者としての手先と力をして、人を害し導きしめ、新軍として恐怖を創り、貧民を捕縛し、

更に大英政府を置き威威ある態度を以て、昇上する。世界に於てドイツを大敵とするのみ、

然し此の種の政府は獨逸のみならず、隣国の人民を併呑せしめ、遂に大英を以て敵とする。それ

には戦中某国の政府と等し、ねばならぬ。それは戦中某国が聯合してヒットラーを滅ぼすものである。

軍隊の中を國家と人民とに對し、忠實なる努力は此の方面にあつても決定的勝利を有するものである。

此の種の政府は直ぐ軍事行動を停止し、東軍と帝國の邊境に引渡し、講和を願ひ、一切の兵隊と大

英、諸列島の放棄を要し、斯くして平和を達成し、平等なるドイツを恢復し、各人民族人民中に平等を

恢復する。

唯此の政府大英が、法蘭西人の自由として自らの意思から要求するもの、これを以て、永年なる情愛中にし、彼を以

て撤去するの態度を以て、國家糾合問題を解決としめることのみである。

我々の目標は自由ドイツである。

此の要求してゐるものは、英政府の民主國であり、協定の制度の取捨を決定する要素は天運長からい。此の民主制

度は英法諸國の態度を以て、自由人民の權利、若しは歐洲の平和を對する未來の如何なる新政策の一

切の全國を標準文化とするものである。凡そ人民と權利と協定の制度の要求、これを我々國民として奮起を感服し、そのヒ



我々の下史は戦々々々僕火なる様貌を興へてゐる。 一五三〇年前独軍が故郷としての集賢をロシアの

國を及ぶの天時、 最も慶幸なきドイツ人— フンスタイン、 アーランド、 クロウゼツェイツ、 イーリ

の他の人々は、 口をアザリ、 國賊に何つて— 独國統治者— 又を逆にし、 右独逸人民の良心

に訴へ、 彼等を知りて解散戦争をしたのである。

我々は彼等も善きなり…… 我々一切の力量を以て、 必要時、 我々の命を貢獻し我々の人民を

解散の爲に受死し、 ヒットラーの権威を回復するの爲

…… イツの爲の願許は我々を爲す、 汝等も必要をなす、 我々我々の身を爲す、 我々の命を

將以て、 汝等も必要をなす、 我々我々の命を爲す、 我々の命を

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

我々は我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、 我々の命を爲す、

領導者 柏林作家

フエーゲル、 ストラー、 アルト、 以下代表三十九の者

自由ドイツ民族奉負會

我々と祖国万々

我々と平和を爭取せよ

德國人民解放万々

自由と独立のドイツ万々





て是等の文化政策を以て指導せられたるが如き、故に當時には大学は單なる「象牙の塔」ではなく、  
 民衆に依つて其指導を施したる事の嚴重しを了。此の様に燃熱せんとした日本の進歩的文化政策の嚴重は  
 應に其資本主義階級の方に依つて知識階級の最も弱點とせらるる小ケル的階級が示した。階級的分別を以て其  
 れて其が「大へ」として大学の自由と擁護の陣線は切斷され、度大なる事々フアツシムスの教育下に維持するに  
 至る。

## 二、殊頭を以てた大学の自由

大正末期より昭和初期の初期、續いて一九二八年前後より今次戦争に至る間、文部省級の大学への教育政策が露骨に  
 干渉して文化政策を工作して漸進的に漸進されて来た。最も著しい例は東京大学の河上肇博士の攻撃  
 に就いて昭和五年四月一日より六日に亘つて文部省の手に依つて行はれた河上肇先生追悼會を通じて是法「活  
 躍」を以ての教育は自由と進歩的であるべきである。田中清玄、前田玄洋、佐野常雄、長瀬喜伴、山田盛太郎、法政博士  
 本郷の在外関係、中野重光等が被弾され、半して半の前後「事」の關係として大森義太郎、佐々木  
 幸徳等一連の攻撃の最中、大森の攻撃の關係も被弾され、多数の進歩的博士は是等なる大学の自由文化サ  
 クルを攻撃せしめられた。東京の文部省、文部省は非常な危機に陥つた。續いて一九二八より尙大に於ける日  
 本對等の泰斗小倉、大塚の両教授の追放、又東京に於ける尾川幸康助教授の「別流」承継の攻撃、同  
 教授の追放、此の處に東京大学専科全教授団結しての「別流」承継の攻撃、同教授の追放、同  
 當局への抗争の爲めに全日本大学自由連盟の組織、又しても是の組織に於ける、時の文部大臣橋本一郎  
 の解散命令と多数博士の攻撃、次は東京大学専科に於て進歩的博士は「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」  
 スト大森義太郎博士の「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」  
 續いて「進歩的」の攻撃、是等博士の「天皇親裁」に對する政府の断圧と同教授の追放、尚引き續い  
 て最近の東京大学専科の「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」  
 の抗争事件は對しては政府の断圧、是の爲に河上肇博士の「進歩的」を以て「進歩的」を以て「進歩的」



その中心を以て、財政上の最高機関大内府の教授が又しても、  
進歩主義者と云ふ以外は何の特色もなき自然法と商法の權威田中耕太郎博士は日本体育界の功勞者であり前  
任京都府長本松藤太郎博士(通稱オレナヤン)國語學の宮澤禮教、憲法の櫻井春一郎、經濟史の土屋嘉徳の諸  
教授は断崖の才が下り、其のほは投獄され、或は強制的に中等學校に退き去る。又は進歩を以てするに  
つた。進歩は単に主要な事件だけを論議したに過ぎない。全國大學、專門學校、高等學校に於ける善良に  
して真面目な學生の大體的進歩は行進を今次太平洋戦争開始以前何人の進歩もなく行はれてゐる。  
そして今日の大學はどうかであらうか。又進歩はどうかであらうか。多くの情懷ある種者は學者の去つた後  
に残つたものは?

### 三、大東亞共榮圈株式會社、社員養成所たる大學

此の會社は、社長は東條、支店は軍部、財閥と稱すべきを。一例を挙げれば東大の法、經の兩學部に残つ  
た教授と進歩した教授は學生から何の信用もない。フアツシヨ經濟學者の昔の上杉謙吉博士の天皇主權説のお  
こはれをいよいよある國法學者ばかりだ。例へば美濃進博士といつた九龍を其の如く憲法學説を講ずるに  
おつて講堂より退き大講堂は向つて椅子を打つて拜禮したり、又天內赤博士に代つて拓大より来た教授  
某邦の如く、經濟政策の學說史上より見たる植民政策を講ずるのに日本帝國主義の代表會社たる滿鐵の事  
業辯論を以てしたり(彼は前日滿鐵職員をつたから進歩はなほ其の他臨風明男のナチス貨幣論の文責り、  
進歩は全く大學を信用の附し他も又は商業上の空付信用の如く其心算へてある反動主義者連である。他の  
いづれの學校に於ても皆同じである。よして政府の學教の主要なる一知識偏重主義の廃止への如きは  
學生と進歩と化さんとす。進歩は目的政策である。そして其の軍部專制政府を覆美する反動教授の講義を  
てゐる學生はどうかであらう。頭の悪い者如くにして三井、三菱、住友、大倉、大倉、安田、大朝、大倉、若林、  
重洋の大會社に優先的に條件よく入社すまかて頭が一杯である。頭の悪い者は單事教練に精出して、配属  
された兵隊に入り、幹部候補生になつて將校となり、そのまゝ現役志願で大陸に残り、どこかの戦場を捜す位  
が願ひである。況んや最近大學専門學校修業年限の短縮と徴兵志願制度の定上は益々大學卒業の要と

矢つてしまつた。其は大學は革命事業と専ら大会社への就職紹介と化し。大學本末の使命と異議を異にし、  
 業にんたくも見られず、自然科學者はその本末の人類の任務を定めて、人類進歩の導きと、  
 マ人類的社会を國家、民族の争はず念頭にはない。自然科學者としての學問に任ずる一巻の傳記、  
 しと現在日本自然科學者は増え、その思想も、改革の巨匠の記述にせんで頭の麻痺した改革は改良に  
 舌も感じないであらう。人類の存は最高なる価値であるべき文化、そして、  
 や完全に大學の改革を消した。その結果は、  
 て早く小資本利のして高級社員たんと熱中してある。その結果は、  
 改革は自ら知識人と称し、上流階級と自認してゐる。それは昔の學問の余く、  
 けは、  
 彼は、

四 良心的學後の義務の路は？

日本革命の革命勢力は、  
 大學もやはり、  
 自己が革命的な努力でない、  
 先覺者として、

先覺者として、  
 大學の自由と、  
 校の進歩、  
 級は、  
 として、  
 として、



戦争の犠牲者の...

# 在華の日本同胞へ！

澤村 幸雄

戦争の犠牲とふつた中国に在る日本の同胞、兵士諸君、中日戦争は七年目を経ちんとしてゐる。

実に長い戦争だ。その間に戦争は太平洋戦争（大東亜戦争）へと拡大し、この戦争の真ん中に祖国の同胞は立つてゐる。日本ばかりでない、全世界は今戦争

の中に在るのだ。この世界的大戦の犠牲者として僕等は死つぬ限りは挙げられぬその一環だ。しかし幸ひ僕等は犠牲とあつたもの、死から免れた。そして

戦争のつらさに立つて、此の中国の地に在り、戦争の將來、我々の將來、戦争は何時終るだらう、

如何したら戦争は終るだらう。戦争の困難の解決に毎日焦燥の氣持で悩んで来た。

日本に居た時の戦争に対する見解と今「局外」の境遊に在つて、戦争を再び見直した時の相違、日本で闘つた経て来たこと、華東との環境の違ひ、そして

又彼國で見直した戦勝日軍のニューズと戦地で現実に見えた戦争の真相を述べた情形、今までこんな

不幸が眼の中で現れ傷つた慰霊を悩まして来た。然しこの我々の煩悶をよせに「史は一舟の休むも

なく前進を續けてゐる。全世界の風潮は、今世紀の大展旗期に當面し、全人類は不たりとも傍観し

持たぬべき状況に在る。では我々の局外にある者は此の期に何を果すべき任務はふのか、我々は已に果すべき事は終つたのか、社会に對する義務はふのか

責任は、任務は、何をも果してゐない。是すべきことは山嶽死をされて居り、正にこれからだ。

それは何かが、祖国は今危念の存亡にある、同胞は此の境に立つてゐる、我々は此の危急から同胞を救ふ義務がある。そして時不同胞を再び我々の様子を境遊に隔らせぬ様にその根本因素を消滅する義務がある。一億の同胞を、祖国を危機に隔れた責任者をたゞし、その責任を逃れずる義務がある。日本を救ふのは日本人だ。

かゝる在華同胞から出現して、では現在何をなすべき

如何に、東洋大時期に開かう始むべきか、如何に  
したるに任ずべきか、義務を果し得る事が出来るか  
如何に如何にたるこの「局外」の我々が日本人として  
これに責任を全うする事が出来るだろうか。

二、此らの諸問題について私は確信を持って解答  
が出来ぬと思ふ。以下次に、その具体的解答を諸  
君の前に論及すべく、此の一文を述べるものである。  
一、現在の国際形勢と世界の動向。

日本の盟友の一たる伊太利が投降した。この事はあ  
きらかに、独伊の極密同盟が非常に危殆に  
傾してあることを暴露した。僕らはかつて独伊の系  
固が、新らしきもの、勃興として歐洲の覇権者と  
なることを信じてゐた。しかし右の事實は僕ら

の予想を完全に覆した。そしてイタリーの降伏が  
又ドイツが既に前赴の一歩手前まで進んでおること  
までも認識し得た。亦ながら、運命を共にすべく、約  
束ししをきかぬから、その盟友イタリーが降伏するのを  
見殺しにする程ドイツも余力があつてゐるこ

とを意味してゐるから。その余力がたかくなく、こは  
かりか、今やドイツは強力なる蘇聯の打撃を受け  
進部、敗退の続行の有様だ。かつての意軍は、今  
では内戦的敗退のりだ。十月十二日のニュースは已に

蘇聯軍がキエフを占領した。白軍は已に退入

したことを報じてある。世界の著名軍事家  
は口を揃えて、ドイツの前途は已に頹々とあつた。  
ヒットラー軍隊は再起の力は全然無くなつたとあつて  
ゐる。私わ本年の末には、ドイツの前途の期日まで  
も予想されり程はつきりすると思ふ。

ではドイツが降伏すれば、歐洲には放棄しとある  
た。敗れたのは遠東に於ける日本であつた。以後日  
本は吾等を相手として戦はねばならぬ。歐洲  
に在つた蘇聯を主とする同盟國陣営の全力量は  
日本に集中せしめらるゝことは、たゞかまひもないことだ。

最近、蘇聯の各府領は皆一様に日本への能攻不能  
迫らせられた。とあつてある。

二、ドイツが過去を過去日本の軍部が侵略し  
てゐた、東亞の盟主日本である。大東亞政  
勝利は進んで、ある。吾、その意義を否定せざ  
るを得ないのである。

一、では日本は果して勝利を逃すまいか、あるか、我々は  
これを中國戦場に於いて見ることに出来ると思ふ。  
最近日本軍はかつての攻勢を放棄し、各戦線と  
も守勢を練りつゝある。これは最近前線から来

た同胞から聞かせる一番はつきりする。僕らも最近、  
全華方面の第三師團、在州方面からの独混カ  
と、蘇聯や、西方面の、中十師團、華北の戦況

少し、ミニ半永久の陣地を構築。全く軍事  
形を備えてある。この軍によるものは本  
軍の動行は露に列の。又、露軍が動じり、かつては  
露軍にまで登陸せんとしてゐた。形勢の現状では  
却つて、ソロモン島の戦況が、ついつと取りつげ、  
昨今のニクソビツで日、日軍日エオマニア雷区一帯一  
をも放棄せしめたと伝へられてゐる。又、太平洋に  
於いてもさうだ。アリネンヤン群島の最西端のア  
イツ島さへ、米軍に奪回され、今、島列島の米空  
軍に爆撃されてゐる様だ。

かゝる状況に日本があるとき、政府は同盟軍  
は、イナツリを突破し、頻死の状態であるがイツ  
を一挙に叩き伏せて、英米主軍は遠東にその  
鋒先を向けんとしてゐる。この戦況は、遠東に  
来て、中国大軍と合流し、総攻勢をとる。そのこ  
とは自明のことだ。日本はこれを認めず、押しと  
る。今は最後の一戦を準備に同陣線、二種の者  
を（召集してゐる有様だ）せめて國民には「戦  
敗は七割」であると言出し、最低限度の生活費  
料までも確保し、来るべき「異度」に備へてゐ  
る。これが、同胞の生活状態は「いんく」悲  
しくなりつつある。戦況状態を呈して、ある。

(二) 諸君と異なる見解の見解。

七年前、夏自長、敵の戦況中、その前半期に  
経にふつた者と、後半期に敗北をみた者との同  
じ、それは一世紀の歴史の程、日本に對する見解の  
相違を生じさせた。最近の日本は、露軍に如くだ。  
この現状を鑑み、諸君は、容易に想像す  
つが、新しい果てた日本である。信じないと思  
つても、新しい者から想像される事実は否定  
することは出来ない。思ふと思はふことに拘らず  
現実はさうなのである。初めは戦争進行上、  
然るに、現況でも、それは暫時的なもので、否定  
して来たが、現実の日本は、この前記の想像（  
事象）は、吹き飛ばされて、戦況に於ける進歩と  
、自殺兵士の捕虜、國內に於ける工場、ストライ  
キ、農民暴動等の全國的普遍化状態にお  
け、生々しい惨劇日本を現出せしめてゐる。  
政府はこれを「ゆがしき問題」であると、その割  
圧に引起らなうしてゐるが、人民にとつても、亦、  
はさし、問題である。かつては戦争進行上の政  
策だと云ふ政府の言葉を信じ、我慢をして来た  
が、事ここに至つても、尚「百年戦争」だと云つて  
、國民を戦争に持ち出さうとしてゐる政府に對

争に... 今や我々の全同胞は此の死を認めざるを得ない。今や我々の全同胞は此の死を認めざるを得ない。今や我々の全同胞は此の死を認めざるを得ない。

救ひ出すには... 中国に居る我々の故郷の「局外者」は如何にあすべきかを考へざるを得ない。この重大なる問題日、我が和平村に居る同胞の間に、切実なる問題として燃え上つてゐる。どうして諸君！ 重慶に居る同胞諸君！ 西安に居る同胞諸君！ 北（延安）の方面に居る同志諸君！ 其の他戦争中各战区に居られる同胞兄弟諸君！ 局外者の中で我々諸君の同胞を取扱つて居られるかや。僕らは此の肉題について是非諸君と共に考へなければなりません。

(三) 覚醒同胞の動き。  
僕らはかつて重慶と桂林に於いて、同胞の一部を以つて、左華日本人民反戦革命同盟會を結成し、左の綱領の下に実践行動を続け来て、  
左華日本人民反戦革命同盟會綱領  
一 中華民族の自衛解放の戦線と協力、日本帝國主義とその大陸に於ける一切の代理人撲滅。  
二 植民地民族を戦争の奴隷より救出、人民の意志に基き、我々日本の連敗！

東洋の確立！  
(四) 帝國主義は我々の支那、其の平和を脅かすも我々の人民的諸勢力と協同、人類の不幸地獄。  
かゝして僕らは同胞に對し、今次戦争の真相を話し、同時に我々人民の死敵たる日本帝國主義と戦争を續けて来た。此の行動は僕らのみでは無い。延安に於ける同胞も、山西に於ける同胞も、又は西安に於ける大同學園も、これらは総て僕らと同じ意志に基き、戦争を繼續してゐることを疑は無い。この出現こそ我々の真心と、誠意と、不測の努力によつて、遂に我々中國の同情と、協力援助を獲得したことに在る。僕らは今和平村の同胞に對して、戦争の真相、日本人民としての任務、を話しその覚醒と協力を努力してゐる。今僕らの責任として話し来たことを現実の近界形勢と兼て日本の事実が證明して呉れた。当然僕らの周囲には多くの調査が結果した。そして、僕らの力量はかつての裏面目的が士によつて、教條化されつゝある。僕らは毎日戦争の解決に於いて、日本の将来に於ける当面の僕らの任務について、研究、討論をやつて居る。この動きは和平村の村長、その他中國管理人の理解ある協力援助を得て、充分なる工作が実行されてゐる。



では、海外にある我々日本人はどうかだ、  
これについて我々の同胞が言った、  
「我々が我々もものか、  
こゝで百や二百の日本人が纏りて  
我々も日本にじんふ動果があるものだ」と、  
この  
やうな誤つた見解に陥るものも無理もないことだ。

我々日本人は過去に於いて、  
長い間絶対權利の下に  
自由も何もなく鉄鎖に縛られ通して来て、  
我々  
「我々も何か何をもたつても所詮は方のふいこした  
方の中は、  
えおものだと云ふ觀念を起してつけられ  
て来たがうだ、  
この奴隷根性が今でも残しては  
せてありのた、

こゝで僕らは、  
一度日本の發展歴史を見直さ  
なければならぬ、  
かつて三國干渉はよつてぐ  
のをも我々のつた日本が、  
度々の間に今日の如き  
世界の所懸、  
保たるまでには至らぬ、  
我々方はどこに  
あつたか、  
我々の身は人民大衆にあつたのだ、  
こゝ  
の人民の血の争奪による、  
我々の血の争奪による、  
決して明治天皇が英明であつたからでは無い、  
今日  
日本の強盛であるのも、  
決して我々に此ふさつ万  
が一系の大業を成し遂げたからであらう、  
我々の血の争奪による、  
決して明治天皇が英明であつたからでは無い、  
今日  
日本の強盛であるのも、  
決して我々に此ふさつ万  
が一系の大業を成し遂げたからであらう、

我々日本人は、  
その力を傾きかけた、  
我々の血の争奪による、  
決して明治天皇が英明であつたからでは無い、  
今日  
日本の強盛であるのも、  
決して我々に此ふさつ万  
が一系の大業を成し遂げたからであらう、

我々の血の争奪による、  
決して明治天皇が英明であつたからでは無い、  
今日  
日本の強盛であるのも、  
決して我々に此ふさつ万  
が一系の大業を成し遂げたからであらう、

我々の血の争奪による、  
決して明治天皇が英明であつたからでは無い、  
今日  
日本の強盛であるのも、  
決して我々に此ふさつ万  
が一系の大業を成し遂げたからであらう、

我々の血の争奪による、  
決して明治天皇が英明であつたからでは無い、  
今日  
日本の強盛であるのも、  
決して我々に此ふさつ万  
が一系の大業を成し遂げたからであらう、



國家の對下立つことの出来た「海外者」だ。僕らは  
 國内に二本を研究、討論しそれを実行し得る環境に  
 ある。前敵の政友に、国内の兄弟に、いへども思ひ  
 事を止るゝことの出来ぬ。これは、それ以上、無敵、

されば環境に在るの心、こんな環境に在る心、  
 出来ぬ。いへども觀念してゐる者や、随分者の處、  
 を大さく誤りだ。僕らは即日行動が開始出来る。  
 先づ牙連ぶ講の同胞に戦争の真相や、越中軍隊を  
 擁護の心大さく普及がある。目前の急務とて、後、

りの團結力によつて同胞を連帯せしめ、敵國  
 を破るべき行動を促すことだ。さうして僕らは  
 友邦中國の同胞や、日本の獨逸主義者の正見に戦争  
 を促す。ある英法露韓、台湾、南方の諸民族と協

同、提携の友誼を堅くすることだ。これに敵を僕ら  
 の行動は一つの重大なる意義を有することだ。  
 我々の行動は中國の花鼓と一線である。  
 僕らの當面の任務は日本の政府打倒である。こ

とは已に指摘した。中國も亦侵暴日本軍艦を以つ  
 てある。中國はこの侵暴者を懲罰せんとしてあるの  
 だ。攻意自衛は同じだ。故に中國の抗戦と僕らは  
 一線とすつて連帯する。この抗戦も、かつて敵の  
 指導者處地同志は、日本人と中國抗戦は一線であ

る。……これこそ我々の革命日本人及改革者  
 國心が過去より今の大戦工作に於て日本共至同  
 胞に傳へて来た主要な任務である。そしてこれ  
 こそ中國抗戦の陣列中に我々の同盟が成立し得た

基本の條件が何れを示すものである。決して在  
 華日本人の革命の、革命も意義から中國を援  
 助してゐるものではなく、夫に中華民族の抗戦に抗  
 して日本人とは一線だからである。しかも又、  
 理論によつてこそ、日本國內に於ける人民革命運

動の今日の行動と、我々の革命日本人の行動とは  
 完全に一致配合してゐるのである。……又、日  
 本帝國主義の侵暴は中國の民族解放戦と日本

人民革命との有利な協同團結の機を造り出した  
 ……遼東全民族の連帯的鬥争の題目を、日本  
 人民革命に課された中心任務にあかすやれば、  
 ……更に僕らが中國抗戦と協同することだ

我々が中國で厄介にあつてゐるからと古少、いは  
 ば、我々の一線一飯の意義のためのものである。こ  
 の行動こそ、我々の立場から当然の義務すべき  
 最良の鬥争手段であり、我々海外日本人に課せら  
 れた光榮ある歴史的使命である。我々の不斷の努  
 力と誠意は既に中國のみならず、我々の國運の

同様に支那を倒す起すにはあかぬ。我々の行動は、天候無洋流の中で重要なる役割を果すてあらう。

### （六）若干の結論

以上述べたことで、僕の当面為すことは述べた通りだ。最後に僕らはこのことをばつきりさせておきたい。

我々が日本の戦争政府を打倒することは、日本を倒すことではない。往々にして、我が知事村に於いても、親愛なる同胞の愛國者が曲違つる見解を抱いてゐた。「日本人が日本を倒す」のでなく、「日本人が日本の南のまき教者」戦争によつて一億の同胞を空想苦のどん底に陥れ、何百万と古く兄弟の血を流させ、秘蔵を隠すこととしてゐる大資本家、その走狗たる軍毒——を潰滅することだ。

我々の政治目標をしっかりと把握せよ。この戦争で日本は勝つては我々の大敵は根絶しなくなる。戦争に敗ければ植民地とありあふむであらう。日本人は勝利を以て取つては祖国と人民は救はれるのだ。

ロシアを見よ！ 第一次世界大戦中に自国の戦争政府を倒し、人民の意志による政府を造り、わがやと我の甲で早稲穂和をなし、これによつてロシアの人民は度々戦争から逃れることが出来た。

どうでも構はない。ロシアは倒して七〇年たった。植民地は手に入らなかつた。星の旗は五十年たつてきて世界の二年間に倒すまで築き上げた。そして今日強大なるナチズムを他国に潰してゐるではないか。

我々はかつてのロシアの一九一七年より更に良い條件に處つてゐる。

この任務遂行のためには我々が日本全同盟は、國結を強化する必要が、好機は時に到来して、ある。我々の敵は同盟國の勝利と共に約束つけられ、この人類の平和と幸福のための光輝ある状況に押し、光榮ある任務を果さねばならぬ。もうして必要あるは状況のために死なう。これこそ人類史上の光榮たる、名譽の戦死である。

### 往々に同胞！

我々の前途は希望に充ち勝利の中に輝いてゐる。

期待せよ。躍起の杖！

## 日本国民に告ぐ

告 こそぞ、日本民主革命の力量だ！

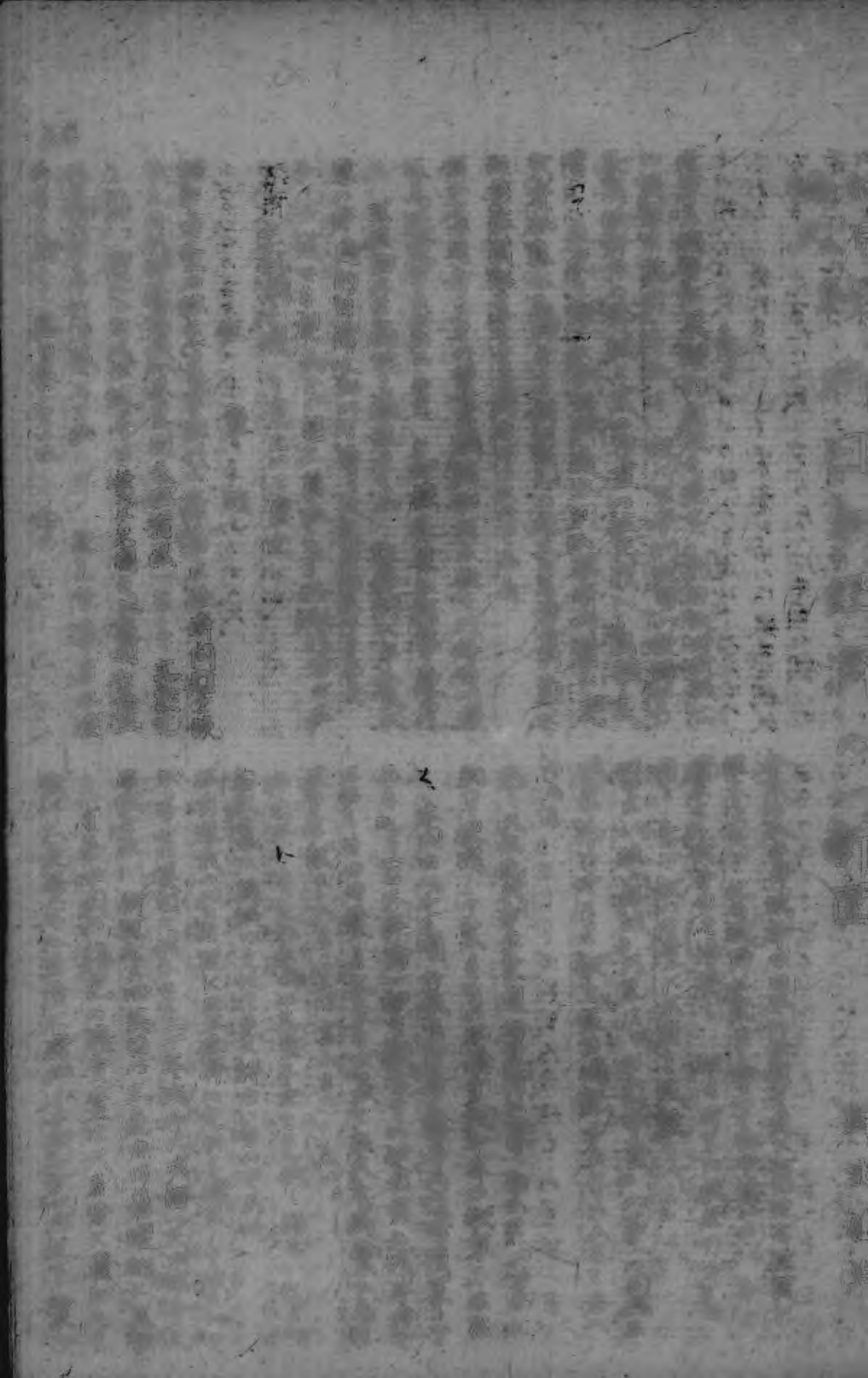
三國會議の三日外、全歐がオーストリアから起つてゐる。三國會議の意思は、プロシヤのアシアのアマリアを併呑するに在り、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。オーストリアは、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。オーストリアは、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。

今次全歐の事象は、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。オーストリアは、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。オーストリアは、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。

今次全歐の事象は、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。

對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。オーストリアは、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。オーストリアは、オーストリアの利益を損ない、オーストリアに對する最後の変更の案として、オーストリアを併呑するに對する案とした。





のつたのであらせし(武造)

以前が暗転してゆく程に日本はチカソンのみの前を  
踏んでゐる。事業或事は目前の戦争に傾つてその勝  
敗が決定するものを見る。将は親政階に於ける戦争  
は、その国の富と国力とを全失するものがあるから大。

日本は目前の戦争に於て香港、新加坡、ジャバ、ス  
マタラ、ボルネオ、フィリピン等々の占領した。か  
然し果して支那の占領を保持し得る力量があるか、  
純粋に、否とも否とも得ない。何んぞ先此は既に  
上述の如く、人力の不足、及び各種軍需品供給の  
輸送困難は、之等占領の無條件放棄を、最後の大  
減かの河川を運ば外はない。

日本は戦前に於て有る(軍事準備)各種軍需品の主要  
物資は英、米に依存して居り、且て中国戦中の軍需品に  
應じてゐるに過ぎない。即ち、戦後が終戦、銅、鋼、鋳  
造、マンガン、アルミニウム、セシウム、ニッケル、石油、棉花  
等、銅、鐵、皮革、麻、糸、熱風産物、肥料等々の物資は  
その殆んどは英、米、南洋の輸入を以てゐるもの  
である。特に日本にして軍需品ものは鉄、鋼、銅、鋳  
造、皮革、麻、糸、熱風産物、肥料等々の物資は  
その殆んどは英、米、南洋の輸入を以てゐるもの  
である。特に日本にして軍需品ものは鉄、鋼、銅、鋳  
造、皮革、麻、糸、熱風産物、肥料等々の物資は

その殆んどは英、米、南洋の輸入を以てゐるもの  
である。特に日本にして軍需品ものは鉄、鋼、銅、鋳  
造、皮革、麻、糸、熱風産物、肥料等々の物資は  
その殆んどは英、米、南洋の輸入を以てゐるもの  
である。特に日本にして軍需品ものは鉄、鋼、銅、鋳  
造、皮革、麻、糸、熱風産物、肥料等々の物資は

をなす事は出来なない。

曾て前金創院係談話本は此の行詰つた日本経済を、工  
民精神動員を以て確保し得るも考へ、即ち曰く、戦力  
の根柢は人知れに在り、又、地理動員も思召を  
創造する、我々は団体観念貫徹の志、毅然として  
生産の増強に献身し、なすればならぬ。と更に板は  
狂気の如く叫ぶ。勝つて人の魂も日本人の魂も、こ  
(朝日新聞) 盡し、例へば、餘金の占領、國民精  
神の動員を以て各種生産部門に集中せしめ、及ばぬ  
よ、その根本をある資源の欠乏は一切の生産を不可能  
ならしめてゐる。亦例へば生産資源が充分供給さ  
れば、たとへば人力不足を、更に強つて生産も運搬も物  
は、労働者を以て必然的に激激とし、軍需品の要求  
する何程の條件をも充たすことは出来なない。

是れ、餘金の占領、國民精神の動員を以て各種生産部門  
に集中せしめ、及ばぬよ、その根本をある資源の欠乏  
は一切の生産を不可能ならしめてゐる。亦例へば生産  
資源が充分供給されれば、たとへば人力不足を、更に  
強つて生産も運搬も物は、労働者を以て必然的に激  
激とし、軍需品の要求する何程の條件をも充たすこと  
は出来なない。

更に強つて生産も運搬も物は、労働者を以て必然的に  
激激とし、軍需品の要求する何程の條件をも充たす  
ことは出来なない。更に強つて生産も運搬も物は、  
労働者を以て必然的に激激とし、軍需品の要求する  
何程の條件をも充たすことは出来なない。

更に強つて生産も運搬も物は、労働者を以て必然的に  
激激とし、軍需品の要求する何程の條件をも充たす  
ことは出来なない。更に強つて生産も運搬も物は、  
労働者を以て必然的に激激とし、軍需品の要求する  
何程の條件をも充たすことは出来なない。

以上... 国民の... 責任を... 負ふべき... である。

て到底解決は不可能であり結局外米に依存す

る外はない。然し外米に依存するには輸送困難

は当然、皇民族の生産及び流通機構は全に自給に

して徴集も不容易を伴ふ。若干補助は必要とし

のは自給に於ける威力、競争力の低下に逼

るべく、支那の殆んどは現地部隊の食糧の生産

に使用してゐるのである。

斯かる現状から考へざるも如何に日本の政府経済界

はいつてゐるや現はれり。既に上述の如く支那の影

響に依つて一般人民大衆に及ぼすものは文字通り既

感て富に絶えざる凄状を形成せしめてゐる。

再び日本は皇国の生存に存亡の境に在りしと稱し

太平洋上に於て激戦すべき準備を為してゐる。これ

戦いに従事せしむるに在り。

而して支那機械は生産の如く直接戦争に關係し

ない中心商業は否か否かとなく皇軍産業及び

大企業部門も各機関の改良を以て支那の

機械工業も各機関の改良を以て支那の

す。この助資金に就いては未だ決定的な数

字を見てゐないが現存を以て決定したものゝ

は、大抵自給と富を巨額に費してゐる。

但し此の助資金は軍事準備費中に算入せ

ずして、軍事外回率契約を強めてゐる。

即ち機械設備の一切を徴集して是を以て増徴

を許さなからざる。恐るべきは該会社

の解釋を許し、各局は各局然、会計清算を行な

はなけい、此は各局、各課、各課の積立も返却しなけ

予に入らざる。右表上では予金としてあるが事実

上は忠根保公債(或者に替つたもの)の如く使用するこ  
とが不都合いものである。而してこのや企業整理の  
如何なる部門を致し如何なる部門を破産するか  
問題をあか。たゞその概略を述べ置かぬと  
いふ。鋼鉄業は今後、日本鋼鉄、日本鋼管及  
軍部所管の各工廠等々、場のみ其の他は全部破  
産する。

四石炭 石炭業は三井三菱、住友、貝島、明治等の  
大倉はつたを存置し、肥後、策豊、若城の三山に  
集中し其の他は全部破産を停止せしめ一切の設備  
を放棄する。

三非鉄金属 鉄山、基本的な鉄山は富田、中野、新  
田、保無と集中し其の他は小鉄山は皆設備を放棄  
し他に使用せしめる。

四紡織業 紡織百万錠機、机三方台以上の大倉は八  
ヶを致し尚この大倉は其の機械の百分の三十を  
存置するのみを後は全部放棄し廃鉄として破  
産する。

五人造木工業 従来のヤシの人工場中、五工場を  
残し尚此の工場は各々自分の四十の機械を残す  
の他は其の他は全部放棄して破産する。

この中概して大倉の工場を破産し其の他は全  
部破産する。

四製糖業 若干の工場を残し其の大部分は  
破産(台湾)は皆予金で買ひ取りし製造に改造  
する。

ハ製糖業、現存工場数は不明だがおそくその数は  
方に達するであろう。破産し又も有事の人工場の分を  
残し其の他は全部破産する。

九セメントは軍事工業の部門に入らざるが、大倉  
社、東洋セメントを致し後は全部破産する。尚、現存する  
ものは特殊な製造に整理する。即ち軍中にたゞ  
も高岸院を建設して軍事の上段を築く(備)を  
り、製糖、製紙は殆んど五工場程度の数に  
縮小する。五工場中五工場を残すのみを後部軍需工場に  
改める。

以上は即ち、企圖書整理の影響を受ける(一部分の取  
手である。斯くして平和産業構内は全部破産する  
莫大なる男工連は通常軍需工場の機械に放棄して行  
つたのだ。斯かる莫大なる如何に現存工場は経済的  
な底底に喘ぎつつあるかの明白である。而して軍需  
工場軍需には更に機械が放棄し使ひ棄して僅かの現金を  
残すのみ、最後の負債を減らしてしまふ。



# 新舊村民問答

北上 敬夫

或る日、舊村の庭の一隅に流石の秋の小春日和あり、  
うつくしく、とて、花に光浴してゐる朝子の菊の花  
のせげに、殊にうぶな口誂の艶態に、ぼつちり  
目を凝らした。聞くとも、共に聞かしてゐる秋の顔も、  
知らず／＼の内に緊張して来るのだ。それは餘りに  
も我々の生活の中へ、重畳不明瞭であつたのだ。次  
に、そのものはその古参の村民を回顧し、来たばかり  
の新村民、早業の真剣を問答である。

新村民、早業「新しう改作所に来たばかりぢやありませんか  
も別な事、お聞きなすげ。……」 新村民「是れは何か  
希望でもあつて、そんな毎日に明朗に元氣よく  
生活してゐるから、お聞きなすげ。」

旧村民、昔田「エッ何ですか？ 希望の、希望が  
あるかつて、ではあなた此の生活に希望はな  
いとおつじやありませんか？」

早業「未だ来たばかりで、お聞きなすげ。……」  
私「あなたは何の激しい、激しい、激しい、激しい、  
て、意識を明らさず、お聞きなすげ。……」

新村民「……」 早業「……」 新村民「……」  
早業「……」 新村民「……」 早業「……」  
新村民「……」 早業「……」 新村民「……」

新村民「……」 早業「……」 新村民「……」  
早業「……」 新村民「……」 早業「……」  
新村民「……」 早業「……」 新村民「……」

新村民「……」 早業「……」 新村民「……」  
早業「……」 新村民「……」 早業「……」  
新村民「……」 早業「……」 新村民「……」

新村民「……」 早業「……」 新村民「……」  
早業「……」 新村民「……」 早業「……」  
新村民「……」 早業「……」 新村民「……」

新村民「……」 早業「……」 新村民「……」  
早業「……」 新村民「……」 早業「……」  
新村民「……」 早業「……」 新村民「……」



資料「誰か手に入らぬ一紙をんです」

吾輩「口は悪くはなれど今迄信じて切つたものな日本軍閥  
軍隊に頼りて配られた一紙をこも人々の敵ふんで

有り、故に日本人民と儲けても其の理成なくと

出つて他國に強盜的侵略をなすもの以上の事、

現況でもおのれ達が奴らの命命のまゝに血を流し

言ひまゝにして申す事と成つて日事時、奴らはあ

う、其の運が血を流す事うはと誰か正々女を殺し

死する事、其の天不二重を思ひ一歩を控つて

このまゝ金儲けに専ら、其の事、其の事、其の事

の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

人の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

吾輩「あゝ、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

と強盗的に信じてゐる國民と補助する、彼等

に成つて政教を握らうとする輩の上層階級と

結ぶつてこの政教を握らうとする輩の上層階級と

の政事は正當の政事をもふいし日本人民の爲に

政事も政事でもふいし、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

吾輩「お前の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

其の事、其の事、其の事、其の事、其の事、其の事

あふたはよみ人前が空まで行く意に人前を一身  
 とてその責任を背へたことばかりの彼、人前  
 店因家、運送の店、山さとは旅、自ら海  
 に死に任せしのみあつた。信厚はふて死なう  
 死ぬはよみ人前、もんあつた身へふら思は成  
 利成利と成り

若日、めめてふも人ふふふ、想ふ前には神の足へ  
 傾かたまふ、ふふふふ、大層とふふふ

のほ一人を強止して重傷を負ふの状。それと  
 同様の一箇、四重を乗船の凶家或は人殺し、凶生  
 活を営んで居るや、ふのび、夏の今り春へふ

昔日、強室の一人ふふふ、ふは、捕らぬ、巨頭  
 ヒットマンの現れも聞かぬ、ふらう、ふらう、

若して日本軍閥が、自滅し直らう、ふらう、ふらう、

日本の日本人民の將來を憂へる

我々は日本人民の義務として、一日  
 も早く彼らを打倒して日本人民を

解放し、併せて遠東諸民族の自由、  
 世界の社会を前進せしめねばならぬ、

のだ、それは日本革命のみが我々  
 に残された唯一の正しい人間の道だ。

中国抗日と連携して日本革命を

早めるのが、在華日本人の唯一の義

勇な人は

中野下

告日、戦士に考へて下さい。実は私も足がけの信念  
 が、この運命の本義以上に善しみました。お互に

世界人民として共同して死線を懸て共内陣に戦  
 打つて互を強く強く空を打ちませうと

平年、有難う、あふたの是れが、我々の運命だ、

# 時局展望

江見 編

ミツ合議に於いて、既に主動の地位に立つる諸國の作戦は先づこれを、遠東に於ては香港及び日本の作戦に基き、中東に於つた日本がアラブ半島の心臓に肉迫せんとし、歐州に於ては、本島島の遠征と露に克敵ナクハ、ドイツの最後の牙城に迫りんとしつゝある。

英法合作戦軍大臣 モンパトン海軍大臣、新に東兩亞州軍艦司令に任命された。西軍を待たざるを得ず、印度セイロン島に於ける艦隊を置き、艦隊にビルマ日軍を破滅せしむるモンパトン司令は印度に於ける十月十六日重慶に艦隊を率へて、今後中國と香港に共同作戦の必要を感じた。今後中國と香港に共同作戦の必要を感じて東南亞州の日本がアラブ半島を待たざるを得ず、印度セイロン島に於ける艦隊を置き、艦隊にビルマ日軍を破滅せしむるモンパトン司令は印度に於ける十月十六日重慶に艦隊を率へて、今後中國と香港に共同作戦の必要を感じた。

38  
九月十五日、英米の停戦協定十三ヶ條が宣佈された。歐州行爲の停止、政府の移定、ドイツ對盟國一

の使用、等々……イタリ軍はドイツへ敗走し、反抗を開始した。ドイツ軍はマラカ島の由緒より脱走し、北郭境境アリマナに於て新堡壘軍を築き立て、見張を張つてあるが、それをも斷不慮の戦後の心算の差極きに違ふべし。

地中海の記者軍は盟軍の艦隊下に入つた。八十隻の艦隊が盟軍上の共同作戦の下に遠東に移動し、やがて陸空のビルマ攻撃と同時進行して、九月時中東を占領し、日本軍部を破滅せしめ、日本が迫りんとしつゝある。

パリオリオの対ドイツ戦線に對し、日英兩國は義勇しつゝ、英法同盟軍を援助して行く。

パリオリオの戦線は至る所迄に最善を示す、日英は一切の善後措置をとり、勝利に向ひ進軍するであらう。

口先では安成飛り、果ふり人民を以て戦と断絶し、勝利し、勝利しと人民の耳目を偽飾しつゝも、議會を再三再四開催してゐる同盟軍表し、前敵の狂想曲である。

破本むせむらうにてあり。既にキムツク高嶺は目  
前に通つた。

前に通つた。

應上キムツク高嶺の志願は以て西側に傳説し、西側よ  
りは東軍の志願はより。今や東軍の志願は東側  
にあり。あるチキス。...

ナホリも。...

リ。...

一。方。...

...

...

...

...

...

生産の増加。...

...

...

...

# 東京市内配給制度風景

絵 三三 立・池上 敏夫



お菓子の買物も楽ぢやないかア  
 こんか、店先に待つてる人がるるん  
 だり、先づ、先づ、順番を待ちま  
 せう



そ、順番が廻り来て見たら、是は如何に!!  
 菓子の配給を待つてる行列とばかり思ひ  
 ませ、知らざりし……サント、  
 餓死者の町舞の、  
 焼香者の行列とは!



# 白い自轉車

汐見 卓

怖い思の事を追つて裏町人生を渡り行く人の姿よ

★一月十日……何んて春だもこんな氣持のムシ

りとする快晴の日はあるものかと思ふ程大氣の良

い日だった。それにも増して今日と云ふ日は此の庵に

とつては忘れられる日だ。深し廻つて……そま度丁度

わの府有事件がわづから満八五日の今日。本道に

も探し求めてぬ大津田判事の住所が判つたのだ

奴も意外にも庵の下府から三丁とは隔らぬわの手

通りの座敷町に正法を罪乞と稱へ安閑とすま西して

なる……か。……探月の三時退かて人の春と来て

行つた庵……津田の家であらうとは……燈台元時し

とは此の庵……事だんを此れもこの出来

名の……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

除と……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来

……此れ……津田……事だんを此れもこの出来



ふのこがあらがた、夫の春の傳の同書の運脚の

日、此方からい、浦を、津田の野原に下流

の道よりぬも、こが判れば遊歩するに違ひない取以

結を此の道に下しなげおなうぬ。

女一月十五日、千町十時遊歩の四ツ目通りを奥居

二名を来して八國の森林帯に送る為、公園通り下

をこがらるて遠に會つた、津田判平に日、此取以日遊

比波の最近の旗を桐葉に似れ亦に見るもこが此取

夫の、任所が判つてから度か一日日津田の奥を

見るとこが出来るとは日、旗の色はほそも奥と

なつて金網東京よりサになり、体も取つて金網東京

をわけてゐる折は、二丁四高の事か夫、奥を見れば津

田では判らぬ柱に置つてゐる、こが奥に来つた奥居不

又、こがの散歩より、こが夫のこがらつたりし

て、こが、津田を見るこが出来るとは

夫の、目と空つた自轉車に乗り、送し、こが

下道に上つてゐる夫が、奥を見れば夫のこがこ

と風呂帯りに入口の居居屋の奥居に似ぬ夫は判平

今迄は余り歌に行つても津田のこがをこが、こが

なつた夫が、こが、こが、最近は奥と野原

へ、こが、こが、こが、丹念に、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが、こが

何が余を苦しんだ以上、若しあやもんだ、女は若もれ故  
 ともいふにしよう、ゆつゆりして精神的に生命を短く  
 してやめんだ、何んかお喜しくなつて来やがの天、  
 だが一日も早く習字の類が見たいものだ、

★一月二十三日……公休で助手の五日が過ぎたに於て  
 一杯のつらさを云ふ、中肉をつつあつている中に、  
 つつ夕若の顔でしまつた、アアア……神の喜ぶまで、  
 云ふ深頂の世を嘆む、俺には小説はある程大うえ  
 へ、津田を殺し抱もない、盡して数字の断を現つて  
 うまくやれば可能であるのだ、此の頃は所々頭がぼん  
 やりして困る。

★一月二十五日……公園りで別荘の敷き草を食ふ  
 俺が自動車運転手とは野郎草むしり御清知  
 たいのだから面白いよ、奴の自動車は國産品が  
 自慢だ、それ連小車の中の方眼を直の儀にして流し  
 りて女が押してゐることも知らなへんだ、奴が奴が  
 乗るのは、今より上手でない様だ、

★一月三十日……やがた、川、遠くやつた月八年  
 末の汽船運大由なるか、俺が殺したのと同然  
 にはよくやがた、御座りあるよ、よいて……

中々度の後な凡うう頭でも捨てたものでもないぞ、  
 大津運れを載せて新町への街道、何百の通り、  
 何の運門へ、何の運門へ……

平の娘が公園通りを走らんだ車と、俺を走らせた  
 はずいかに、俺でうした大を、平郎度門を  
 乗進して、俺が自分同手作とではないか……  
 正月、今大い思ひ直したう子を、入れて、平郎  
 の御座り、大で、直に馳れば、……



公園通りを過ぎて津田の野原、河が流れる。危ぶらし

く、細道に入り、道を尋ねてみる。四丁許、走って山

を平過り、不祥も無縁の坂道に途中は来た時、恰好

の石で死んだと悪うた。後、命は再び来たから、前か

ら下走、新馬車は、火傷を車に高く積み上げて、坂道

を走らぬが、何となく下りて来た。で、なにか!! 新馬車の

後方から、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

何となく、何となく、何となく、何となく、何となく、

大石を失った石が、何となく、何となく、何となく、

全身打撲し、血を吐き出して、即死か、怒らに、

も、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、怒らに、

完

山 静

さうして村中切つて

争つてんとする事は道徳を破るる積火だ  
久しい前庭田の奥は消さぬ・露に其細々と  
塵埃の無血の道徳に不孝を學ぶ

競争にけさつた世徳の風は

何人と言ふの血と流し無常の境に過りやうた

目のまぶさ眼の一時の休息をなく

野も人も人も競る切つた風が吹き飛ばさぬ

主知といふ主知は枯れ・故葉は覆ひとられ

西風あらしの舞舞の風流は道よがり

朝日への影を凍らす人は舟月に書を立て

手袋を袖の外に挿れ香への霞宵の影分はあつた

今宵の寒であるのも教へり水す磯のやうに

世とりの香の車へ小窓を身と遊人とする

可憐い女性は無後の身附て風は静寂れ

休息とする屋内の温泉は競争の遠くに吹きかけ

空をまき着加にもりつく島もなき

静寂の海の方方に集える煙火だけ

空を静かに上昇する煙火

互々たる黒煙の白は神秘的空を指しなす

人懐主治に油のやい温泉に湯田を宿つてゐる



通りすがりの人の言は左様に鋭く  
感情が露せられこめて現像と視線は  
一列、一列

大自然の川流より神寄るる波瀾は  
動といわす静寂の心

涙涙くしと霞の暮む暮の目へと  
客船なく冬期のみまのま知らす

直ぐは使わりの冬期に今更ぬべら  
の不安と……  
無々の世界は春を待てて必皆枯れ切つた

とうだ此の暮きにわかれは

史が！ 心と空を盛ぬる史が！

自身ばかりではな 誰の風流も

此れる運交まり船本切つた草木へ送り替れた

もろ切入るこの枯れ切つた社会が

探えることと知る所は切つてある

今迄 / 歴史の今こそ

野原の歴史の由て長せり水を口史

歴史も人も風も・ところさうわす史と移せ！

其に人しい間

人目に就あり小くもに變りの歴史と誰か描く

山里で露る露連者合やかうま……  
せしてその上に紙に流うる社会と打ち連る人だ。

(八景)





いふなりを見せ、水ははじしよく、と平放と罵りし

の由と、彼等の所を、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

角倉と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

用と見ると、此處、此處、此處、此處、此處、

ひびくやうな声だ、だが、此の聲は、此の聲は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

と、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、彼等は、

海軍の上陸隊、皆口々に甲板へ集結した。  
船はしおし波を差のす海へ向へと進んだ。船長は  
はだか／＼と身をよぎる姿に見  
大あくなつた。

兵士たちは黙々と裏切  
りれたかの如く、口々に  
銃や手を振りいつし、か  
うく／＼と船倉へ下りて、  
汗と煙の舟にひたつてあ  
た。

洒保は曇日あつた。英  
い部屋の中にどつしり立  
つち小／＼ゆるぎなく進  
撃子頭は兵士達の連発的  
殺戮によつて深く用ひ  
ておき、今日今日今日  
爆に突つてゐるだけであ  
る。兵士達は、足し  
出知のな／＼と知りつ  
ても、洒保と戦つて居る

して見た。洒保は船と夏つて飲んだ。



戦者常風一暮島は洒保を山砲隊の兵士と集の會つて取  
つて来たパイナップルの大隊と無差別に砲撃する  
皆に並の心を離れ、船倉を  
つて来たのだ。

夕方兵士達は船倉の  
足踏一十米程の海よと疾  
走してゐる一足の煙を  
ま見た。白い波が甲板の  
船倉から噴水の如く噴  
き出るとある。この水は  
兵士達の血を流して来  
た。兵士達は、船倉の  
・船倉で死す。水の清  
水を出してゐるためであ  
る。夜に大つて波が少し高  
なつて来た。  
今日は五月十日、陸軍  
紀念日である。兵士達  
は、船倉のな／＼に早く入り  
脚を踏む。兵士達は、船

時の上衣と靴を脱ぎ、船倉のな／＼に早く入り、脚を踏む。兵士達は、船



多量に食事を採り、手番は足早に夜番兵とが今  
 ムツガセ食事を上げに急いだ。今日は何日によつて御軍  
 定規であるといふのである。

中軍帳で蒸気釜から取り出される煮りに白元とわかるめ  
 味を走って、各隊の当番兵は早湯を少し色味  
 加つた事食と配分された。

「オイー！　これが陸軍記念日の御祝ひがし赤飯と  
 汁と黒一色とぞして、海軍の買った兵士達は不意と  
 心分しはがらうを取つた。御料金の兵士はアルと  
 強き持つて通り集めた道で、道場よく購つてゐる。彼  
 等のウツパンは古先に集和する土味覚の黄色い濃海に  
 少しでも着け込んで行つたのである。」

野放蓮のまずむ無量の方あり、その声が大きく聞  
 えて来た。源兵んや健勝の軍がいづも取つてゐる豊  
 敷の広の御屋を兵士達が良く覗いて、薄々の素田で感  
 に見たいと、とつて、あやう所の団体があつた。

新夜重の召集の響り、油煙戸は今度とて、兵  
 士達は星淡の著る天井板を見つた、最も遠くの人  
 声の線に、なるまで相耳を立て、めた。

その夜、大井中隊の隊長、中隊長が、各  
 隊が歩調くつた、多量に、兵士達は野舎の中央に

多量に、直前に、下らぬと、御料金を

手置野舎に相手を送り、来た。軍に、兵士達。  
 運命が少し、その、軍、兵士、兵士、兵士、  
 の、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 運命と、兵士の、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 運命も、兵士達、兵士達、兵士達、兵士達、兵士達、  
 歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 カツ。貴様、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 が、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、

續いて階段と、さう、さう、さう、さう、さう、さう、  
 が、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 兵士、兵士、兵士、兵士、兵士、兵士、兵士、兵士、  
 つて来た男だつた。

「畜生ン！　甲校入校たの、何で、何で、何で、  
 星隆の波と功、親父の、何、何、何、何、何、何、何、何、  
 が、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 の、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、

彼が、甲校で、月、月、月、月、月、月、月、月、月、  
 が、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 ある。彼は、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 した。

「全に見て、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、  
 が、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、歩、

附近に居てゐる兵士達は無言で并一待兵の姿  
業と變て居てゐた。磯は居た時より死か感じ。

階級の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

煙草の上で兵士達の火用の煙草をその儀、

影すべく、本型おえうる島嶼に向かう。彼の春風は  
少しも急ぎ勢が現れてゐない。兵士達は一種の情緒を感ず  
磯の長沙を指した。

「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」

「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」

「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」

「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」

「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」

「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」  
「オレイ、磯の長沙を指した。」

# 主 催 本 社 編 輯 部

日 本 三 十 二 年 十 月 十 八 日

日 時

日

和 平 村 接 待 會

場 所

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

日 軍 將 兵 座 談 會

新 村 民

南 支 方 面 軍 第 百 三 師 團

全

中 支 方 面 軍 第 三 十 五 師 團

全

第 六 十 八 師 團

全

第 十 五 師 團

全

混 成 第 十 七 旅 團

全

第 四 十 師 團

全

華 中 鐵 道 公 司 社 員

中 支 方 面 軍 第 十 三 師 團

全

第 十 五 師 團

全

北 支 方 面 軍 第 三 師 團

全

中 支 方 面 軍 第 一 師 團

第 一 師 團

少

上 等 兵

普

二 等 兵

一 等 兵

少

上 等 兵

普

二 等 兵

一 等 兵

少

上 等 兵

普

二 等 兵

一 等 兵

少

上 等 兵

普

今 本 一 男

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

本 橋 常 務

兼、只今の東亞艦隊は主として海軍を以てなす。先づ若くは  
に本社を代表して出席された方々に對して感謝の意を表します  
皆さんは一番新しく四角の海軍艦隊から到着される人です

から最近の日本軍艦の事情をよゝ知つて居られることと思は  
れます。どうか遠慮せずにお發表して貰いたいのです。

日本を商賈でめぐる者は戦前の日本の認識が異なるので  
今尚ほ日本は昔のままと思つてゐる方が多しうす。だから

日本軍艦の战斗力や戦艦の直航能力を知つてゐるのです。  
もう何人々に聞かせたい為にも本日は充分に意見を交換して  
貰は度いのです。片本さんに同會の事を願ひます。では片本さ  
んどうぞ。

米國機の空襲に對して如何

片本、では便宜上快の進行速を動かさせて貰ひます。我々は火戦  
機と銃艦機と聞かして居るのです。本日の火戦機を先づお話し下  
さい。では此機を入らう。最近堅固地盤の日本兵士諸君

は米機の空襲に對してどんな感想をいふか。居りますか。  
答、先般は地盤の頃は空爆や空中戦を前面の對つてゐましたか。  
次第に怖くつて来ました。又おらうと防空五連命令が嚴重に  
達せられてゐます。

重、昨年が敵機の空襲が大部分頻りにして居  
ました。今も南島九州迄を面して空襲が頻りにして居  
ます。米機は此空飛行が、最近の海軍の一大特色として居  
ます。

空襲は米機と同一の驚く同様に二つの致死性を出したことが  
あります。機銃は僅か五機くらいです。仲々勇敢に操縦して  
居ます。

片本、出雲方面でよく米機の空襲飛行を觀察せることがありませ  
んか。それは地を掃射の爲に受けた方の兵士、死者、舟車等と  
爆薬に束ねた米機が口吹式戦闘機と違つた場合に依  
空飛行の技術を操つて居たのです。これは昔の技術では  
違つた今の空中戦に在つては、敵機より下に在るといふこ  
とが戦場に有利だからです。又超々ロケットで依空飛行  
された場合も、射撃も仲々村山は困難な事です。

片本、石井さん貴方は海軍の東洋の兵士ですか。どうです。  
日本軍の防空を改善するは、

片本、僕が今年一月に敵地に在る時は、もうすでに高射砲は備  
へられて居り、仲々空襲が嚴重でして、防空監視機の飛  
行機で遠く敵艦を襲撃と知らる。素早く高射砲は射  
撃準備をし、敵機が遠く彼方になる内に猛烈に射撃するの  
です。何故かといふと、つまり威嚇だけを使ひます。と  
うな態度で、同様に命令したことはいふいふが、上空に来て  
敵艦を襲撃されるより、遠くから直つて敵機を遠くまで  
送つてよい。即ち敵機を遠くまで送つてよい。と

片本、出雲の飛行機場には高射砲と高射機が備へて  
居る。米機は此空飛行が、最近の海軍の一大特色として居  
ます。

片本、出雲の飛行機場には高射砲と高射機が備へて  
居る。米機は此空飛行が、最近の海軍の一大特色として居  
ます。

片本、出雲の飛行機場には高射砲と高射機が備へて  
居る。米機は此空飛行が、最近の海軍の一大特色として居  
ます。

片本、出雲の飛行機場には高射砲と高射機が備へて  
居る。米機は此空飛行が、最近の海軍の一大特色として居  
ます。

片本、出雲の飛行機場には高射砲と高射機が備へて  
居る。米機は此空飛行が、最近の海軍の一大特色として居  
ます。

片本、出雲の飛行機場には高射砲と高射機が備へて  
居る。米機は此空飛行が、最近の海軍の一大特色として居  
ます。



と云ふのは、米紙の空位が全面的に乏しい。又實際に  
相当の土地を有してゐるが、米紙の供給が不足する  
原因で通信不通等て一般に米紙不足の傾向が多いこと  
等々、新聞紙の不足も新聞紙には発生しないから、復たは電  
信通信以外のことには少しも判らぬので、

新聞紙及び手紙は手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？  
米紙の供給が不足して新聞紙手に入りますか？

12

てんとう虫



ますか  
冷涼大王の歌



まの陽合市ゆふり

とてまのりあ

まのりあ

歌

奉、七年新儀の成軍して、その頃以て成地給養は平野の月夜給

養の二、五、河判増を以て長命に規定を以て、その人

で、その、今をどうかして、おるん下りか、

林、付養の内地に被るも、よつて、その苦を、下すか、

現在、その給養額、不、おる、内地、その、内地、に、

給、その、その、その、その、その、その、その、その、

新、その、その、その、その、その、その、その、その、

長、野、給、養、は、大、大、大、大、大、大、大、大、大、大、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

奉、その、その、その、その、その、その、その、その、

其、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

奉、外に、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、

其、二、面、目、す、本、五、二、何、何、何、何、何、何、何、何、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

その、その、その、その、その、その、その、その、その、

奉、外に、何、何、何、何、何、何、何、何、何、何、



...は...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...



...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

...の...  
...の...  
...の...  
...の...

なるも、臨時軍費七條より三上までに上る位下す。...

て皆上には成つて居ます。

買へんです。

奉、事変河割増給つた受へず。

は、昨年七百からです。最初九割増し。後

に十二割増しに成つたんやうな。

奉、増率は所謂「親心」に依つて上の者

の他業的に依つて是れ上へ入りますか?

彼に依つて理由が異なりますか?

兵士の不満を怖れてとか。

奉、それもあるが物價が上つたの事や去る

なく増率に依つては異合です。物價

上之のに物價を上げなければ兵隊は

局意をなするし、若年上も成る所いし、...

各局の寛容して増率を減らす。最近軍費が...

たですらうね。

奉、然し給料は上げや賣つても、日本へ商品は...

くふつたし、強制貯金はさせては、... 実際何人に

もあらん情態です。

奉、將局日本内地も改地も同じことですか。

奉、強制貯金はどのやうな積ませる積まぬです。...



奉、小林さん、貴方此処まで貯金通帖を折つて来まし

た。

小林、ハア、あれが例の天引き貯金のやつです。

今思へば怒めし、存正です。

奉、ワコハツハツ、... (天声曾定)

奉、内地からの送金は行はずか?

は、増率を出して結局は本軍需不足が足らん

から兵隊は色々な手段で支えて金を親元か

ら送らなくてはならず、個人が或地の地方商人の

右儀を借手送らせるとかね、中流に送れば

... 中流に送れば

... 初年兵だつて、今の初年兵は...

... 送つて貰ふのに親元と貯金で...

... 送金させます。

... 送金させます。

... 親子で押送する故だね。

... 親馬鹿で扱はず、停を破

... 送つてお返しの上、また金まで送つて...



第一百五十三号 皇族府より... 皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

皇族府に送るべきものを...

# 和平村便り

本社特派員



十五日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

「光輝」の現劇は百舌の拍手

を以て迎へられた。尚、庵長は

村民に押し金一封の贈物を贈ら

り、詞義はその意に深く感謝し

るのである。

二十日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

「光輝」の現劇は百舌の拍手

を以て迎へられた。尚、庵長は

村民に押し金一封の贈物を贈ら

り、詞義はその意に深く感謝し

二十日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

「光輝」の現劇は百舌の拍手

を以て迎へられた。尚、庵長は

村民に押し金一封の贈物を贈ら

り、詞義はその意に深く感謝し

るのである。

二十日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

「光輝」の現劇は百舌の拍手

を以て迎へられた。尚、庵長は

村民に押し金一封の贈物を贈ら

り、詞義はその意に深く感謝し

るのである。

二十日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

二十日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

「光輝」の現劇は百舌の拍手

を以て迎へられた。尚、庵長は

村民に押し金一封の贈物を贈ら

り、詞義はその意に深く感謝し

るのである。

二十日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

「光輝」の現劇は百舌の拍手

を以て迎へられた。尚、庵長は

村民に押し金一封の贈物を贈ら

り、詞義はその意に深く感謝し

るのである。

二十日、中田証十字通庵長等

一行の和平村訪問であった。夜は

数回演説大会を催し、一行の滞情を

喜んだ。数回演説に際して新編演劇

和事村ておけぬ我故郷道界の活躍  
振は金く素晴らしいもので、産産道  
道の電報を「道産道産」九州道  
況、文政の状況「道産道産」産産に  
普通道の新聞「エリス」より十日も早  
く報道し、村民の睡后認識に使ふ  
わしの「村民」招待する「こころま  
び大なるものがある。

新生班研究社に於ても、産産道界手  
によつて組織を以て「話し合」大  
出来、最近の道産道産は「こころま  
壁紙に討論会に「道産道産」の  
資料「女軍持」も「道産道産」の  
の雄弁は、別、研産道産の  
「和事村」に於ける「女軍持」の  
人民戦戦の一翼をふり、更に又在

華日人民戦戦の一翼として、將  
来の「道産道産」を以て和  
事村の「道産道産」を以て和

又も秋の「和事村」を以て和事村  
である。又一「道産道産」の  
・道産道産・コロント「大余り信  
・道産道産」は「道産道産」に  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の

十月に「道産道産」の「道産道産」  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の

東産道産「道産道産」の  
和事村に於ける「道産道産」の  
は常に注目されるのであるが、各軍の  
大戦中頭に「道産道産」の「道産道産」

「道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の

「道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の

「道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の  
・道産道産」の「道産道産」の

特輯

東亞先鋒友之會編成大會

一九四三年七月一日

於貴州鎮遠和平村

綱

領

一 復原先鋒社之主義

一 復原先鋒社之主義

一 正義、真理、進取

一 中國抗戰上之協力

一 民主革命之貫徹

一 在華日水人民之融和親睦

一 睦卜革命力量之結集

以上

東亞先鋒友之會

役員

高松幹事

新田幹事

赤任幹事

幹事

長谷川

秋上

井筒

林

青木

藤井

森田

江川

洋本

(此項大會於上述)



善治を爲す爲すは、國民の義務に依つて起るべきなり。今、世界各國は、全ち民主國體に陥へたと稱する。然るに、  
此の所謂民主國體の全ち、民衆の良法は、ツアノズムハの法を、國民にして全球に蘇々たる權利の武裝を、國民に  
ツアノズムハは、打倒の心せず、不作為に陥り、餘餘を保持してゐるに過ぎず、彼等國體の法は、日一日と進歩の一  
途を、進んでゐると言ふ事実に、よつて明かである。

日本帝國を、其の進歩の途程の中に、進んで來て居る。其の途程の中に、及ぼすの前途に、懸念してゐる  
と云ふは、正しくない。

其の決意を、國民が、其の進歩の途程の中に、進んで來て居る。其の途程の中に、及ぼすの前途に、懸念してゐる  
と云ふは、正しくない。

此處に、我々が、日本人民は、當然、其の故郷、日本帝國、ツアノズムハの國體に、其の進歩の途程の中に、  
進んで來て居る。其の途程の中に、及ぼすの前途に、懸念してゐる。其の進歩の途程の中に、進んで來て居る。

見よ。日本人民は、其の進歩の途程の中に、進んで來て居る。其の途程の中に、及ぼすの前途に、懸念してゐる。  
其の進歩の途程の中に、進んで來て居る。其の途程の中に、及ぼすの前途に、懸念してゐる。



東亞先鋒之友會成立紀念

世界和平路所從 須知東亞是先鋒

消滅侵略斷絕暴 真理研究有正宗

自覺覺人盡友 宣揚大道助良多

同躋仁域追民主 定挽沉痾啓泰和

東亞先鋒社社長 莫敬儀 謹賀

和平村東亞先鋒之友會開幕紀念

堅持正義促進世界和平

應贊助東亞先鋒之友

軍政部特別黨部直屬  
第三序虜收容所  
区分部題贈



# 東亞先鋒友之會同志に贈る

狂乱醜態相搏つる世紀の嵐の中に巖然屹立する正義人民の堡壘。是こそ友侵略人民防戦である、人民戦線の  
 鉄の隊伍ニ七將に明日の輝ける勝利に邁進する空力闘争体である。此の鋼鐵の巨龍たるの意義を自覺し人  
 民の敵ヲアシストに苛噴太き闘争を宣告する唯一の人民の旗東亞先鋒に結集せる広汎なる在華日本人  
 大衆諸君！諸君こそ日本人民戦線の若外克隊としての中国に於ける堅強なる前敵堡壘たるを知らぬば  
 からぬ。

東亞先鋒に結集せる友之會同志諸君よ！諸君は諸君の勝利の自覚確信せよ。全球を取巻く友侵略  
 人民戦線の反抗の力量を知れ！諸君は決して、諸君だけの熱をせる集團でないことを充分銘記せねばなら  
 ぬ。如何に反動の嵐は荒か、如何に奸悪の魔手は猛くとも、吾等友侵略人民戦線の結集せる大陸の熱沙を機  
 切り險阻重疊の山岳を起え、七つの春の巨濤を乗り知り、血肉の友愛と不運戰の闘争心とに結ばれ  
 て、壯嚴にして且つ巨大な大行進を起してあるのだ。在華日本人同志諸君よ！見よ、此の大行進の使  
 方、輝ける民主勝利の殿堂こそ、諸君の一切の全心を捧げて懽かき正義の目標ではないか。

友の会の同志よ、諸君は堅く肩を組め、そして恐るゝことなく、止ることなく、勝利に向か唯ならずの途を邁  
 進せよ！それが諸君の若き人生の一切であらねばならぬ。我等東亞先鋒社は諸君の隊伍の進歩と二つ、何  
 時如何なる所に非常にもその陣頭に適應として唯一の人民の旗東亞先鋒を掲げ、諸君を取巻く友  
 智と奸悪の一切を別滅し、諸君の行路に横はるあらゆる障害を粉砕し、諸君と共にたゆみなき前進を  
 継続することを誓約すると同時に、東亞先鋒は日本人民たる諸君の事であり、東亞先鋒は常に諸君  
 と共にあることを此處に宣言して本日の誓ある大會の祝辞に代へるものである。

民国三十三年十一月一日

# 東亞先鋒友之會の成立に際して

藤 原

北アフリカ盟軍の徹底的勝利が、歐洲の戦場は天軸  
を定めた。盟軍のシシリー島占領は遂にムッソ  
リニ政權の崩壊とあり、再生せる伊太利は茫然と、  
ヒットラーに向つて宣戦した。ヒットラー政權の崩壊  
も今や時間の問題と云つたのである。

釋つて東亞の戦局を見るに、忠勇ふる中國軍の徹  
底的反叛と在華米空軍の活動、緬甸に於ける盟軍  
の活躍、南太平洋上に於ける米海空軍の、力著  
は日本軍部の崩壊を決定的にした。

斯かる国際的客觀條件を前にして、我々は四年  
來の主張たる日本民主革命の才二階階としてこのフ  
アツシヨ軍部絶滅を以つて元軍部闘争を更に加強レ  
具體化するの必要を痛感せしむるために努力レ、誠  
身して来た。

元軍部元侵暴のための在華日本人民の全力量  
の集中、ニルニ在華日本人民の誰れもが熱望と  
あることであり、夫が、我々獲得の目標を待つて  
ゐた。此の我々の苦痛を一番よく知つてゐる我々  
の慈父、美鶴村長は自ら先頭を立つて、此の日本  
人民力量の集中の第一歩として「東亞先鋒友

を設立せしむる。我々「東亞先鋒」とを冠し、  
在華日本人民の元軍部闘争、民主獲得の闘争  
に全面的援助を予へてゐる。

我々は村長の其の主旨に附り、在華日本人民  
の協和を計り、中國植民地掃カレ以つて日本民主  
革命達成を期するに、茲に「東亞先鋒友  
之會」を組織せられたる。

今や日本軍部は人民を更に屠殺場と造り、  
最後の冒險をおさんとしてゐるが、ニルニ却つて  
日本天皇制の土台を自ら墜り送す。他の者で無い

我々は刺意をかう日本軍部を一日も早く絶滅せ  
しむ。更に日本人民、吾全人類の繁榮のため、  
平和的民主日本を建設せねばならぬ。

我々はそのために在華日本人民の全力量を集  
中し、最後の任務達成のため、粉骨碎身する覚  
志を以つて、所長の主旨を全面的に支持すると  
共に、我々が「東亞先鋒友之會」の増加拡大のため  
邁進するものである。

(完)

# 東亞先鋒友之會成立について

山川 要

光榮ある国際人民解放の英勇的良政は復讐集團の一  
 個ムツシキモノ政權を以て崩壊せらるゝヒツトラー政權  
 の崩壊も、今も時局の問題にいたらしめ日本フアンス  
 こそ、並々高橋の守勢に轉じた。

かゝる凶暴情勢は全人類に人民解放の意義を明  
 瞭に顯した。予こそ、誰が人類の敵であるか、誰が人  
 類の幸福のためを願つて来たか、砲火の中を呻吟する  
 人類は覺醒し、革命の努力の増強は遂にフアンス夫  
 配下に控制されてきた人民民族として跋扈させ、人民  
 解放の陣營に大石の力量を加算した。

この時、本年八月、狂暴の東亞先鋒は露れ見  
 に到つた。果敢なる勝負を提議する我が同志達かフア  
 ンス革命の進展に對する途の障碍者にならうとした。これ  
 は契機とした在華日本人民の統一戦線が形成せられたの  
 絶対的基盤に對し八月二十一日の朝鮮有事に反對して、反抗  
 戦と提げ、日本民主革命を奮闘する組織の形に、百  
 數十名の日本人民による「東亞先鋒友之會」の結成式  
 を挙行した。

實にこの東亞先鋒友之會の結成こそ在華日本人民の

この東亞先鋒友之會の結成は、統一戦線を組織し、これに  
 なるを以て、所以を述べて見よう……

今年十月末年前、即ち一九二九年、三二年まで  
 に世界帝國主義は、世界的經濟恐慌の深刻なる影  
 响を食ひ、日本も同様には、人民は飢饉の失業者  
 と増殖した。その時、資本家、地主は天皇の保護の  
 下に經濟恐慌の苦痛をすべて人民の肩に押しつけ、一層の  
 下を搾取し、丘迫した。その結果、増殖せる人民の先鋒者  
 たちが、革命の戦いと、人民の生活改善を要求せしめ、陣營  
 した。その時、人民の革命の戦いの要求を抑制した支配階  
 級は、数千人の先鋒者を殺害し、或は口を封鎖して人民を  
 包圍し、一方では以下の方々の欺騙的を宣傳をした、……  
 日本は領土、資源の市場である。もし日本人民の生活  
 改善を希望するならば、朝鮮を犠牲にせよ、武力と  
 脅威して大陸を侵略することである、……  
 かくて、支配階級は、在外戦争によつて、国内の反  
 帝主義の人民闘争を解消させ、同時に人民を反抗にし  
 て、自己の資源市場獲得のため、中国征服を企圖した

政治の中心を握りて皇權の元氣を削ぐ。遂に一九一八年  
の對露と對韓の、滿洲と朝鮮、四洲並立を首領し  
た。

此の様に政治の上には、それは、然るで、中た日本人民の  
の生活が改善されぬが、人民は依然として彼等と  
流血の犠牲をせらるる上、彼等がの武器を作らた  
め搾取と、農民は耕馬まがと貧小、物資は戦争の  
ために消耗し、漸しい生活の改善を望む。一方  
資本家階級は、海山の利権を盡し、彼等は、  
貧乏で働く者だ。

彼等は、遂に人民の事情と、戦争に反対する人  
民を迫害し、人民を強迫し、半回工運、戦争と所帯  
した。だが、人民が少しでも幸福にならば、否、既に  
百五〇万の同胞は、野に歸し、飢え切つた人民は  
世界戦争の真只中に捲き込まれ、運命を回す事  
無き。其の先、マニラ、宿務、セブ、パナイ、  
ミンダナオ、ボルネオ、フィリピン、  
主、被ば分子をば、戦争のためを犠牲にした。

これは、戦争の結果、將來日本人民の、  
あるが、人民には、戦争の結果、  
ば、戦争の結果、戦争のためを犠牲にした。

日本人民の、戦争の結果、戦争のためを犠牲にした。

得たものは、向の仇恨も、  
幸々永遠の敵意をつくり、  
名前の争闘の捲き戻にならなければならぬ。

我々のこの政治から見れば、  
と不平的に取り替へてある。人民は、  
民族を殺戮して自己の権益を獲得せんとする帝國主義  
が存続しては、我々人民は永久に奴隷はぬ。だから、  
日本人民の政治は、国内上層の階級を、  
我々人民は、この元氣、  
搾取者も、奴隷者も、自由と平等を、  
設けてこそ、戦争の不幸から免れ、  
救はれる唯一の道である。

我々日本人民は、  
争闘の結果、戦争のためを犠牲にした。  
我々の政治は、戦争のためを犠牲にした。

一九一三年十一月一日、

一九一三年十一月一日、

# 東亞先鋒友會之成立大會

一九三二年十一月一日



**訓練班**

執行委員  
林長吉

人良の  
号座

**研究班**

執行委員  
滝淳  
岩永巖  
立花謙

人良の  
潮

月刊立憲雜誌

**群像**

編輯 山口武

**新生班**

執行委員  
青木大  
野木大  
今水一

人良の  
戲

半月刊

**めざまし新聞**

編輯 飯永



近日公演

- 原作 吾妻鏡人
- 監督 池上敏夫
- 演出 坂井三郎
- 効果 鏡山一

新編劇團直展

場所 和平劇場

指導 飯永

農村の幸福を表現

革命の熱情を

表現する

代表 飯永

△新協劇團

代表 飯永



# 編輯後記

此處に一九四三年度の最後号として第二号を發刊する。何しろ熱誠な投稿者が多過ぎ、原稿の整理と屢違に編輯部は忙しむる忙しむるを見てもある。

蔣主席閣下の説文紹介は日本人の討論誌誌と一層明瞭にするためである。

同宛に呼びかける澤村幸雄君の情熱のアツピール。並に自由ドモツ民議委員會宣言は其に諸君の熱誠を乞ふ。

更に日軍將兵合所座談會記事と東亞先鋒友之會の紀念文集は本社の特許の特許の特許である。

我等の第二号は一九四三年の同盟増号として、明年の希望に燃え、全日本同人宛へプレゼントする。

同宛に、明年の勝利に確信を持って！  
我が社は更に横文増強されたる紙列の陣頭に人民の旗を高くかかげる。

(並)

## 編輯

本社發刊「東亞先鋒」ハ定数ノミニ印刷  
二限レルモ持ニ定数外配布ノ希望アル方  
面ニハ一部ニ拾元ヲ以テ増刷發送スルニ  
付、直ニ必要部數申込マレタシ。

隔月發行

## 東亞先鋒

第一卷 第二期

日民國三十三年十一月五日發行

編輯責任者

康川

印刷責任者

舒慈僧

印刷所

東亞先鋒印刷社印刷局

發行所

濱州 榮達 福平村

東亞先鋒印刷社

社長 莫敬儂

非賣品



無庸上演版。

轉載・翻譯

